石見銀山

Iwami Ginzan Silver Mine Site

― 下河原地区 豊栄神社・大谷地区 徳善寺上墓地 ―
の石造物調査

令和6（2024）年8月

島根県教育委員会・大田市教育委員会

石見銀山

下河原地区豊栄神社・大谷地区徳善寺上墓地の石造物調査

令和六(二〇二四)年八月

島根県教育委員会・大田市教育委員会

石見銀山

Iwami Ginzan Silver Mine Site

― 下河原地区 豊栄神社・大谷地区 徳善寺上墓地 ―
の石造物調査

序

島根県と大田市は、平成９年から石見銀山遺跡について発掘調査や文献調査など総合的な調査を行ってきました。こうした調査成果は、平成19年度に、「石見銀山遺跡とその文化的景観」の世界遺産登録として実を結びました。そして、登録後もその歴史的な位置づけをより一層明らかにするため、調査を継続しているところです。石造物調査もこの総合調査の一環として当初から取り組んでおり、これまでに銀山500年の歴史の一端を明らかにしてきました。

本書は、令和４年度に実施した、石見銀山遺跡下河原地区に所在する豊栄神社境内の緊急調査及び、令和５年度に実施した、大谷地区に所在する徳善寺上墓地における石造物調査の成果を報告するものです。

豊栄神社境内の調査では、昭和18年９月の台風水害により埋没していた石造物が再確認されました。銘文の刻字された多くの石造物を調査し、幕長戦争後の長州藩軍の駐屯者による寄進状況が明確になりました。

徳善寺上墓地の調査では、石見銀山から温泉津・仁摩方面への出入口となる坂根口・畑口近くに造営された16世紀末から17世紀前半にかけて造営された有力な墓群であることが確認されました。

これらの調査成果は、石見銀山とその周辺地域における歴史や信仰のあり方を如実に物語るもので、今後の調査研究の基礎資料となるものです。

最後に、この調査に際して御協力いただきました関係各位に厚くお礼を申し上げますとともに、本書が今後の調査研究のみならず、遺跡の保護や整備活用、さらに歴史学習において広く活用していただければ幸いです。

令和６年８月

島根県教育委員会

教育長　野　津　建　二

例　　言

1．本書は、石見銀山遺跡総合調査の一環として、令和４年度・令和５年度に実施した石造物調査の報告書である。

2．調査した場所は以下のとおりである。
　　豊 栄 神 社　大田市大森町ホ211番地
　　徳善寺上墓地　大田市大森町ホ292、ホ291-2ほか

3．調査は次の組織で実施した。
令和４年度
　石見銀山遺跡調査整備活用委員会
　太田洋子（熊谷家住宅家の女たち代表）
　大矢敬子（島根県国民保険団体連合会常務理事）
　川口　純（DOWAホールディングス㈱執行役員）
　苅谷勇雅（大田市伝統的建造物群保存地区保存審議会委員）
　黒田乃生（筑波大学芸術系教授）
　佐々木愛（島根大学法文学部教授）
　田邊征夫（（公財）元興寺文化財研究所所長）
　津村眞輝子（（公財）古代オリエント博物館研究部長）
　内藤ユミイザベル（日本イコモス国内委員会理事）
　仲野義文（石見銀山資料館館長）
　中村哲郎（中村プレイス㈱専務）
　松村恵司（奈良文化財研究所所長）

令和５年度・令和６年度
　石見銀山遺跡学術戦略会議
　粟野　隆（東京農業大学地域環境科学部教授）
　會下和宏（島根大学総合博物館教授）
　岡　美穂子（東京大学史料編纂所准教授）
　黒田乃生（筑波大学芸術系教授）
　下田一太（筑波大学芸術系准教授）
　下間久美子（國學院大學観光まちづくり学部教授）
　仲野義文（石見銀山資料館館長）
　福本理恵（株式会社SPACE CEO・東京大学未来ビジョン研究センター客員研究員）

事務局（島根県教育委員会文化財課）
令和４年度
　中島正顕（文化財課長）、津森仁（世界遺産室長）、岩橋孝典（同企画幹）、間野大丞（同主席研究員）、渡邊悟（同企画員）、倉恒康一（同専門研究員）、渡部麻生（同専門研究員）、清水佳那子（同会計年度任用職員）

令和５年度
　村上かおる（文化財課長）、新田晃久（世界遺産室長）、岩橋孝典（同課長補佐）、田原淳史（同課長補佐）、渡邊悟（同主幹）、倉恒康一（同専門研究員）、渡部麻生（同専門研究員）、清水佳那子（同会計年度任用職員）
令和６年度
　村上かおる（文化財課長）、藤原秀樹（世界遺産室長）、岩橋孝典（同課長補佐）、田原淳史（同課長補佐）、倉恒康一（同専門研究員）、渡部麻生（同専門研究員）、小村雪（同主任主事）、清水佳那子（同会計年度任用職員）

石造物調査指導者
　池上　悟（立正大学名誉教授）
　佐藤亜聖（滋賀県立大学人間文化学部教授）
　西尾克己（松江市文化スポーツ部松江城・史料調査課松江市史・松江城部会長（令和４・５年度））

調査参加者（職名は調査時のもの）
　島根県教育委員会　間野大丞、岩橋孝典、渡部麻生
　大田市教育委員会　中田健一（石見銀山課課長補佐）、生田光晴（建造物係長）、山手貴生（同主任）、矢部俊一（同主任）、新川　隆（同会計年度任用職員）、尾村　勝（同会計年度任用職員）

４．調査に際して、下記の方々から御協力、御助言をいただいた。記して謝意を表したい。
　野津英夫（豊栄神社総代）、内田貞義、仲野義文

５．実測図・写真・拓本等は石見銀山世界遺産センター（大田市大森町イ1597-3）において保管している。

６．本書の執筆・編集は岩橋が行った。

凡　　例

・石造物一覧表には、豊栄神社、徳善寺上墓地に所在する石造物を掲載した。
・各石造物の規模は基本的に高さ及び最大幅をセンチメートル単位で掲載した。欠損している場合は残存している規模を（　）内に記載した。
・銘文は戒名が書かれている面を正面とし、向かって右側を右面、左側を左面、反対側を背面としている。複数の面に銘を持つ場合は、正面）…　右面）…　と記載している。
・銘文の欠損等は、文字の個数がわかる部分は□□、判読不明部分及び文字の存在が推定される部分は［　］で示した。また推定できる文字は□の後に（ｶ）と表示した。
・実測図を掲載していない石造物についても一覧表に掲載し、今後の研究の資料とした。
・写真図版及び挿図の個別番号は一覧表の番号に対応する。
・徳善寺上墓地の石造物の型式分類は、島根県教育委員会・大田市教育委員会2005『石見銀山遺跡石造物調査報告書５　分布調査と墓石調査の成果』および、島根県教育委員会・大田市教育委員会2024『石見銀山遺跡石造物調査報告書21 ― 分布調査と墓石調査の成果（2005-2022）―』による。

本文目次

第１章　石造物調査の目的・対象・経緯
　第１節　調査の目的 …… 1
　第２節　調査の対象 …… 1
　第３節　調査の経緯 …… 1
第２章　石見銀山遺跡の位置と歴史
　第１節　石見銀山の位置と地質学的背景 …… 5
　第２節　石見銀山の歴史的背景 …… 5
　第３節　豊栄神社の位置と歴史的環境 …… 8
　第４節　大谷地区徳善寺上墓地の位置と歴史的環境 …… 8
第３章　豊栄神社境内の石造物調査
　第１節　調査の経緯について …… 11
　第２節　調査の経過と方法 …… 13
　第３節　石造物の概要 …… 13
　第４節　石造物の造立時期 …… 27
　第５節　豊栄神社境内の石造物配置復元 …… 27
　第６節　小結 …… 32
第４章　徳善寺上墓地の石造物調査
　第１節　調査の経緯と調査地点の名称について …… 34
　第２節　調査の経過と方法 …… 34
　第３節　石造物の概要 …… 36
　第４節　徳善寺上墓地の特質 …… 54
　第５節　小結 …… 64

挿図目次

第１図　石見銀山遺跡全体図（1/50,000） …… 6
第２図　石見銀山銀山地区全体図（1/25,000） …… 7
第３図　豊栄神社周辺図（1/2,500） …… 12
第４図　豊栄神社 石造物実測図(1) 灯籠１（1/20） …… 14
第５図　豊栄神社 石造物実測図(2) 灯籠２（1/20） …… 15
第６図　豊栄神社 石造物実測図(3) 灯籠３（1/10） …… 16
第７図　豊栄神社 石造物実測図(4) 大小鳥居（1/30） …… 18
第８図　豊栄神社 石造物実測図(5) 狛犬台座（1/20） …… 19
第９図　豊栄神社 石造物実測図(6) 玉垣１（1/10） …… 21
第10図　豊栄神社 石造物実測図(7) 玉垣２（1/10） …… 22
第11図　豊栄神社 石造物実測図(8) 玉垣３・特殊品（1/10） …… 23
第12図　豊栄神社 石造物実測図(9) 建築部材（1/10） …… 24
第13図　豊栄神社　寄附物品姓名記簿 …… 30
第14図　豊栄神社境内石造物配置図（1/300） …… 31
第15図　徳善寺上墓地周辺地形図（1/1,000） …… 35
第16図　徳善寺上墓地全体地形図（1/600） …… 37
第17図　徳善寺上墓地東半部地形図（1/300） …… 38
第18図　徳善寺上墓地西半部地形図（1/300） …… 39
第19図　徳善寺上墓地の石造物種別 …… 40

第20図　徳善寺上墓地　石造物実測図(1) 一石五輪塔（1/10） …… 42
第21図　徳善寺上墓地　石造物実測図(2) 一石宝篋印塔１（1/10） …… 43
第22図　徳善寺上墓地　石造物実測図(3) 一石宝篋印塔２（1/10） …… 44
第23図　徳善寺上墓地　石造物実測図(4) 組合せ宝篋印塔１（1/10） …… 45
第24図　徳善寺上墓地　石造物実測図(5) 組合せ宝篋印塔２（1/10） …… 46
第25図　徳善寺上墓地　石造物実測図(6) 組合せ宝篋印塔３（下段）(1/10) …… 47
第26図　徳善寺上墓地　石造物実測図(7) 下段小型塔（1/10） …… 48
第27図　徳善寺上墓地　石造物実測図(8) 地蔵・無縫塔等（1/10） …… 49
第28図　徳善寺上墓地　石造物実測図(9) 石廟１（1/10） …… 50
第29図　徳善寺上墓地　石造物実測図(10) 石廟２（1/10） …… 51
第30図　徳善寺上墓地　石造物実測図(11) 石廟３（1/10） …… 52
第31図　徳善寺上墓地　石造物実測図(12) 石廟４（1/10） …… 53
第32図　徳善寺上墓地における墓石紀年銘の出現頻度 …… 54
第33図　徳善寺上墓地の性別・年齢による石造物の型式選択状況 …… 55
第34図　石見銀山遺跡内の浄土宗墓地における梵字種字の用例（1/20） …… 56
第35図　石見銀山型石廟の変遷（1/50） …… 58
第36図　徳善寺上墓地　石廟分布図（1/600） …… 59
第37図　山吹城南西麓における土地利用の変遷（その１・２）(1/3,000) …… 62
第38図　山吹城南西麓における土地利用の変遷（その３・４）(1/3,000) …… 63

表　目　次

第１表　豊栄神社石造物調査一覧表（令和４年度分） …… 25
第２表　豊栄神社境内石造物の造立過程表 …… 28
第３表　徳善寺上墓地　石造物一覧表 …… 74

写真図版目次

写真図版表紙
写真１　豊栄神社の今昔
写真２　豊栄神社燈籠部材（上半部）
写真３　豊栄神社燈籠部材（下半部）
写真４　豊栄神社大鳥居
写真５　豊栄神社小鳥居
写真６　豊栄神社小鳥居の右柱刻字
写真７　豊栄神社小鳥居の左柱刻字
写真８　豊栄神社狛犬台座
写真９　豊栄神社玉垣部材
写真10　豊栄神社石造物の地中保存及び燈籠再設置状況
写真11　徳善寺上墓地下段岩窟
写真12　徳善寺上墓地一石五輪塔
写真13　徳善寺上墓地一石宝篋印塔（その１）
写真14　徳善寺上墓地一石宝篋印塔（その２）
写真15　徳善寺上墓地組合せ宝篋印塔
写真16　徳善寺上墓地無縫塔・地蔵ほか
写真17　徳善寺上墓地石廟

第１章　石造物調査の目的・対象・経緯

第１節　調査の目的

石見銀山遺跡は中世から近世（特に戦国時代から近世初頭）、さらには近代へと長期間にわたって形成された遺跡である。石見銀山遺跡では開山から閉山に至るまでに、繁栄期・停滞期・近代復興期のあったことが明らかになってきている。この歴史過程を遺物や遺構といった考古学的事実に即して詳細に明らかにするとともに、さまざまな角度から鉱山遺跡としての特性を把握することにより、石見銀山の実態に迫ることが求められている。

本遺跡における石造物調査は、銀山の操業に関わった人々の信仰や葬送儀礼の実態解明を進めるとともに、社会経済の営みとその変遷の一端を明らかにすることを目的として実施している。

第２節　調査の対象

一概に石造物といっても①墓碑、石塔、石仏、寺社に奉納された燈籠・鳥居・手水鉢などの信仰関連石造物、②石臼や要石などの生産関連石造物、③街道沿いの道標などの交通関連石造物、④石切り場など生産地・流通関連石造物、など多種多様なものが認められる。それら全てが石造物調査の対象となることは言うまでもないことであるが、現実には限られた時間・人員等の制約も多く、全てを調査することは困難である。

したがって、本石造物調査においては、上記の４つの区分のうち、墓制関係の遺構群・遺物群の様相、すなわち墓地とそれを構成する墓石が、銀山の操業に直接または間接的に関わった武士・鉱夫・職人・商工業者とその家族等の存在ぶりを具体的に物語る資料であり、鉱山の盛衰（人口の増減等）をより直接的に反映するものと考えた。また、寺社へ奉納された石造物は石見銀山に居住する人々の具体的な信仰の在り方を示す資料と考えられることから、①の信仰関連石造物を主な対象として重点的に調査を実施し、先に挙げた目的追ることとしている。

第３節　調査の経緯

石造物調査（墓石）は、島根県教育委員会が石見銀山遺跡総合整備計画策定のため、昭和60年度に徳善寺跡などで、天正から慶長年間の紀年銘石塔を中心に一部の確認調査を実施したことが発端となっている。

平成９・10年度には石見銀山遺跡総合調査の一環として石造物調査が実施されることとなり、仙ノ山山頂周辺の石銀地区と龍源寺間歩上・妙本寺上墓地の調査が実施された。この調査では、石造物のグルーピングを心がけ、各群の規模と石造物の種類、あるいはその消長を押えるため、紀年銘を持つ墓石の調査を重点的に進められた。墓石調査地の選定を発掘調査と連携した結果、天正や文禄年間の紀年銘のある墓石が発見され、古い墓石の存在する地区は採掘や生活をしていた時期も古い可能性が高いことが明らかになり、発掘調査箇所の選定にも有効であることが判明した。

こうした石造物調査の有効性が確認されたことから、調査の継続と計画の必要性が、石見銀山遺跡発掘調査委員会により指摘され、平成11年度からは以下の３つの調査を総合的に行うこととなった。

①鉱山全体の石造物の傾向や変遷を把握し、悉皆調査の必要箇所について判断材料を得るための分布調査。

②特徴的な墓地の構造や変遷を把握するために行う悉皆調査。

③発掘調査等で得られた成果と関連付けるため、発掘調査地周辺の石造物やその他の資料について関連調査。

これら３つの調査のうち悉皆調査については、①銀山地区・大森地区に位置する、②群としてのまとまりが明確に把握できる、③アクセスが容易である、④調査環境が比較的よいなどの条件を満

たした墓地のうち、重点的に本遺跡の最盛期といわれている戦国時代から江戸時代前半の墓地を選び、継続的に調査する計画をたてた。

この方針に基づき、石造物調査は平成11年度から分布調査・悉皆調査・関連調査の組み合わせによって行われるようになり、妙正寺跡の悉皆調査を皮切りに６箇所の寺院墓地を中心とする悉皆調査、及び銀山柵内・大森地区の分布調査が実施された。これらの調査成果については、既に報告書が刊行されている。

平成16年度にはそれまでの調査成果をまとめ、検討を加えた報告書も刊行され、銀山柵内・大森地区における石造物調査は一定の成果を得るに至っている。

その後、平成17年度からは港や街道など周辺部における石造物の実態を把握するため、温泉津地区における調査が開始されることとなり、これまでに恵珙寺、西念寺、金剛院、極楽寺の悉皆的調査と分布調査が行われた。なお、温泉津地区での石造物調査は、温泉津伝統的建造物保存対策調査や港湾調査、街道調査の際に実施されている。

平成22～23年度は、平成９・10年度に分布調査を行っていた石銀地区の悉皆調査を実施した。石銀地区は石見銀山に於ける初期鉱山業の中心の一角であり、墓Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの悉皆調査を通して、奉行・代官墓にも匹敵する規模の石塔群が樹立されていることが判明した。

平成24年度は、平成24～25年度の落石防護柵設置予定地に本経寺墓地（大谷地区）があり、多数の石造物が存在することが確認されたため、こちらの悉皆調査と試掘調査を実施した。

平成25年度は、栃畑谷地区の市道大森三久須線の治山事業対象地である字甚光院周辺に石造物がまとまって存在することが確認されたため緊急的に悉皆調査を実施した。

また、大谷地区の高橋家裏の要害山南麓では、自然災害防止事業の対象地内に石塔が数基確認されたため調査を行った。

落石対策事業等の緊急調査以外には、清水谷地区本法寺跡にある銀山町役人・門脇家墓所と下河原天満宮跡で調査を実施している。

平成26年度は、石銀地区の墓地・石造物の全容を明らかにするため、同地区で未調査であった、墓Ⅰ、墓Ⅱ東、墓Ⅲ東、墓Ⅳ、墓Ⅴの悉皆調査を行った。

また、栃畑谷地区字甚光院についても、平成25年度調査地に隣接しながらも未調査であった南東側斜面と南側平坦面で悉皆調査を行い、墓域全体での変遷を把握することができた。

平成27年度からは、大田市教育委員会によって発掘調査が進められている昆布山谷地区を調査対象とし、石造物の様相や墓地の年代を明らかにするとともに、同地区の変遷について検討する資料を得ることとした。当年度は、同地区で古い石造物が密集する妙本寺上墓地E地点の悉皆調査を行ったほか、妙本寺上墓地Ｇ地点や虎岸寺跡墓地において銘文の調査を実施した。

平成28年度は、前年度に引き続いて昆布山谷地区の妙本寺上墓地を調査対象とし、群中でも最も古いと見られていたＡ地点について悉皆調査を実施した。

平成29年度も引き続き妙本寺上墓地のＢ、Ｃ、Ｄ、Ｆ、Ｈ地点の調査を行い、３年間にわたる妙本寺上墓地の調査が完了した。

平成30年度は妙本寺上墓地の北西側に位置する龍源寺間歩上墓地の調査を実施した。約250基以上の石造物が確認されたため、令和元年度も継続して調査を実施した。

令和２年度～５年度にかけて、これまでの四半世紀におよぶ調査成果をまとめる総括報告書を作成した。成果のひとつに石造物の編年がある。本遺跡では1570年代から石塔の造立が始まっているが、周辺地域では、さらに古い14～16世紀前半にかけての在地産石塔が確認されている。本遺跡の石塔を在地産石塔の変遷のなかに位置づけるため金皇寺（仁摩町大国）と温泉津町湯里の石造物について調査を実施した。

また、令和４年度には豊栄神社の石造物調査を

実施した。これは保存修理工事のため境内地堆積土の漉き取りを実施したところ、昭和18年水害で倒壊埋没したものが再出現したものである。平成13年度調査成果と併せて、慶応２年～３年にかけて幕長戦争に勝利した長州藩駐屯軍による石造物寄進状況が明らかになった。

令和５年度は、これまであまり注目されていなかった坂根口・畑口番所跡に隣接する大谷地区・徳善寺上墓地について悉皆調査を実施した。分布調査で報告されていた周知の概数の３倍以上にのぼる石造物が確認され、17世紀初頭を中心とする一大墓群であり、かつ相当に有力な鉱山師達の墓域である可能性が明らかとなった。

ここでは、石見銀山周辺を含めた他の墓群では確認されていない加装飾の宝篋印塔や、11基の石廟など特色ある墓塔群や廟所が確認された。

[参考文献]

1　島根県文化財愛護協会1986『石見銀山関連遺跡分布調査報告』

2　島根県教育委員会・島根県文化財愛護協会『石見銀山遺跡総合整備計画策定報告書』

3　島根県教育委員会他1999『城跡調査・石造物調査・間歩調査編』『石見銀山』第３分冊

4　島根県教育委員会他1999『民俗調査・港湾調査・街道調査編』『石見銀山』第６分冊

5　温泉津町教育委員会1999『1999　温泉津』

6　島根県教育委員会・大田市教育委員会2001『石見銀山遺跡石造物調査報告書１－妙正寺－』

7　島根県教育委員会・大田市教育委員会2002『石見銀山遺跡石造物調査報告書２－龍昌寺跡－』

8　島根県教育委員会・大田市教育委員会2003『石見銀山遺跡石造物調査報告書３－安養寺・大安寺・大龍寺跡・奉行代官墓所外－』

9　島根県教育委員会・大田市教育委員会2004『石見銀山遺跡石造物調査報告書４－長楽寺跡・石見銀山附地役人墓地（河島家・宗岡家）－』

10　島根県教育委員会2004『石見銀山街道－鞆ヶ浦道・温泉津沖泊道調査報告書－』

11　島根県教育委員会2005『石見銀山街道－鞆ヶ浦・沖泊集落調査報告－』

12　島根県教育委員会・大田市教育委員会2005『石見銀山遺跡石造物調査報告書５－分布調査と墓石調査の成果－』

13　島根県教育委員会・大田市教育委員会2006『石見銀山遺跡石造物調査報告書６－温泉津地区恵珠寺墓所－』

14　島根県教育委員会・大田市教育委員会2007『石見銀山遺跡石造物調査報告書７－温泉津地区の石造物分布調査と西念寺墓地悉皆調査(1)　－』

15　島根県教育委員会・大田市教育委員会2008『石見銀山遺跡石造物調査報告書８－温泉津地区の石造物分布調査と西念寺墓地悉皆調査(2)　－』

16　島根県教育委員会・大田市教育委員会2009『石見銀山遺跡石造物調査報告書９－西念寺墓地(3)・安原備中墓・大光寺墓地－』

17　大田市教育委員会2009『重要伝統的建造物群保存地区大田市温泉津伝統的建造物群保存地区　保存対策調査報告書（補訂版）』

18　島根県教育委員会・大田市教育委員会2010『石見銀山遺跡石造物調査報告書10－金剛院墓地・本谷地区周辺・中正路の石造物－』

19　島根県教育委員会・大田市教育委員会2011『石見銀山遺跡石造物調査報告書11－極楽寺墓地・温泉津沖泊道周辺の石造物・石銀地区－』

20　島根県教育委員会・大田市教育委員会2012『石見銀山遺跡石造物調査報告書12－仙ノ山石銀地区墓Ⅲの調査－』

21　島根県教育委員会・大田市教育委員会2013『石見銀山遺跡石造物調査報告書13－本経寺墓地の調査－』

22　島根県教育委員会・大田市教育委員会2014『石見銀山遺跡石造物調査報告書14－栃畑谷地区字甚光院の石造物調査－』

23　島根県教育委員会2014『石見銀山－大谷地区　本経寺墓地発掘調査報告書－【山吹城南西麓の郭遺構の調査】』

24　島根県教育委員会・大田市教育委員会2015『石見銀山遺跡石造物調査報告書15－石銀地区墓Ⅰ・墓Ⅱ東・墓Ⅲ東・墓Ⅳ・墓Ⅴの石造物調査－　－栃畑谷地区字甚光院の石造物調査－』

25　島根県教育委員会・大田市教育委員会2016『石見銀山遺跡石造物調査報告書16－昆布山谷地区妙本寺上墓地Ｅ地点・Ｇ地点　虎岸寺跡の石造物調査－』

26　島根県教育委員会・大田市教育委員会2017『石見銀山遺跡石造物調査報告書17－昆布山谷地区妙本寺上墓地Ａ地点の石造物調査－』

27　島根県教育委員会・大田市教育委員会2019『石見銀山遺跡石造物調査報告書18－昆布山谷地区妙本寺上墓地Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｆ・Ｈ地点の石造物調査－』

28　島根県教育委員会・大田市教育委員会2020『石見銀山遺跡石造物調査報告書19－栃畑谷地区龍源寺間歩上墓地・妙像寺墓地の石造物調査－』

29　島根県教育委員会・大田市教育委員会2021『石見銀山遺跡石造物調査報告書20－保国山金泉寺(仁摩町大国)－』

30　島根県教育委員会・大田市教育委員会　2024『石見銀山遺跡石造物調査報告書21－分布調査と墓石調査の成果(2005-2022)－』

31　島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会 2002『石見銀山遺跡調査ノート』１

32　島谷芳雄　2008「温泉津金剛院の宝篋印塔基礎について」『石見銀山遺跡調査ノート７』島根県教育委員会・大田市教育委員会

33　大田市教育委員会　2009『重要伝統的建造物群保存地区大田市温泉津伝統的建造物群保存地区　保存対策調査

報告書（補訂版）』
33　間野大丞　2010「長州藩勇力隊が寄進した石製用水桶」『季刊文化財』一二三　島根県文化財愛護協会
34　守岡正司2011「石見銀山石造物調査の概要」『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書１』島根県教育委員会・大田市教育委員会
35　西尾克己・東山信治2016「大田市内の中世石造物」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究６』　島根県教育委員会・大田市教育委員会
36　島根県教育委員会2019「松林寺遺跡」『垂水遺跡・松林寺遺跡・廃寺石塔群』島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
37　伊藤創・西尾克己　2020「江の川流域の福光石系石塔の様相」『池上悟先生古稀記念論文集　美碧峰の考古学Ⅱ』株式会社六一書房
38　伊藤創・西尾克己・持田直人　2021「邑智郡美郷町・下波多野家墓地における石塔・墓標の変遷」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』13 島根県教育委員会・大田市教育委員会
39　西尾克己・蟹中光輔・持田直人　2022「邑智郡美郷町元山根家墓地の特質と墓標の変遷」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』12 島根県教育委員会・大田市教育委員会
40　間野大丞・伊藤徳広　2022「テーマ別調査研究「港町温泉津の景観と変遷」における石造物調査－中間報告」「保国山金阜寺石造物調査報告（補遺）」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』12 島根県教育委員会・大田市教育委員会
41　大田市教育委員会　2023『豊栄神社保存修理工事報告書』
42　間野大丞　2023「温泉津町湯里の中世石造物」『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書５　港町温泉津の景観と変遷』島根県教育委員会・大田市教育委員会
43　間野大丞　2023「中世石造物からみた温泉津」『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書５　港町温泉津の景観と変遷』島根県教育委員会・大田市教育委員会
44　間野大丞　2023「石見銀山遺跡周辺の宝篋印塔－搬入品と在地品の調査から－」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』13　島根県教育委員会・大田市教育委員会
45　岩橋孝典　2023「石見銀山遺跡石銀地区に所在する篆刻体文字を刻書する墓石について－16世紀末～17世紀初頭における知識層の存在－」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』13　島根県教育委員会・大田市教育委員会
46　岩橋孝典　2024「島根県最古の「皇紀元」紀年銘について－慶応三年建立の豊栄神社小鳥居－」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』14　島根県教育委員会・大田市教育委員会
47　間野大丞・伊藤徳広　2024「石見銀山遺跡の墓石」『日引』第19号　石造物研究会

第２章　石見銀山遺跡の位置と歴史

第１節　石見銀山の位置と地質学的背景

島根県は、日本海に面して東西約180km余りの長い県土を持ち、古代律令制以来の旧国単位では、「出雲」「石見」「隠岐」の３国からなる。石見銀山は、このうち「石見国」の東部、いわゆる「石東」といわれる地域に位置し、現在の行政区分では大田市に所在する。

石見地域では、江の川や周布川、高津川等の河口近くに若干の平野は広がるが、海岸部まで山地が迫っており、大規模な沖積平野は見られない。

石見銀山遺跡の中核をなす仙ノ山（標高538m）は、前期更新世（約100万年前）に火山活動をおこした大江高山火山群の北西部に位置している。大江高山、矢滝城山、葛子山、要害山、馬路高山などから構成されるこれらの山々は、「溶岩円頂丘」に分類され、粘性が高いデイサイトで山体が形成されている。

仙ノ山の山体は、角礫火山岩やデイサイトの貫入岩体、凝灰角礫岩等を母岩とする。鉱脈には、鉱染鉱床型の福石鉱床、鉱脈鉱床である永久鉱床という２つの鉱床がある。福石鉱床の鉱石鉱物としては自然銀、菱鉄鉱を主体として、黄銅鉱などの含銅硫化鉱物やビスマスをほとんど含まない。

また、永久鉱床では黄銅鉱、黄鉄鉱を主体とし、輝銀鉱、自然銀、ビスマスなどが含まれる。

第２節　石見銀山の歴史的背景

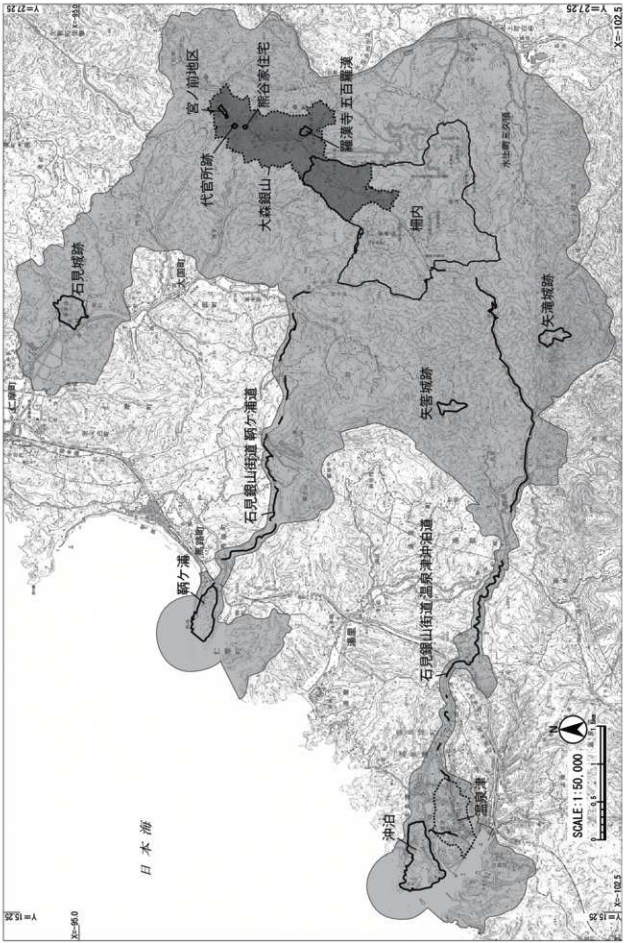
平安時代末期に、石見銀山周辺を包括する大家荘という大規模な荘園が成立し、その後、中世には石見銀山周辺に多くの荘園、国衙領が成立する。

南北朝期には、周防・長門の守護であった大内氏が石見国守護を兼任するが、応永の乱（1399）で敗れ、石見守護職を没収される。しかし、義弘の弟・盛見は、応永８（1401）年には大内氏の家督を実力で奪取し、石見国のうち邇摩郡を分郡として知行した。この分郡知行は大内政弘の代にも引き継がれた。永正年間（1504-1521）に至ると大内義興が石見一円の守護権を奪回した。

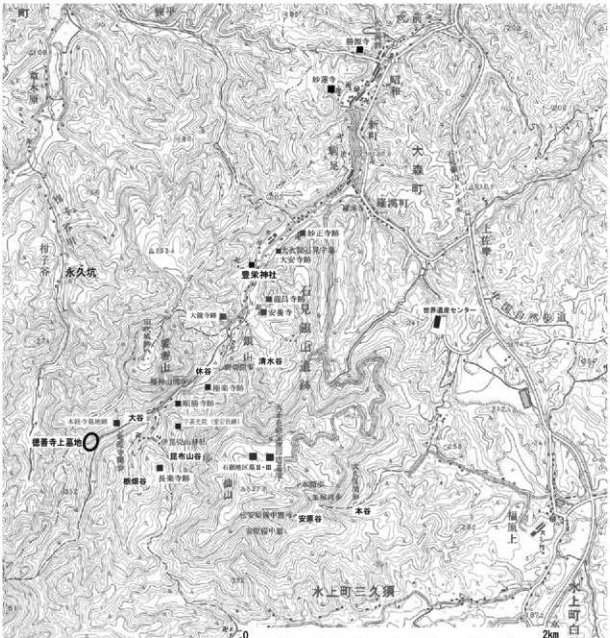
戦国期の大永７年（1527）に石見銀山が発見される（大森町清水寺の寛永２（1625）年の本堂再建棟札）。『銀山旧記』には発見者が博多の有力商人神屋寿禎と記されている。大内氏は博多の有力商人と結び、中国との勘合貿易を独占的に行っており、大内氏の支配下で石見銀山の本格的な開発が行われるようになった。天文２（1533）年には鉛合せ吹きが伝えられ、現地で製錬が行われるようになり、石見銀山の産銀量は急激に増大した。大内氏や尼子氏、毛利氏により銀山領有をめぐる争奪戦が行われ、それに伴い多数の城館跡が銀山周辺や街道沿い、港周辺に普請されている。1560年代前半には毛利氏が尼子氏との銀山争奪戦に勝利し、石見銀山の支配権を確立した。

江戸期に入ると、石見銀山がある邇摩郡・安濃郡は石見銀山附御料に編入され、幕府直轄領となった。江戸初期は、初代奉行、大久保長安の経営により銀山は繁栄期を迎え、この頃の年間産銀量は約10,000貫（約37.5ｔ）と推定されている。寛永期を過ぎると、良鉱が乏しくなったことや、坑道が深くなり湧水処理に多大な経費を要するようになったことにより、採算に合わない間歩は採掘が停止された。延宝元（1693）年以降の記録によると、産銀量は年間約300貫（約１ｔ）前後で推移し、幕末頃には年間約50貫（0.187ｔ）を下回る状況であった。

明治維新後は、しばらく地元有志による小規模な経営が続けられたが、明治19（1887）年に大阪に基盤を置く長州系企業の藤田組が経営に乗り出し、近代的な鉱山開発が行われるようになった。近代の主要産品は銅で、明治後期から大正初期には第１次世界大戦期の軍需景気にも乗り隆盛をみた。しかし、第１次大戦後の銅価格低下を背景として大正12（1923）年に石見銀山は休山した。



第１図　石見銀山遺跡全体図（S=1/50,000）



第２図　石見銀山遺跡銀山地区全体図（S=1/25,000）

第３節　豊栄神社の位置と歴史的環境

豊栄神社は大田市大森町下河原ホ211番地に所在する。寺伝によれば、永禄４（1561）年に毛利元就が山吹城内に自作の木像を安置し、元亀２（1571）年には孫の毛利輝元が洞春山長安寺を建立し安置したとされる。

しかし、本来長安寺に伝来し、元禄14（1701）年に萩藩に預け置かれた毛利元就木像について近年の調査研究により新事実が明らかとなった。この木像胎内の墨書に記された由緒書から、元就の家臣である林就長が天正13（1585）年にこの木像を大仏師山本右京に依頼して制作し、石見銀山大谷に毛利元就像を安置したことが長安寺の始原であることが確実となった（目次2013）。

江戸時代に入ると元禄元（1688）年の破損や元文年中（1736～1740）の大火による焼失を経て、寛延２（1749）年に現在の下河原の地に移転をしている。

江戸期を通じて無檀家で、寺領も13石前後と僅少であったことから、再建や修理などの際には長州藩・毛利家から寄附を受けていることも知られている（遠藤2002）。

このように長安寺は経済的に富裕とは言い難い状況にあるなか、嘉永２（1849）年には火災により堂舎が焼失している。元治２（1864）年には、安濃郡剌鹿村・圓光寺から東流和尚が入山し再建を期するがこの時、幕長戦争（第二次長州征討）が勃発する（矢野2014）。

慶応２（1866）年７月、幕長戦争石州口の戦いで勝利した長州藩軍は大森に進軍・駐屯し、翌月長安寺に藩祖毛利元就公の木像が安置されていることを知る。これにより、翌慶応３年にかけて長安寺御霊社が長州藩により再建整備されることになる。

この時、御霊社本殿・拝殿の建築物だけでなく境内地や玉垣、随神門が整備された。また、境内地や参道には駐屯中の長州藩有志や諸隊が挙って鳥居、燈籠、手水鉢、獅子狛犬、玉垣などを寄進したため狭隘な境内地は石造物が林立する状況であった。

明治３（1870）年２月年に宮中から「豊栄」の神号勅許があり、同年５月に正式に豊栄神社に改称され、今日まで神社として存続している。

昭和18（1943）年９月には、台風水害により境内に寄進された石造物の半数が倒壊埋没の被害を受けている。当時は戦時中でもあり、人手や物資が不足する中、十分な復旧はなされなかったという。現在、豊栄神社の境内でみられる石造物は当初のままのものもあるが、水害から復旧されたものもある。構成石材の組合せが異なる燈籠や狛犬があることもこのためである。

昭和40年代の豊栄神社を描写した石村勝郎の記録では、当時狛犬は行方不明であったという（石村1971）。同じ頃の伊藤菊之助の『石見の石造美術』の掲載写真では、角型燈籠の足元に狛犬が置かれている写真が掲載されており（伊藤1968）、現在の状況に至るまでには曲折があったことが想像される。

第４節　大谷地区徳善寺上墓地の位置と歴史的環境

徳善寺上墓地は、大田市大森町ホ292、ホ291-2ほか（大谷寺ノ上エ、大谷徳善寺下モ）に所在する。現在、徳善寺跡とされる市道沿いの平坦地からみて背後の山地斜面に所在することから、「徳善寺上墓地」と呼称している。この山塊は山吹城跡のある要害山から南西に延びる丘陵の南東側斜面にあたる。市道部分は標高220m前後であり、丘陵尾根部は標高280m前後である。墓群の立地する斜面の勾配は、平均40度の急斜面であるが、そのなかに狭長な平坦面を複数段造成して、墓塔を造立している。

石見銀山柵之内の墓群のなかでも、一際厳しい立地条件であり、16世紀末～17世紀中頃の造墓期間を過ぎると新規の造墓は停止され、墓域の拡張も行われていない。

さて、「徳善寺上墓地」については、昭和62（1987）年の『石見銀山遺跡総合整備計画策定報

告書』の石造物記載の中では冒頭に紹介されるなど、古くから石見銀山遺跡を代表する墓域と認識されていた。天正十年の紀年銘のある一石五輪塔や、岩窟に納められた大型宝篋印塔が存在することもここで既に紹介されている（島根県教委1987）。

石見銀山遺跡の総合調査が平成９（1997）年から開始され、徳善寺上墓地周辺の分布調査は平成13（2001）年４月に実施されている。その成果は2005年刊行の『石見銀山遺跡石造物調査報告書５　分布調査と墓石調査の成果』に掲載されている（島根県教委・大田市教委2005）。

ここでの紹介は、名称が「徳善寺跡墓地」であり、墓地の構成内容が一石宝篋印塔50基、組合せ宝篋印塔２基、一石五輪塔１基の合計53基というものであった。

名称についての詳細は、第４章で詳述するが、本報告では「徳善寺の背後上方の山中に立地」するという地勢的な観点から「徳善寺上墓地」として報告する。

徳善寺上墓地が立地する大谷地区の南西部は柵之内と外部をつなぐ「坂根口番所」、「畑口番所」に近く、温泉津方面や柑子谷方面の街道を通行する人々が頻繁に往来する地域として知られる。

上記の番所付近に立地する寺院として、「松林山 徳善寺」と「松林山 定徳寺」がある。「徳善寺」は、慶長17（1612）年頃に釈教順が石見銀山大谷地区に開基した浄土真宗寺院とされる。ただし、大谷の中で「坂根畳屋向」から「番所の上ミ」に移転し、今の「番所の下」に移転したのは18世紀末～19世紀初頭と推測される。

幕末期には檀家も減少したため、明治６年に島根県令に提出した移転願書が残されている。その後、遷摩郡大国を経て、明治44年には那賀郡旭町（現浜田市）に移転し、現存している（三瓶古文書を読もう会1995）。

現在、徳善寺跡とされる付近をみると浄土真宗の墓域は、飯田屋の代々墓地が知られるが慶長期に遡るまとまった墓群は知られていない。このことは徳善寺が大谷の奥部から数回移転したという伝承と調和的である。

一方、定徳寺については、寺院の創建や宝永年間の吾郷村（現美郷町）移転とその檀越について先行研究がある（西尾・持田2024、三瓶古文書を読む会1995）。

それによると、開基は天正年間であり、法譽慶公が開山とされる。二世超譽が住職であった天正17（1589）年に後陽成天皇から「定徳」の宸翰を賜っている。文禄四（1595）年には本山知恩院の輪番職に任じられて紫衣を賜っている。このように銀山大盛期には寺勢があったが、銀山の産出量化が減少した17世紀後半には檀家も減少し荒廃していたという。

宝永７（1710）年、六世了空の時、銀山料吾郷村の山根八左衛門種政により、衰退していた定徳寺は吾郷村に移転し現在も同所に伽藍を構えている（西尾・持田2024）。

吾郷村に移転後の定徳寺については、西尾・持田論文に詳述されている。定徳寺が石見銀山大谷に所在していたのは、16世紀後半から18世紀初頭までであり、寺勢があった時期は17世紀中頃までとみてよいであろう。

「徳善寺上墓地」に所在する墓塔群では、顕著に「譽」号戒名がみられることや、徳善寺の現在地への移転年代が18世紀末頃に下ることからみて、本来は「定徳寺墓地」として成立したことが考えられる。

天保４（1833）年に記された「石陽銀山物語」（上野家文書）には、徳善寺上墓地の大型宝篋印塔を納める岩窟について以下のように記載がある。

又徳善寺後、上徳寺右脇山の根に
石堂あり、初メハ行来の人を馬より
おろしぬ、故に今ハ後にむきて有
といへり、これも又何人の塚かしらす
元今の徳善寺屋敷は上徳寺分也

約200年前に造立された銀山町の有力者の巨大墓塔も、天保期には誰の墓かわからなくなっていることが知られるのである。

[参考文献]

石村勝郎　1971『新石見銀山物語』石見銀山遺跡研究会

伊藤菊之輔　1968『石見の石造美術』

遠藤浩巳　2002遠藤浩巳「長安寺と豊栄神社」『石見銀山遺跡調査ノート１』島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会

三瓶古文書を読もう会　1995『石見銀山百か寺』

島根県教育委員会・島根県文化財愛護協会　1987「紀年銘のある石塔」『石見銀山遺跡総合整備計画策定報告書』

島根県教育委員会・大田市教育委員会　2005『石見銀山遺跡石造物調査報告書５　分布調査と墓石調査の成果』

西尾克己・持田直人　2024「美郷町・松林山定徳寺について－石見銀山百か寺の調査－」『石見銀山遺跡の調査研究14』島根県教育委員会・大田市教育委員会

目次謙一　2013「毛利元就坐像と石見銀山長安寺」『季刊文化財』129　島根県文化財愛護協会

矢野健太郎　2014「豊栄神社の成立をめぐって」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究４』島根県教育委員会・大田市教育委員会

第３章　豊栄神社境内の石造物調査

第１節　調査の経緯について

豊栄神社の石造物調査については、過去に複数回にわたって調査が実施されているのでその概要を紹介する。

豊栄神社では古くから、民間の歴史家等により石造物の紀年銘や人名の書写などが行われていた（伊藤1968、石村1971）。平成13年には島根県教委・大田市教委による石造物調査及び文献調査が実施され、その時点で境内に造立または地表に露呈している石造物28基（燈籠、鳥居、狛犬、手水鉢、用水桶等）について実測作業と銘文の記録がなされている（島根県教委・大田市教委・温泉津町教委・仁摩町教委2002）。

この調査の時には、豊栄神社所蔵の文書目録も作成され、寄進された全ての石造物の内容、銘文を記録した「豊栄神社寄付物品姓名記簿」も掲示されている（遠藤2002）。

また、平成22年には、間野大丞氏により参道両脇に勇力隊により寄進された石造用水桶の詳細な補足調査がなされている（間野2010）。この時点において境内で確認できる石造物については、ほぼ調査が完了していたことになる。

平成28年度～令和４年度に至る豊栄神社の建造物修理及び境内地の整備に伴い、平成27年度には境内地の部分的な発掘調査が実施された。この調査により、現境内の地表直下から深さ40㎝程度のレベルに旧境内地面が存在し、堆積土中には複数の石造物部材が包含されていることが確認された。この堆積土は昭和18年９月の水害によりもたらされたもので境内地の西側と南側で厚く堆積し、北側と東側では薄くなっていた（大田市教委2016）。

令和３年度の整備工事では、境内地に堆積した土砂の一部梳き取り工事が実施された。これにより昭和18（1943）年９月の水害で倒壊・一部埋没していた石造物の一部が回収された。

このたび、建造物修理事業に伴って79年ぶりに再発見された石造物について緊急に実測作業を行うと共に銘文の記録を実施した。また、既調査分と併せて銘文に刻まれた長州藩の諸隊や人物について、可能な限り前後の履歴を検証し豊栄神社の石造物造立の背景を探った。

石造物調査では各石材の実測図化を実施して百点以上を図化した。

既に概略については、大田市石見銀山課から2023年に刊行された『豊栄神社保存修理工事報告書』に掲載している（岩橋2023）。また、小鳥居の銘文については特に別稿に報告している（岩橋2024）。

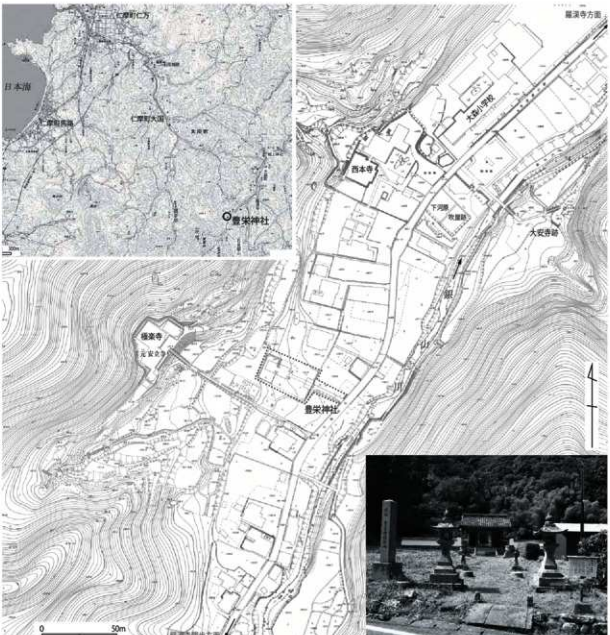
上述の報告では、石造物の詳細について限定的な報告に留まっているが、本報告によって実測図、写真などを掲載する。

緊急調査の実施状況は以下のとおりである。

調査主体　島根県教育委員会、大田市教育委員会
調査参加者　間野大丞、岩橋孝典、生田光晴、山手貴生、矢部俊一、新川隆、尾村勝
調 査 期 間　令和４年５月31日～８月31日
現地説明会　令和４年11月13日（日）　40名参加

豊栄神社調査状況

豊栄神社現地説明会



参道入口から随神門方向を望む

中之段の状況：左手の上段に拝殿、中之段右手に随神門。上段に登る階段の手前に石造鳥居の根元が元位置に残る（矢印の場所）

第３図　豊栄神社周辺図（S=1/2,500　左上の地図は、国土地理院HPからダウンロードしたものを改変して使用）

第２節　調査の経過と方法

豊栄神社の整備工事に伴って、埋没していた石造物が露出したのは令和３年度末頃と推定される。

令和４年４月末に世界遺産室職員が状況を確認したところ、多くの石造物石材が拝殿の東西に分かれて仮集積されていることが確認された。５月12日に島根県、大田市関係者で現地協議を実施し緊急調査を実施したうえで、今後の保護措置を講じることを確認した。

現地調査は、５月31日から８月31日にかけて断続的に実施した。調査はおもに燈籠、鳥居、狛犬台座など銘文を持つ部材を中心として実測図(1/5) 作成と写真撮影を実施した。また、玉垣や建築用石材と思われる板状石材については、個体数が多いため、保存状況が良好なものを選択して実測を行った。

調査指導会は１回開催した。令和５年３月15日に、滋賀県立大学教授の佐藤亜聖氏から石造物の年代や評価、活用方法について調査指導を受けている。

露出した石材は数量が多かったため、令和５年３月22日に、大半を境内地に埋設保存する処置を取り、重要な銘文を持つ一部の燈籠、鳥居の部材については、石見銀山世界遺産センターにて仮保管している。

第３節　石造物の概要

豊栄神社境内の石造物については、境内石造物の概要や銘文を書き写した「豊栄神社寄付物品姓名記簿」（第13図）や、明治10年12月に作成された境内絵図によれば、少なくとも41基の石造物が樹立されていたことが知られる。

これらの石造物は長安寺御霊社として拝殿・本殿の建設と境内整備が実施された慶応３年２月～同年12月に大半が設置されており、明治10年までに手水鉢や少数の燈籠が付加されている。

昭和18年の水害後の復旧は、戦時下ということもあり男手が不足して十分ではなかったことがしられる（山手2019)。復旧された石造物においても、原位置ではない場所に再建されたもの（梨羽寄進の燈籠など）や、組合せ石材の混用（狛犬など）などがある。つまり、現在の境内地に樹立されている石造物においても創建当初のままではない（位置、組合せの）ものも混在している。

この度は、平成13年度に調査された石造物28基に加え、燈籠４基、鳥居２基、手水鉢１基、狛犬台座、玉垣部材複数、建築部材複数を確認している。（第１表参照）

(1) 燈籠（第４、５、６図）

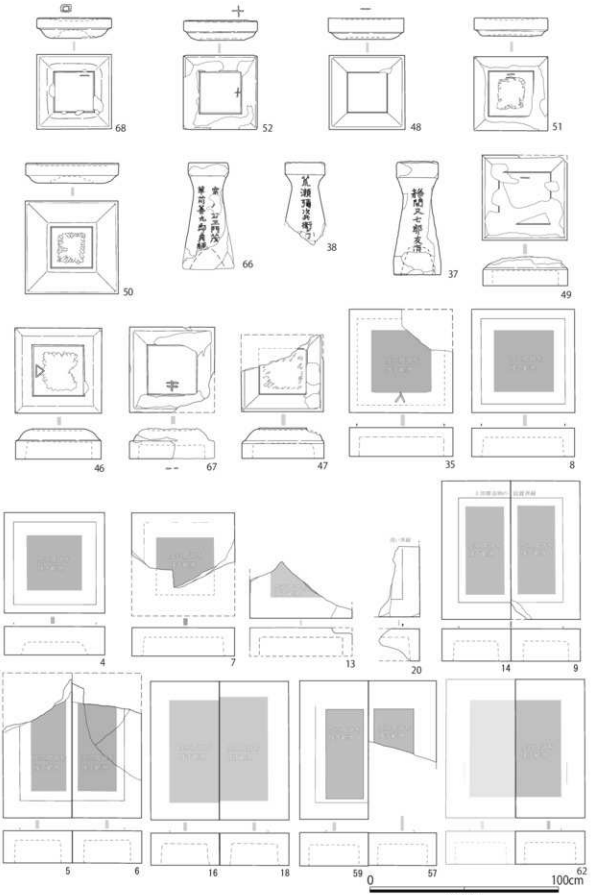
燈籠は、春日型の六角燈籠の部材として火袋(39)、笠（65）が確認されている。現在本殿の右脇に精鋭隊の寄進した六角燈籠が倒壊した状態で残るが、それと一対になる個体と考えられることから、本来は本殿左脇に樹立されていたものと考えられる。

豊栄神社の燈籠の大半は、平面形が四角形を呈するいわゆる「西ノ屋型」であるが、竿の裾をスカート状に膨らませて安定感を持たせた形態となることが特徴である。

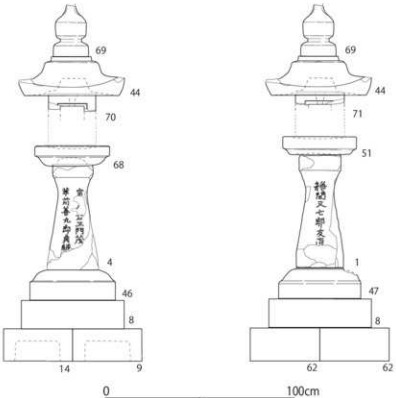
銘文のある燈籠では、「静間（37)」、「草苅・宗方（66)」、「荒瀬（38)」(平成13年調査時のものと一対になる個体）の各氏が寄進した燈籠竿が確認された。荒瀬氏は長安寺御霊社建設の普請方を務めた人物である。静間、草苅、宗方氏は、大森町に駐屯した長州藩軍による軍政を担った事務方役人である。これにより、境内上之段に燈籠を寄進した人々の階層をうかがうことができる。

それ以外に、本来の組合せ関係が不明確の宝珠(69)、笠（41、44、45、42、43、64)、火袋(70、71)、中台（48、50、51、52、68)、地輪(46、47、49、67)、上下段基礎（４、７、８、13、20、35)（５、６、９、14、16、18、57、59、62）がある。今だ発見されていない燈籠の構成部材も多いことから、正確な構成の復元は困難である。

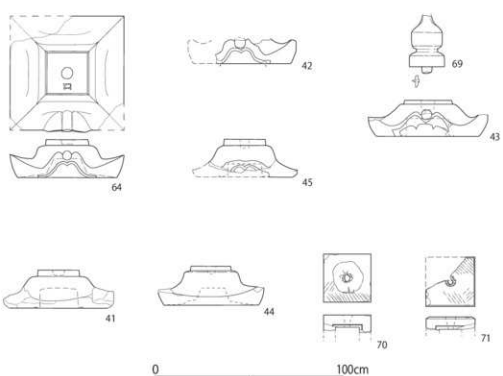
第５図に組合せ復元図を掲載している。これに



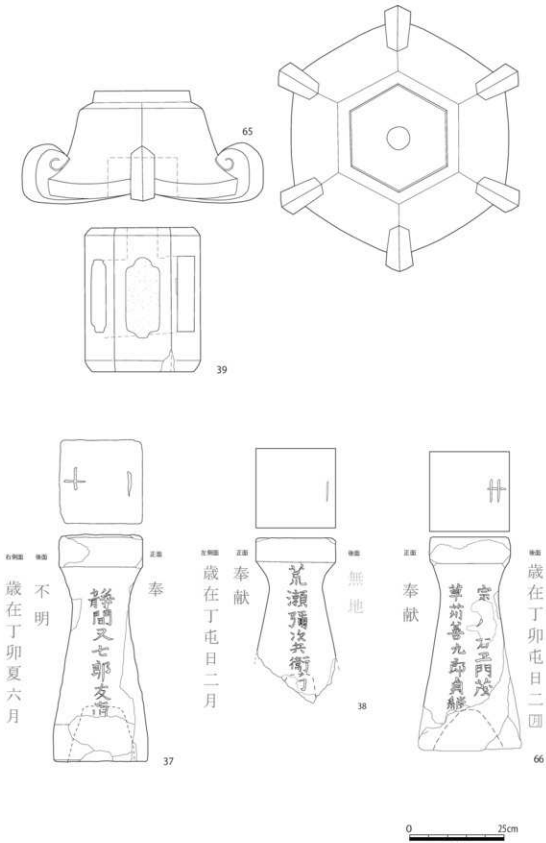
第４図　豊栄神社石造物実測図(1) 燈籠１ (S=1/20)



灯籠の復元図（S＝1/20）



第５図　豊栄神社石造物実測図(2) 燈籠２（S=1/20）



第６図　豊栄神社石造物実測図(3) 燈籠３（S=1/10）

よると高さ200㎝前後となり、拝殿回りの上之段に樹立された燈籠の平均的な規格が知られる。

(2) 鳥居（第7図）

鳥居は銀山町を貫く街道に面して建っていた大鳥居（102）と随神門を入った中之段に建てられていた小鳥居（103）の２基がある。

大鳥居（102）は、市道銀山線から石橋を渡って参道へ入り、大燈籠の次の場所に設置されたものである。初代の石造鳥居は、慶応３年２月に建立されたが昭和18年９月の水害で破損倒壊した。その後、二代目以降は木製鳥居が据えられていたが、現在では平面長方形の礎石上に福光石製の円形根巻き石が二基一対で残るのみである。

大正時代頃に参道入口の南側から撮影された古写真ではこの大鳥居が写っており、やや内転びのある柱や全景が見て取れる。

このたびの調査で、両柱の半分程度の部材、笠木の2/3程度の部材が確認されている。笠木は、水害後に解体処理が実施されたらしく、上面に40～50㎝前後の間隔で矢穴をいれて小割にしていった痕跡がみられる。

笠木の復元長は約4.2m、柱直径は0.25mである。大正14年の「神社財産登録申請書」によれば「高さ一丈一尺二寸（339㎝）」とある。これは地面から笠木上端までの総高と考えられ、復元図はこれに当てはめて作成している。

銘文には、中隊司令官の武藤式部允藤原正明、小隊司令士の櫓崎又吉の名が見られる。長州藩政史料「諸記録綴込」から、慶応２年９月９日に両名が装條銃第二大隊第二中隊司令と同中隊二番小隊司令に任じられていることが確認できる。「寄付物品姓名記簿」の記載も齟齬がないことから、この大鳥居は装條銃第二大隊第二中隊の寄進によるものであると判明した。半隊司令士二名のほか、嚮導、鼓手、会計方並器械方、軽方、銃手などの中隊員と福光石工を含めた80名が刻字されていたことが知られる。ただし、柱の未発見部分が多いために実物で確認できたのは15名ほどである。

江戸時代に製作された福光石製の鳥居は、当社の二基のほかに、下河原天満宮に一基（笠木の長さ3.15m）、勝源寺東照宮に一基、祖式八幡宮に一基（安政５年）が確認される。下河原天満宮と勝源寺東照宮のものは紀年銘がないが、周囲の石造物の造立年代から19世紀前半の製作と考えられる。福光石工が鳥居の製作に乗り出したのは19世紀に入ってからと想定されるが今後の検証が必要である。

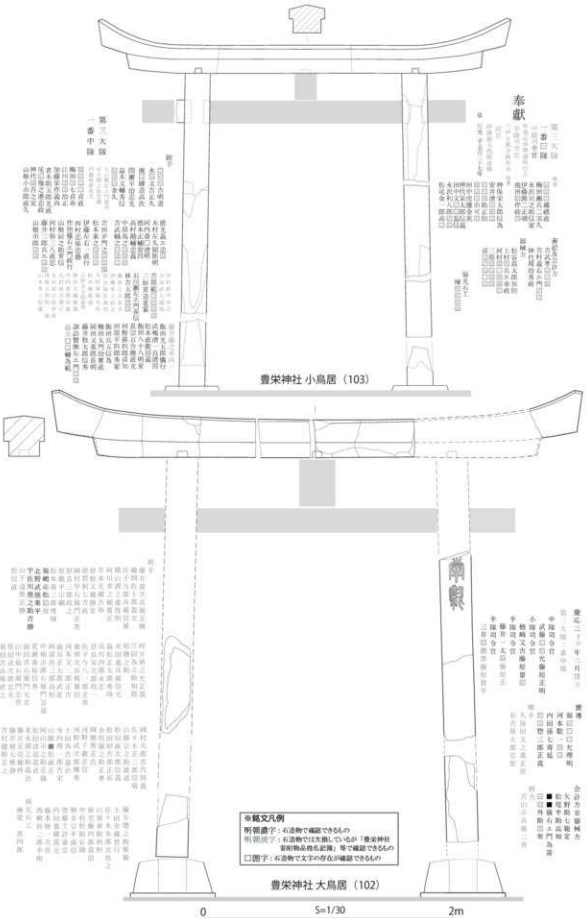
小鳥居（103）は、随身門から拝殿・玉垣エリアにあがる階段の手前に設置されている。現況では柱の根元から50㎝程度の部分で折れており、本来の造立位置は知られるが、柱の上部や笠木の大半はこの度の調査で確認されたものである。

復元総高は約2.9m、笠木の全幅3.25m、柱直径は0.21mである。大正14年の「神社財産登録申請書」によれば「高さ八尺（242㎝）、横五尺（151㎝）」とあるが（遠藤2002）、これは島木下面までの高さと、両柱端間の距離とみれば整合する。石材は福光石製である。石工は「福光石工」の銘があり、人名の当該部分は剥離しているが「寄付物品姓名記簿」によれば、棟梁甚四郎と記載されている。

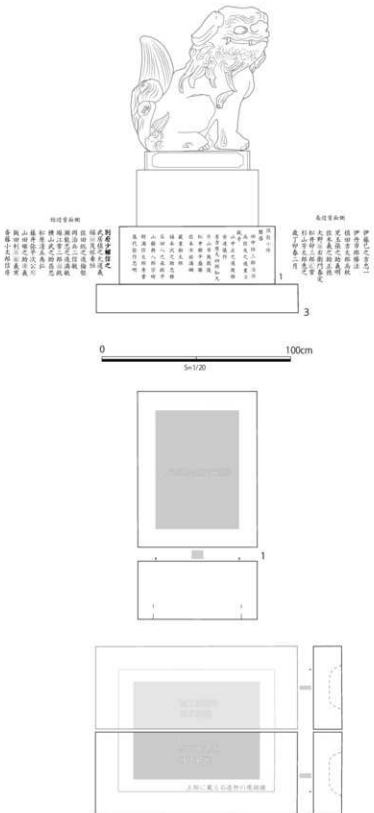
笠木・島木は折れて３分割にされているが長さ3.25mに復元される。左右の柱は折損して表面の銘文が剥離している箇所も多いが、８割程度の部材は確認された。

右側柱は、「皇紀元二千五百二十七年」（慶応３年）の紀年銘をもつもので、寄進者は第三大隊一番中隊である。中隊指令司の有地志津摩以下、半隊指令司、嚮導、鼓手、書記及会計方、器械方、銃手などの中隊員と福光石工を含めた91名が刻字されていたことが知られる。

中隊指令司の刻字部分は剥離しているが、長州藩政史料「諸記録綴込」から当該期の当中隊司令は有地志津摩であることが知られ、豊栄神社の残る「寄付物品姓名記簿」でも中隊指令司は有地志津摩と記載されている。



第７図　豊栄神社石造物実測図(4) 大・小鳥居（S=1/30）



第８図　豊栄神社石造物実測図(5) 狛犬台座（S=1/20）

(3) 手水鉢（第11図）

手水鉢は、中之段に長方形のものが１基現存している。明治10年の境内図では上之段（拝殿）の南端にも平面方形の手水鉢１基が記載されている。今回の調査で平面円形の手水鉢（63、下径62㎝）とその三足台座（40、径73.5㎝、高さ26.5㎝）が確認されている。円形手水鉢は上部が欠損しているため全容は不明であるが、外面に「…奉」の刻字を施している。

明治10年の境内図では、方形に記入図示されているのでこの度確認された円形手水鉢に方形の基礎が伴っていた可能性が考えられる。

(4) 狛犬台座（第８図）

獅子狛犬は、第一大隊二番・四番中隊によって、慶応３年２月に寄進されたものである。

現在、獅子狛犬一対は拝殿前に正対して設置されている。向かって右側の獅子は、基礎、銘文を刻む上下の台座を含めて造立当初のままのものと考えられる。それに対して左側の狛犬は、一見すると当初の状態を保つように見える。しかし、銘文を持つはずの下段の台座（１）は別石に置き換えられている。昭和18年水害でこの狛犬は、台座・基礎石ごと転倒したものと考えられ、復旧時に下段台座は付近に所在した別材を用いて復元されたものと推測される。この度の調査で、この下段台座部分（１）と基礎石（３、10）が発見された。

下段台座は高さ30.5㎝、長さ82㎝、幅60.5㎝で外向きの短辺側を除く３辺に銘文が刻まれている。銘文では四番中隊の偶数小隊の嚮導２名、銃手38名の名が刻まれている。

上面中央には長さ63.5㎝、幅45㎝の加工痕跡を残す範囲があり、この大きさの上段台座（現存するもので奇数小隊隊員の銘文）が設置されていたことが想定される。

(5) 玉垣部材（第９、10図）

玉垣は基礎、子柱、親柱、貫、屋根で構成される。親柱は、玉垣列の端部やコーナー部分に設置されるもので、頂部に宝珠を表現する。規格に２種類あり、大型品では高さ89～92㎝、幅15.5㎝である。一回り小さい規格では、幅13.5㎝、幅12㎝の個体が存在する。

子柱は高さ60㎝、横幅13.5×縦幅12㎝が標準的な寸法である。基礎石の枘穴芯々で41㎝前後の間隔で配置される。各柱間は基礎上面からの高さ22～25㎝付近に渡された断面長方形の貫材により連結されている。

柱は上之段と中之段をつなぐ階段両脇にも設置されており、柱の下端設置面が斜行する部材も存在する。

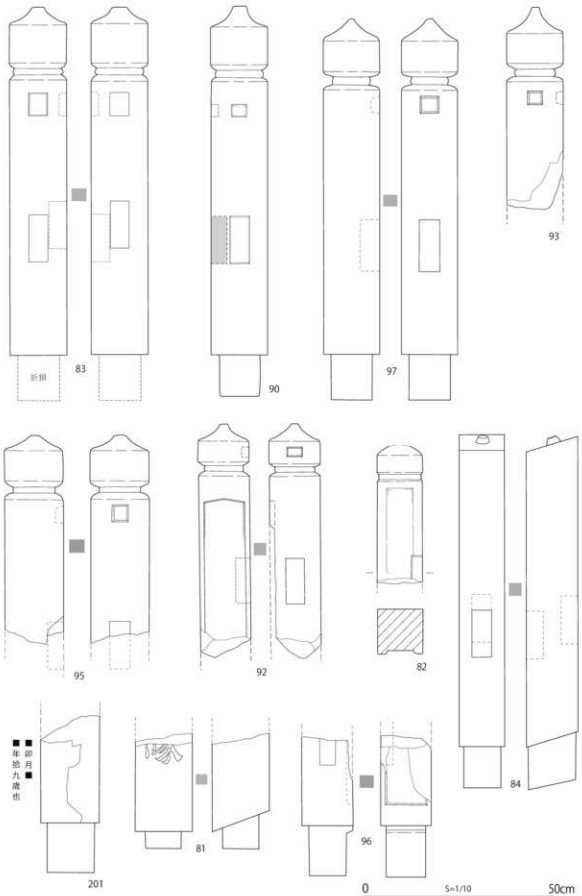
屋根は幅15㎝、高さ９㎝の断面五角形の形状である。長さについては85.5～69.5㎝とばらつきがある。屋根を支える子柱の設置間隔は、枘穴芯々の間隔で32～37㎝と均等ではなく、現地合わせで施工した可能性も考えられる。基礎石に施されている子柱の枘穴芯々間隔が41㎝前後なのに対して、屋根背面の枘穴間隔はそれに対応していない。

(6) 建築部材（第12図）

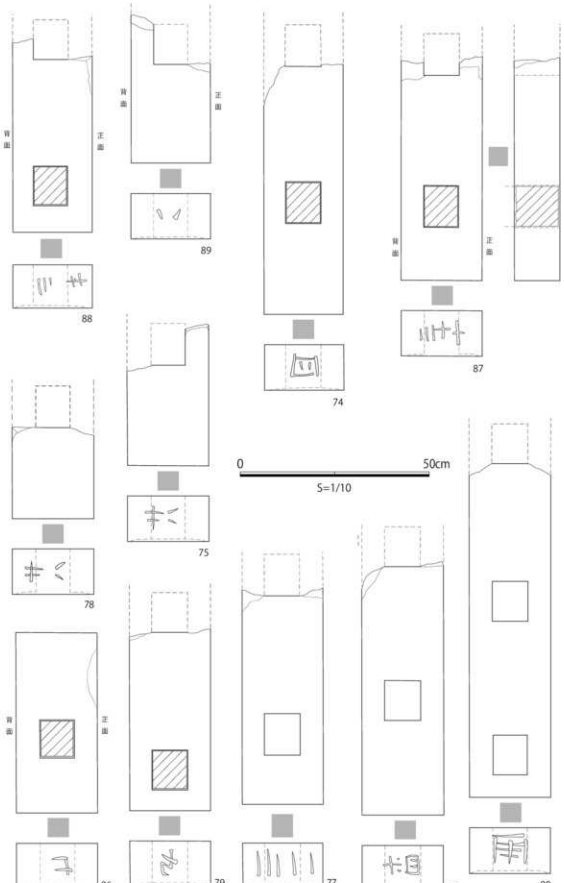
大型の石材で、燈籠や狛犬などの基礎と異なる形態のものを便宜的に建築部材として紹介する。地覆石として製作・使用されたものと考えられ、概ね３つの形態がある。①全長123～137㎝、幅37～39㎝で、一方の辺の高さは17㎝程度あるが、反対辺の高さは８㎝程度で、下面は傾斜している。高さ17㎝を持つ辺側の上面端は幅7.5㎝ほどの帯状に加工痕跡を残す部分がある。この部分は上面が構造物などで覆われるために、加工痕跡を残したままにされていると考えられる。(25、28、29、)

②は、全長92㎝以上、幅37㎝、高さ８㎝で、底面の内刳りは浅い。高さも全体的に均等であり、拝石や沓脱などの可能性はあるが即断できない。(33、56)

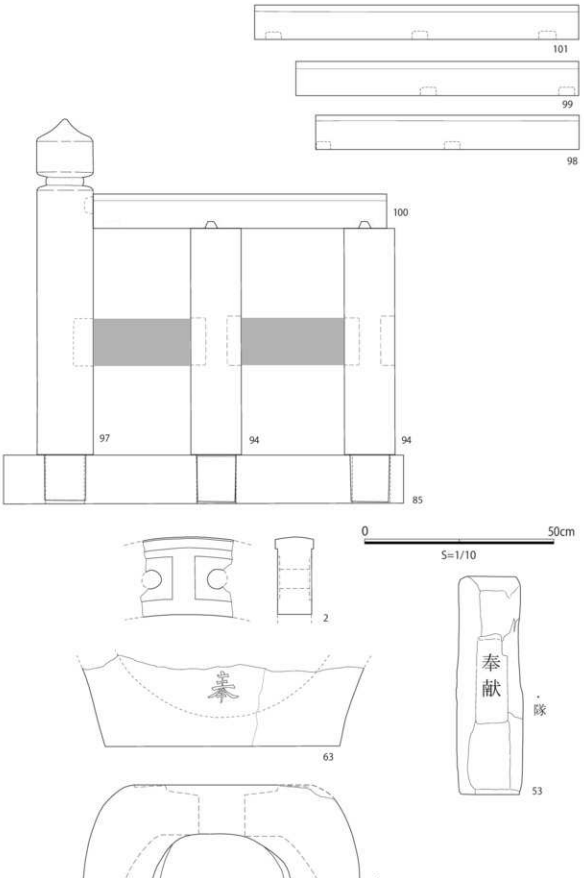
③は、全長77㎝以上、幅15㎝、高さ21㎝で、



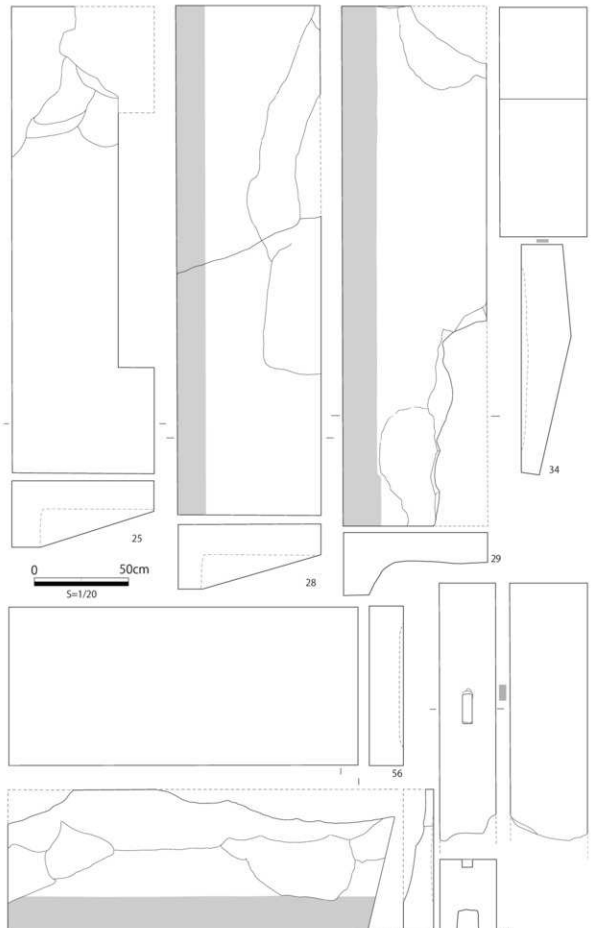
第９図　豊栄神社石造物実測図(6) 玉垣１（S=1/10）



第10図　豊栄神社石造物実測図(7) 玉垣２（S=1/10）



第11図　豊栄神社石造物実測図(8) 玉垣３・特殊品（S=1/10）



第12図　豊栄神社石造物実測図(9) 建築部材（S=1/10）

第１表　豊栄神社石造物調査一覧表（令和４年度分）

灯籠構成部材

掲載番号	種類	寸法(cm)			銘文	備考
		高さ	長さ	幅		
69	笠珠	27		18.5		底面に「十」の刻印
41	笠部	20	58.5	58.5		
42	笠部	不明	(52)	(52)		正面に日輪付きの唐破風を表現
43	笠部	19	63	63		正面に日輪付きの唐破風を表現
44	笠部	20.5	56.5	56.5		下面に記号
45	笠部	19.5	55	55		正面に唐破風を表現
64	笠部	20	60	60		正面に日輪付きの唐破風を表現
70	火袋	不明	25	25		四隅を4.5cmの柱で支える
71	火袋	不明	26	26		四隅を4.5cmの柱で支える
48	中台	12	40	40		底面に「－」の刻印
50	中台	10.5	49	49		大型品
51	中台	9.5	39	39		上面と底面に「－」の刻印
52	中台	10.5	39	39		底面に「十」の刻印
68	中台	12	39.5	39.5		底面に「ロ」の刻印
46	地輪	16	45	45		上面に「△」の刻印
47	地輪	16	43.5	43.5		
49	地輪	16	45	45		上面に「－」の刻印
67	地輪	16	45	45		上面に「キ」、底面に「－」の刻印
72	小基礎	16	35	35		
73	小基礎	18	36	36		
4	上段基礎	15	53	53		上面に浅い界線で設置位置を示す。上面の地輪設置範囲は加工痕跡を残す
7	上段基礎	15	54.5	54.5		上面の地輪設置範囲は加工痕跡を残す
8	上段基礎	15	54.5	54.5		上面の地輪設置範囲は加工痕跡を残す
13	上段基礎	(10)	54	54		上面の地輪設置範囲は加工痕跡を残す
20	上段基礎	17	(36.2)	(21.5)		上面に浅い界線で設置位置を示す
35	上段基礎	15.5	54.5	54.5		上面に浅い界線で設置位置を示す。上面の地輪設置範囲は加工痕跡を残す
5-6	下段基礎	17	36.5+36.5	73		上面に浅い界線で設置位置を示す。上面の地輪設置範囲は加工痕跡を残す
9-14	下段基礎	17	36.5+36.5	73		上面に浅い界線で設置位置を示す。上面の地輪設置範囲は加工痕跡を残す
16-18	下段基礎	17	36.5+36.5	73		上面に浅い界線で設置位置を示す。上面の地輪設置範囲は加工痕跡を残す
57-59	下段基礎	17	36.5+36.5	73		上面の地輪設置範囲は加工痕跡を残す
62	下段基礎	17	36.5	73		上面の地輪設置範囲は加工痕跡を残す
37	竿	60.5	25	25	正面:静間又七郎友直 右:奉 左:不明 背面:歳在丁卯夏六月	上面に「十」、「－」の刻印
38	竿	(44)	(21)	(21)	正面:荒瀬彌次兵衛 左:奉献 背面:歳在丁卯屯日二〇	上面に「－」の刻印
66	竿	56.5	27	27	正面:宗方伝右衛門茂口 草苅善九郎貞継 左:奉献 背面:歳在丁卯屯日三〇	上面に「キ」の刻印
39	火袋(六角)	38	30.5	30.5		六面のうち、三方に窓をあける
65	笠部(六角)	29.5	72.5	72.5		平面は六角形。各隅に鼻手を設ける

鳥居

掲載番号	種類	寸法			銘文	備考
		高さ	笠木長	柱径		
102	大鳥居	402	420	25	第7図参照	慶応三丁卯年二月建立
103	小鳥居	290	325	21	第7図参照	皇紀元二千五百二十七年

手水鉢部材

掲載番号	種類	寸法			銘文	備考
		高さ	長さ	幅		
40	円形台座	26.5		83		平面円形で三つ足
63	円形手水鉢	(24)		(75)	奉	平面円形で鉢型

狛犬構成部材

掲載番号	種類	寸法			銘文	備考
		高さ	長さ	幅		
3-10	下段台座	15	106.5	44+44		上面の上段台座設置部分には加工痕跡を残す
1	上段台座	30.5	82	60.5	第8図参照	上面の狛犬設置部分には加工痕跡を残す

玉垣部材

掲載番号	種類	寸法			銘文	備考
		高さ	長さ	幅		
98	屋根	9	69.5	15		底面の枘穴は2カ所
99	屋根	9	74.5	15		底面の枘穴は2カ所
100	屋根	9	77.5	15		底面の枘穴は3カ所
101	屋根	9	85.5	15		底面の枘穴は3カ所
81	階段柱	(23)	15	15	「…隆」	枘は長さ9cm。底面は階段縁石にあわせて斜行している
82	小型柱	(37)	12	12		正面に鼻を刻むくぼみを設ける

掲載番号	種類	寸法			銘文	備考
		高さ	幅(長さ)	幅		
83	柱	92	15	15		上下の貫穴が二面に施される隅柱。枘は折れている
84	階段支柱	78	13.5	13.5		前後に貫穴を設け、上面と底面は階段の縁石に合わせて斜行している
90	柱	92	15	15		枘の長さ12cm。上下の貫穴が二面に施される隅柱
92	小型柱	(62)	13.5	13.5		鋲を刻むくぼみを設ける。右側に貫材が連接する
93	柱	(53)	15	15		貫穴が二面に施される隅柱
94	支柱	60	12	13.5		貫穴が二面に施される中間柱。枘は長さ12cm
95	柱	(55)	15.5	15.5		貫穴は一面にだけ施される。隅柱か
96	小型柱	(23)	13.5	13.5		枘は長さ13cm。鋲を刻むくぼみを設ける。左側に貫材が連接する
97	柱	88.5	15	15		枘は長さ12cm。一面に枘穴がある
201	柱	(29)	15.5	15.5	「…国…」、「…年拾九歳也」、「…北博…」	枘の長さは13.5cm
74	基礎	12	(66.0)	21		側面に「四」の刻書
75	基礎	12	(37.5)	21.5		側面に「廿八」の刻書
76	基礎	12	(67.5)	21.5		側面に「四十」の刻書
77	基礎	12	(57.5)	21.5		側面に「｜｜｜」の刻書
78	基礎	12	(26.5)	21.5		側面に「廿八」の刻書
79	基礎	12	(48.0)	21.5		側面に「九」の刻書
80	基礎	12	(88.5)	21.5		側面に刻書
85	基礎	12	105.5	21.5		側面に「十七」の刻書。枘穴は3カ所
86	基礎	12	47.5	21.5		側面に「廿」の刻書
87	基礎	12	(58.0)	21.5		側面に「三十一」の刻書
88	基礎	11.5	(51.0)	21		側面に「三キ」の刻書
89	基礎	12	(39.5)	21		側面に「ハ」の刻書

石橋部材

掲載番号	種類	寸法			銘文	備考
		高さ	長さ	幅		
2	欄干	20.5	(24)	10		欄干には円形窓がつく

その他部材

掲載番号	種類	寸法			銘文	備考
		高さ	長さ	幅		
53	銘柱	57.5		17.5	「奉献」、「…隊」	不定形の円柱で、銘部分のみ平滑に整えている

建築部材等

掲載番号	種類	寸法			銘文	備考
		高さ	長さ	幅		
25	建物地覆か	18	123	38.0		底面は大き刳り込む。長辺の一辺は構造物に嵌め込むための刳り込みが施される。断面は L字状
28	建物地覆か	17	134	38.0		底面は大き刳り込む。長辺の一辺側は高さ8cmに減じる。断面は L字状
29	建物地覆か	17	137	39.0		底面は大き刳り込む。長辺の一辺側は高さ8cmに減じる。断面は L字状
33	基礎	16	(95)	37.0		底面の刳り込みは浅い
34	階段基礎	11	60	23.0		下面は平滑だが、上面は階段にあわせて傾斜する
56	台座	9	92	42		底面は浅く刳り込む
60	基礎	21	(68)	15		底面は大き刳り込む。上面に枘穴を施す

図面非掲載分

実測番号	種類	寸法			銘文	備考
		高さ	長さ	幅		
11	基礎	21	(34)	19		底面は大き刳り込む
12	建物地覆か	(12)	(36)	(27)		底面は大き刳り込む
15	基礎	(10)	(39)	(19)		底面は大き刳り込む
17	基礎	13	(64)	26		底面は加工痕跡を残すが刳り込まない
22	基礎	15	(31)	(29)		底面は大き刳り込む。2石セットで使用か
23	基礎	12	30.5	30.5		底面の刳り込みは浅い
24	基礎	17	(38)	36.0		底面は大き刳り込む
26	建物地覆か	17	(70)	37.0		底面は大き刳り込む。長辺の一辺側は高さ12.5cmに減じる。断面は L字状
27	建物地覆か	17	(52)	38.0		底面は大き刳り込む。長辺の一辺側は高さ13cmに減じる。断面は L字状
30	建物地覆か	17	(103)	36.0		底面は大き刳り込む。長辺の一辺側は高さ8cmに減じる。断面は L字状
31	建物地覆か	14	(103)	(28)		底面は大き刳り込む
32	建物地覆か	(14)	(45)	(38.5)		底面は大き刳り込む
36	基礎	21	79.5	19.0		底面は大き刳り込む
54	基礎	22	(77)	14.5		底面に刳り込みを施す
55	台座	20	(21)	16		底面に刳り込みを施す
58	基礎	17	(63)	30.5		底面は大き刳り込む。一方の長辺側は開口している
61	基礎	21.5	(64)	14.5		底面に刳り込みを施す
91	基礎	13	(17)	22		底面は大き刳り込む

底面は内刳りを施している。地覆石状であるが本来の使用方法は不明である。(60)

第４節　石造物の造立時期（第２表）

豊栄神社境内の石造物について、造立時期が確認できるものを実物資料の銘文と「寄付物品姓名記簿」の記述から抽出した。概要は以下のとおりである。

慶応３年２月…燈籠９基、獅子狛犬２基、大鳥居１基。(小鳥居１基、燈籠６基も当月造立と想定される)
慶応３年３月…燈籠３基、玉垣一式
慶応３年６月…燈籠６基
慶応３年７月…燈籠３基
慶応３年８月…燈籠２基
慶応３年12月…燈籠３基
明治６年……燈籠１基

さらに、石州御内用・大森御代官役之心得として長州藩による銀山料支配の要人であり、かつ豊栄神社遷宮代官である高須正吉の寄進した燈籠２基には年号がないが、本殿正面両脇に設置される最も重要な燈籠であることから慶応３年２月の造立と考えられる。また、大・小鳥居を寄進した第三大隊一・二番中隊は慶応３年７月27日に石州出張が解除され長州に帰陣することから、小鳥居についても慶応３年上半期の寄進が考えられる。大森に駐屯している諸隊は概ね100日で交替し、本地である長州藩に帰陣して、休養や訓練にあたることとされている。慶応３年７月27日には、第三大隊一番・二番中隊の駐屯解除が命じられ、替わって同日に装条銃隊第一大隊一番・三番中隊の出張命令が出されている。装条銃隊第一大隊一番・三番中隊は現地出張後の慶応３年12月に豊栄神社境内中之段に角形燈籠を寄進している。最後発の石造物寄進であり、上之段には石造物造立の余地がなかったので、空閑地のある中之段への寄進となったのであろう。

このように、豊栄神社境内の石造物は、ごくわずかの例を除いて慶応３年のうちに造立されている。その後の約150年の間の累積的な寄進物は限られていることから、今日見られる特徴的な境内景観はほぼ慶応３年に形作られているといえよう。

第５節　豊栄神社境内の石造物配置復元

昭和18年の台風水害によって、豊栄神社の境内地は南側を中心に大きな被害を受けた。単立の石造物をはじめ玉垣や土塀についても大きく破損したものと考えられる。被災後、一部の石造物は復旧されたが、原位置からの移動や、石材組合せの変更などもみられる。

このような状況であるが、「豊栄神社寄附物品姓名記簿」（第13図）や「明治十年豊栄神社境内現在絵図」によって、個々の石造物について配置復元が可能である。第14図によってそれを示す。

階層的規則性

豊栄神社境内地は参道、中之段、上之段（拝殿周辺）、本殿周辺の四階梯に区分が可能である。この四者はそれぞれ１m程度の段差が存在し、視覚的にも格差を示している。また、本殿の前面には水濠を構え、側面と後方は土塀で囲繞するほか、拝殿周囲には玉垣を、中之段には土塀を廻らせるなどそれぞれの区域で視覚的に区画を明示して神域性を高めている。

石造物は寄進者の帰属する職掌等の階層に従って樹立される場所や種類型式が規定されている。

本殿周辺

明治十年の豊栄神社現在境内絵図によれば、本殿を囲繞する土塀内には、12基の燈籠が配置されている。水害により本殿南側の燈籠は原位置を留めるものはないが、本殿北側５基（高須、津田、平岡、梨羽、精鋭隊）が現存する。今回の調査では、移動した燈籠石材の中に津田、梨羽、精鋭隊寄進の燈籠が存在することが確認された。これらの現存石造物の状況や「豊栄神社寄附物品姓名記簿」の記載により、本殿の周囲では建物を挟んで二基一対の燈籠寄進が行われていた可能性が

場所	2002番号	本書番号	寄進者名	年月日	種　類	慶応3年2月	3月	4月	6月	7月	8月	12月
		本殿・拝殿				2/27上棟式		4/24遷宮式			完成	
						寄　進　時　期						
本殿周辺	1		高須（正吉）盛賀	慶応3年2月ヵ	灯籠	想定						
			高須（正吉）盛賀	慶応3年2月ヵ	灯籠	想定						
	2		津田（昌太郎）方義	慶応3年2月	灯籠	●						
			津田（昌太郎）方義	慶応3年2月	灯籠	●						
	3		平岡兵部通義	慶応3年2月	灯籠	●						
			林梅之丞正常	慶応3年3月	灯籠		●					
	4		梨羽景直	慶応3年秋秋	灯籠						●	
	8		梨羽景直	慶応3年秋秋	灯籠						●	
	23		精鋭隊	慶応3年6月	円柱六角火袋灯籠				●			
		65・39	精鋭隊	慶応3年6月	円柱六角火袋灯籠				●			
拝殿周辺	5		中村権兵衛淳義	慶応3年6月	灯籠				●			
	6		藤山小源太直脚	慶応3年7月	灯籠					●		
	7		永安雅平・国司又三郎	慶応3年2月	灯籠	●						
		37	静間又七郎友直	慶応3年6月	灯籠				●			
			渡辺　精	慶応3年2月ヵ	灯籠	●						
	15		荒瀬弥次兵衛尚勝	慶応3年2月	灯籠	●						
	20		猿二大隊三番中隊	慶応3年12月	明神形　灯籠						8/21 出張命令	●
	28		第一大隊二番中隊	慶応3年2月	獅子（右）	●						
	27	1・3・10	第一大隊四番中隊	慶応3年2月	狛犬（左）	●						
		38	荒瀬弥次兵衛尚勝	慶応3年2月	灯籠	●						
			中村久米吉祐則	慶応3年6月	灯籠				●			
		66	草苅重綱・宗方伝右衛門	慶応3年2月	灯籠	●						
			桑原七郎・菅原亮	慶応3年6月	灯籠				●			
			津森直之允高功	慶応3年7月	灯籠					●		
			水津則道	慶応3年7月	灯籠					●		
			渡辺　精	慶応3年2月ヵ	灯籠	●						
		40・63			手水鉢							
		81	千城秀雄隊	慶応3年	玉垣						8/21 出張解除	
門内	21		猿一大隊一番中隊	慶応3年12月	明神形　灯籠					7/27出張命令		●
	22		猿一大隊三番中隊	慶応3年12月	明神形　灯籠					7/27出張命令		●
	29	103	第三大隊一番中隊	慶応3年2月27日	小鳥居	想定				7/27出張解除		
	26				手水鉢							
参道	12		北第一大隊	慶応3年3月	灯籠		●					
	13		北第一大隊	慶応3年3月	灯籠		●					
	16		勇力隊	慶応3年	水槽							
	17		勇力隊	慶応3年	水槽							
	24		第三大隊二番中隊	慶応3年2月ヵ	大灯籠	想定				7/27出張解除		
	25		第三大隊二番中隊	慶応3年2月ヵ	大灯籠	想定				7/27出張解除		
	102		第二大隊二番中隊	慶応3年2月	大鳥居	●						
		2		慶応3年2月ヵ	石橋							

第２表　豊栄神社境内の石造物の造立過程一覧表

高まった。高須、杉梅之丞が寄進し、本殿南側に設置してあったと推定される二基の燈籠の竿部分は未だ境内地に埋没している可能性が高い。

本殿周辺の燈籠は、大森御代官役の高須正吉を筆頭として、石州江津以東軍監や精鋭塾書記を務めた津田昌太郎、軍監・参謀を務めた平岡兵部、杉梅之丞といった大森に駐屯した長州藩軍幹部が個人名で寄進しているほか、上級家臣団で構成される精鋭隊が寄進していることが特徴である。

拝殿の周囲

玉垣に囲繞された拝殿周辺では燈籠と獅子・狛犬等が寄進されている。ここでは本殿周辺の寄進パターンとは相違がみられる。明治10年の境内図では、拝殿周辺で燈籠16基と手水鉢１基、獅子・狛犬一対が配置されている。現存しているのは燈籠６基と獅子・狛犬だけであるが、拝殿周辺の区域では一人で二基一対の燈籠を寄進しているのは当社の普請方である荒瀬弥次兵衛尚勝と元締役の渡辺（市右衛門）精だけである。

個人名で燈籠を寄進しているのは、荒瀬のほか中村、藤山、静間、草苅・宗方、国司・永安といった人々である。また、実物は未発見であるが「豊栄神社寄附物品姓名記簿」には中村久米吉祐則、渡辺精、水津則道、津森直之允高功、桑原七郎・菅原亮の寄進した燈籠が知られる。このうち宗方は、慶応２年７月、長州軍による大森駐屯直後に大村益次郎、高須正吉らが藩庁に泣訴して、８月に派遣された行政官であることがわかっている（山口県2001・2010）。また、静間又七郎は慶応元年８月５日に干城隊頭取筆者役に任命された経歴があり、行政官として有能であったことが知られる。永安雅平方幹は、明治３年には大蔵省出納寮に、国司又三郎政明は大蔵省土木寮に出仕していることが知られる（大蔵省1872）。このように前後の履歴が判明する人物名の状況から、拝殿周辺に個人で燈籠を寄進した人々は、軍監・参謀らを支えて大森代官所の行政実務をになった長州藩の実務吏員と考えられる。

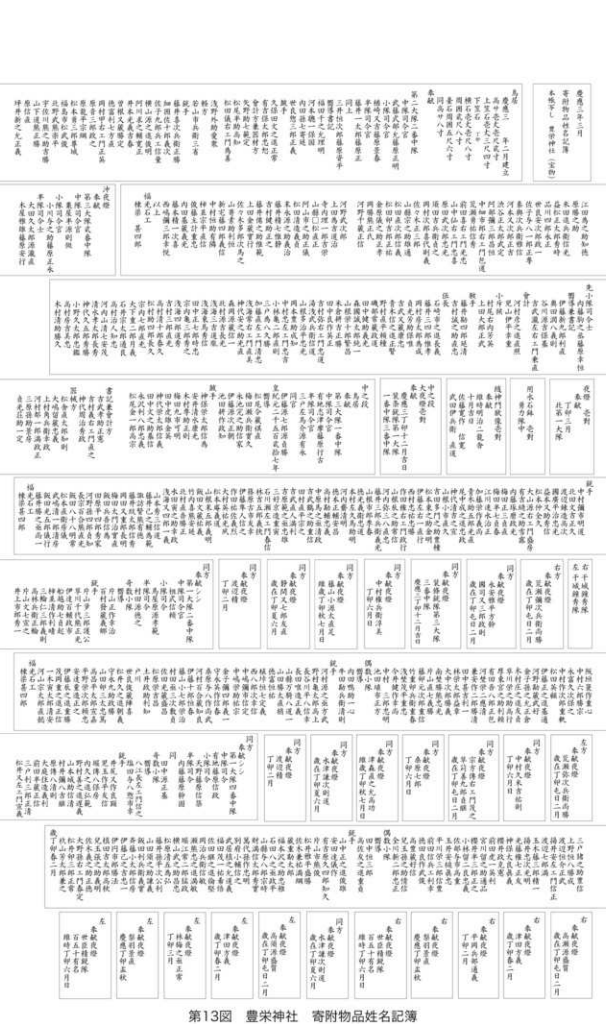
一方、獅子・狛犬寄進したのは装條銃隊第一大隊第二・四中隊である。豊栄神社の石造物は慶応３年２月に第一陣が造立されているが、獅子・狛犬はこの時に寄進されていることから、当時駐屯していた諸隊の中でも最も有力な第一大隊が寄進を行ったと考えられる。なお、第一大隊第二中隊司令士として銘を刻む「祖式信頼」は、慶応２年11月に中隊司令に任じられており、石州口の戦いの最中は第一大隊第一中隊三番小隊司令士として実戦に臨んでいた。

玉垣内の北東隅に設置された住吉形燈籠は、装條銃隊第二大隊第三中隊の寄進によるものである。本燈籠は境内地に左右対称として配置されたものではなく、当該の玉垣内南東隅には手水鉢が設置してある（原位置には遺存しない）。本燈籠は境内地整備の最終段階である慶応３年12月に、随身門内にある他隊寄進の２基とともに同型品として寄進されており、燈籠の設置場所の選択余地が相当に限られていたものと考えられる。

また、この度確認された玉垣隅柱の下部に「・・・隊」の刻銘があり、姓名記簿の記載のある干城鐘秀隊の寄進が考えられる。

随身門内

随身門とそこから表側に延びる土塀に囲繞された空間には住吉形燈籠２基と手水鉢１基、小鳥居１基が寄進されている。前述のように手水鉢は東側に移動しているものの、本殿や拝殿の周辺に比べて比較的旧状を保っている。住吉形燈籠は装條銃隊第一大隊第一・三中隊により寄進されている。この二つの中隊は慶応３年７月27日に出張命令を受けているため、境内整備の最終盤である同年十二月という時期の寄進になったものと考えられる。既に石造物がひしめいている参道や玉垣上之段内に比べて空閑地が多く、設置は容易であったと推察される。なお、「豊栄神社寄附物品姓名記簿」では第一大隊一番中隊が一対の燈籠を寄進したと記載されている。しかし、石造物の刻字では右側の燈籠は「三蕃中隊」と刻まれているので、一番中隊と三番中隊で各一基ずつ寄進されたものと考えられる。



第13図　豊栄神社　寄附物品姓名記簿

本殿及び拝殿周辺の土塀内・玉垣内の石造物で特に注記のないものは、石燈籠である

第14図　豊栄神社境内石造物配置図（S=1/300）

小鳥居は玉垣内に上がる階段手前に設置されているが、水害により両基部を高さ五十㎝程度残して折損倒壊している。笠木・島木の一部残闕は従来から知られていたが、このたび貫以外の大半の部材が確認された。装條銃隊第三大隊一番中隊の寄進であるが、石材表面の剥離部分も多く、当時の中隊司令士・有地志津摩などの名は確認できなかった。小鳥居は参道に設置された大鳥居と共に慶応３年２月に造立されたものと考えられる。

手水鉢については、部分的に銘文は遺存しているが、隊名が欠損しているため寄進者は不明である。随身門と土塀に囲まれた空間に設置された石造物は、装條銃隊を中心とした諸隊によって寄進されたものが多い。

参道脇

街道（現在の市道銀山線）に面して、石橋が設置されて神社の参道へ続いている。大燈籠（装條銃隊第三大隊第二中隊）、大鳥居（装條銃隊第二大隊第二中隊）、燈籠（北第一大隊）、用水桶（勇力隊）の順に設置されている。大鳥居は慶応３年２月の寄進であるが、第二大隊第二中隊の中隊司令士・武藤政明は四境戦争では芸州口で戦い、大森には直近に赴任したばかりであった。

大燈籠の造立年月日は不明であるが、石州口の戦いの緒戦から従軍する歴戦の中隊司令士・粟屋半（則徴）が率いた中隊の寄進であることを考慮すれば同年２月の造立の可能性が考えられる。

北第一大隊が寄進した燈籠は慶応３年３月に造立されている。また、参道最奥には長州藩お抱え力士で構成される「勇力隊」によって寄進されている（間野2010）。

豊栄神社は、参道（標高150m）随身門-土塀内の中之段（同151m）、拝殿・玉垣内の上之段（同152m）、本殿・土塀内（同153m）という四つの空間から構成されている。この四つ空間は実際に、それぞれ約１m　差の標高差を伴って階段状に上昇していることから視覚的にも空間の階層差を創り出していることが認められる。最上位に位置する本殿には毛利元就が祭られ、その周囲を長州藩大森代官所（のちに大森宰判）の軍監・参謀などの寄進銘が取り巻く様は、現実の藩主と家臣団の関係を仮託して体現されたものである。

本殿と拝殿の間には、標高差を設けるだけでなく、石垣造の水濠が設けられており、本殿域の隔絶的な神域性を創出している。

それに続く、拝殿周囲には、軍監・参謀を補佐する実務吏員や諸中隊の寄進があり、随身門内には造立時期が遅れた諸中隊の寄進した燈籠がある。

一方、参道劈頭には、実力ある中隊司令士が率いる諸大･中隊が大燈籠や大鳥居を寄進しており、道行く人の耳目を驚かせ、神社の神威を高める役割を果たしている。

このように豊栄神社の石造物は、四つの空間構成の意図に従って寄進が行われたほか、街道をゆく人々の目に触れやすい参道入り口には、大型燈籠、大鳥居を設置する工夫がなされたといえる。

第６節　小結

豊栄神社の石造物について、前節まで概要を述べてみた。また、小鳥居に刻字された「皇紀元二千五百二十七年」の紀年銘の意義についても別に詳述している（岩橋2024）。石造物を寄進した長州藩士のその後についても別に詳述しているので、そちらを参考にしていただきたい（岩橋2023）。

豊栄神社が、長安寺の御霊社として再建事業が開始されたのは慶応２年の後半頃からと想定され、慶応３年２月27日に上棟式が、４月24日遷宮式が執行され、８月には殿社・境内地整備が完成している。これに合わせるように、石造物寄進についても駐屯して軍政を敷く軍監・参謀階層、事務吏僚階層、諸隊（中隊単位）の階層ごとに先を競うように実施されている。

このことは、兼ねてより先学から指摘されているが、今次調査においてよりその詳細が判明してきた。豊栄神社の史的意義を顧みるに、江戸幕府開闢以来266年の歴史において、初めて一藩（大名家）に敗北を喫し、豊前国企救郡に加え、石見

国の浜田藩領と幕府直轄領を奪取されてしまったことである。それはそれまで水面下で進行していた徳川幕府崩壊の波がいよいよ顕現化した事象とも言え、近世社会の終焉を告げる「碑」ともいえる。

また、この幕長戦争で起死回生の勝利を得た長州藩は、直後に鳥羽・伏見の戦い、江戸城無血開城、戊辰戦争と連勝し明治維新の主役の一人としてその後の近代日本社会を牽引してゆくことは周知のとおりである。このことを踏まえれば、豊栄神社と境内に寄進された多くの石造物は日本近代の礎の「碑」として見ることもまた可能である。

小鳥居を寄進した第三大隊一番中隊の中隊指令司は有地志津摩であった。彼はその後、戊辰戦争に従軍し、最終局面の箱館戦争では陸軍軍監という要職についている。明治２年５月17日、官軍の亀田斥候所に降伏交渉に訪れた旧幕府軍の榎本武揚、松平太郎と接見した官軍首脳の中には有地志津摩の名も見える。翌18日の正式降伏の際に降伏処分の任に当たったのが軍監・岸良彦七（薩摩藩）、有地志津摩であった（末松1921）。

明治２年５月21日、有地志津摩は箱館平定後の蝦夷地鎮定配置につく。そして、明治２年９月14日、陸軍第二大隊の蝦夷地掃討戦の功労として明治政府より金350両を下賜されている（国立公文書館DB）。

豊栄神社に名を遺した勇士達は、その後の維新史・近代史にも名を刻んでいるのである（岩橋2023）。

【参考文献】

石村勝郎　1971『新石見銀山物語』石見銀山遺跡研究会

伊藤菊之輔　1969『石見の石造美術』

岩橋孝典　2023「石造物からみた豊栄神社　－新たに確認された石造物について-」『豊栄神社保存修理工事報告書』大田市教育委員会

岩橋孝典　2024「島根県最古の「皇紀元」紀年銘について－慶応三年建立の豊栄神社小鳥居－」『石見銀山遺跡の調査研究14』島根県教育委員会・大田市教育委員会

遠藤浩巳　2002「長安寺と豊栄神社」『石見銀山遺跡調査ノート１』島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会

大蔵省　1872『職員録 明治五年五月・官員全書改（大蔵省）』※国立公文書館アジア歴史センターデータベースより

大田市教育委員会　2016『石見銀山遺跡発掘調査概要24 昆布山谷地区・宗岡家地点・豊栄神社地点』

大田市教育委員会　2023『豊栄神社保存修理工事報告書』

島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会　2002『石見銀山遺跡調査ノート１』

国立公文書館データベース　「第二大隊其外数十名へ賞金下賜」『太政類典・第一編・慶応三年～明治四年・第二百二十一巻』

末松謙澄　1921『防長回天史』第六篇下　修訂再版 末松春彦　（国立国会図書館デジタルコレクション）

間野大丞　2010「長州藩勇力隊が寄進した石製用水桶」『季刊文化財』123　島根県文化財愛護協会

山口県　2001『山口県史　史料編　幕末維新 六』

山口県　2010『山口県史　史料編　幕末維新 四』

山手貴生　2019「水害痕跡が語りかけるもの」『石見銀山学ことはじめ　Ⅱ』大田市教育委員会

矢野健太郎　2014「豊栄神社の成立をめぐって」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究４』島根県教育委員会・大田市教育委員会

第４章　徳善寺上墓地の調査

第１節　調査の経緯と調査地点の名称について

「徳善寺上墓地」の名称は、令和５年度の現地悉皆調査の時点から暫定的に使用し、令和６年２月29日の調査指導会で協議したうえで、正式に使用している。当該墓地の名称については、特定寺院の付属墓地としての名称か、特定寺院との立地上の位置関係を示す呼称なのかで表記揺れが生じていた。これについて経緯を解説する。

1987年に島根県教育委員会から刊行された『石見銀山遺跡総合整備計画策定報告書』の記載では、「徳善寺跡に付随する墓地」という前提で紹介されている（島根県教委1987）。

平成13（2001）年４月には、当該墓地の分布調査が実施され53基の石塔の存在が把握された。その成果は、2005年に刊行された『石見銀山遺跡石造物調査報告書５』に「徳善寺跡墓地」として掲載されている。この時点では、徳善寺に付属する墓地として認識されていたことになる（島根県教委・大田市教委2005）。

令和５年度に、当該墓地の悉皆調査を実施するにあたり、事前に踏査したところ多くの墓塔に記される戒名に浄土宗に特徴的な「譽」号が使用されていることが判明した。

徳善寺（浄土真宗）に隣接して、浄土宗・定徳寺があり、天正年間～宝永７（1710）年まで銀山大谷に所在している。一方の徳善寺は慶長17年から明治６年頃まで銀山大谷に立地するものの、大谷地内で移転を繰り返し、現在地への移転は18世紀末頃と考えられる。

当該墓地での石造物の造立は、天正10（1582）年～延宝３（1675）年の間に収まることから、定徳寺の継続期間と合致する。このことから考えれば当該墓群は「定徳寺の付属墓地」と位置付けることができる。

しかし、これまでの研究史上長く用いられた呼称を俄かに転じることは混乱も予想されることから、徳善寺との地勢的な立地関係に基づき「徳善寺上墓地」の呼称を用いることとした。これまでも日蓮宗・妙本寺の背後山中に所在する浄土宗墓群について「妙本寺上墓地」、龍源寺間歩の上方山中にある浄土真宗と日蓮宗の混在する墓群について「龍源寺間歩上墓地」と呼称する前例もある。

大谷地区では、令和２年度～令和４年度にかけて発掘調査が行われた。当該地区での石造物調査は本経寺墓地で実施されたのみであり、状況が不鮮明であった。このことから大谷地区内ではまとまった造墓数が知られ、16世紀末～17世紀前半に造営された徳善寺上墓地についての実態解明が急がれた。

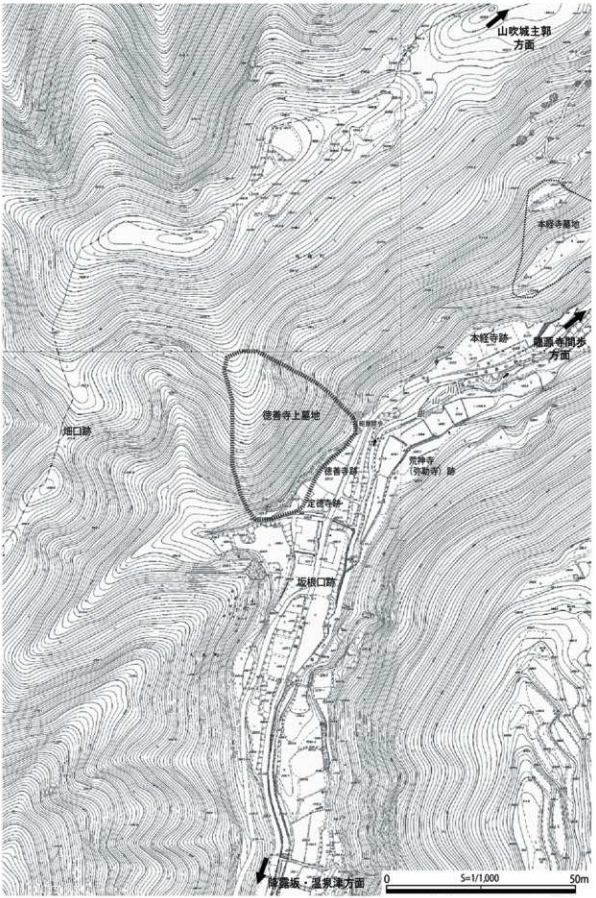
第２節　調査の経過と方法

石造物悉皆調査では平成25年度～令和元年度にかけて佐毘売山神社周辺の甚光院、妙本寺上、龍源寺間歩上などの地域で調査を実施した。栃畑谷、昆布山谷、出土谷など石見銀山内でも主要な生産域と佐毘売山神社の所在する地域での石造物の様相や展開が明らかになったといえる。

一方、これに隣接する大谷地区では平成24年度に本経寺墓地（日蓮宗）の調査が実施されて以来石造物調査は行われていなかった。しかし、令和２年度～令和４年度にかけて大谷地区の発掘調査が実施されるなど、石造物調査においても同地域の実態解明が急務となっていた（第15図）。

その中で、平成13年度の分布調査によって16世紀末～17世紀前半の石塔群が所在していることが知られ、かつ坂根口番所跡にも隣接している徳善寺上墓地は優先的に調査すべき墓群として認識された。

調査はおもに山麓の岩窟部分（標高227m前後）と山中の急傾斜地（標高230～270m）に造成された雛壇状の墓地に所在する石廟、石塔、石仏等を対象とし、令和５年10月11日から12月28日ま



第15図　徳善寺上墓地周辺地形図（S=1/1,000）

で、延べ21日を費やして断続的に実施した。

調査指導会は１回開催した。令和６年２月29日に、佐藤亜聖氏（滋賀県立大学）、西尾克己氏（テーマ研究客員研究員）から石造物の年代や性格、立地環境について調査指導を受けている。

悉皆調査の実施状況は以下のとおりである。

調査主体　島根県教育委員会、大田市教育委員会
調査参加者　岩橋孝典、渡部麻生、矢部俊一、新川隆、尾村勝
調査期間　令和５年10月11日～12月28日

調査の方法については、事前の踏査で確認したすべての墓塔や墓標について番号を付与し、種別、遺存状況、寸法、銘文、その他の特徴などを記入した調査一覧表を作成した（211点）。その中から、有銘文、遺存状況の良さ、特殊な型式のものを優先図化することとして、急斜面に存在するなど立地環境が悪いものや、大半が土中に埋没している個体は図化を見送っている。その結果、実測図を作成したものは106点となった。実測図はすべて実物の1/5で実測している。

写真撮影は、立地環境が悪いものを除いて基本的に全点撮影を行った。

石造物の分布する地形図は外部委託で作成し、全体をS=1/200で、分布の濃密な地域はS=1/100で原図を作成している。

第３節　石造物の概要

(1) 石造物の分布（第16～18図）

山麓の岩窟は標高227m付近に二か所並列して所在している。共に幅４m、奥行き1.5mほどの規模をもち、両岩窟の間隔は２mほどである。岩盤を開削した平坦面上に、それぞれ２基一対の大型・小型宝篋印塔を並列設置している。

現状では天井の無いオープンな岩窟であるが、平坦面の前面には岩盤を加工した石階段が設けられ、岩盤を開削した柱穴も認められる。奥壁の最上部には屋根や庇などの構造物を設置する段状の刳り込みが設けられ、さらに雨水を処理するための溝状の掘り込みが岩窟上面を囲繞する様子も確認される。

このような岩盤加工遺構は、石見銀山遺跡内の住居・工房などの建物背面の処置に通有するものである。このことを鑑みれば、大型宝篋印塔を設置した岩窟には本来、屋根が掛けられた覆屋となっている可能性がある。街道（標高221m前後）に面して立地し、温泉津や柑子谷側から銀山への出入り口である坂根口番所・畑口番所にも近い立地環境から、霊廟や拝所的な施設として機能していたと推定される。

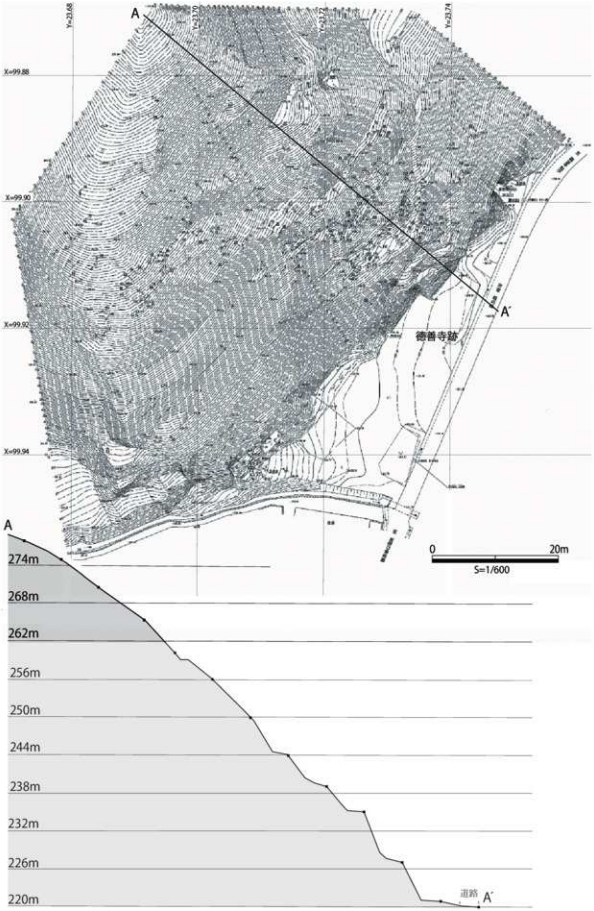
一方、山中の石造物群は、標高230～270mの急傾斜地に６群程度の狭長な平坦面開削ないし尾根上利用によって設置されている。

現在、徳善寺跡とされる市道銀山線に接する平坦地から墓群に至る葛折れの石段が認められ、これが本来の墓道と考えられる。墓群は標高の低い方からA群（標高230～238m）、B群（240～246m）、C群（245～250m）、D群（255～265m）、E群（255～260m）、F群（尾根上で251～270m）に区分できるが、急斜面に転落した墓石石材も多くみられる。

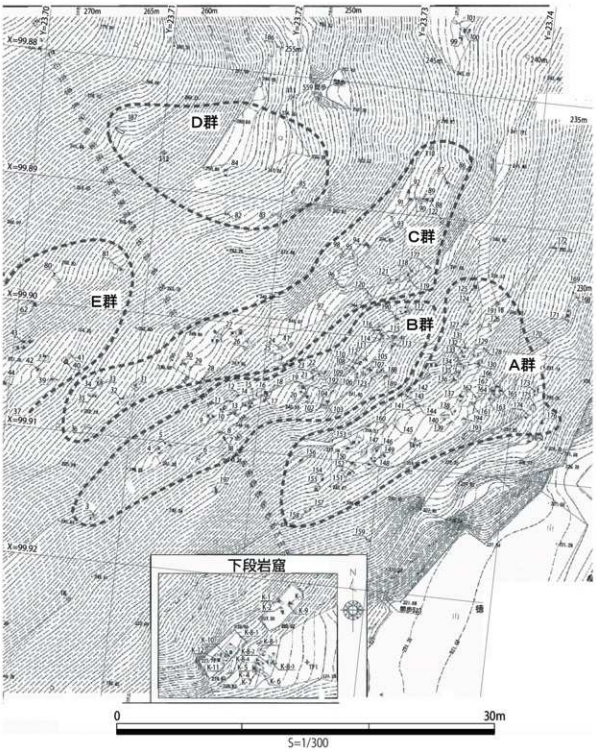
A群には、「当寺開山」の銘を持つ基礎（145）や石廟Ⅰ類（135）が存在する。B群では中規模の組合せ宝篋印塔（18、123）や石廟（117、190）、無縫塔（６）が含まれる。C群では大型の組合せ宝篋印塔（24・25、26・27、）や無縫塔（34）が存在する。D群は基数は少ないが、中規模の組合せ宝篋印塔（82）や無縫塔（186）が含まれる。

E群では、小型の石廟（43）があるが、一石五輪塔、一石宝篋印塔が主体である。尾根上のF群では石廟（78）がみられるが一石五輪塔、一石宝篋印塔が主体である。

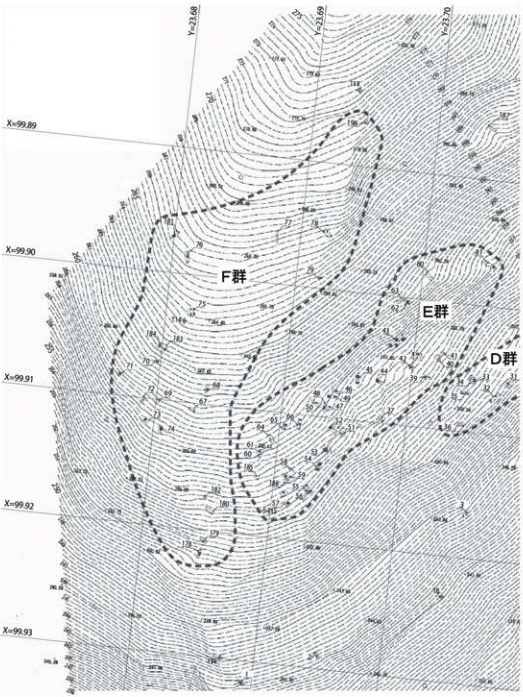
この状況から僧侶墓である無縫塔を含むA～D群に優位性がみられ、中でも開山塔や石廟Ⅰ類のあるA群と大型の組合せ宝篋印塔の存在するC群が徳善寺上墓地山中群の盟主的存在といえる。高所に所在するE・F群は一石五輪塔・一石宝篋印



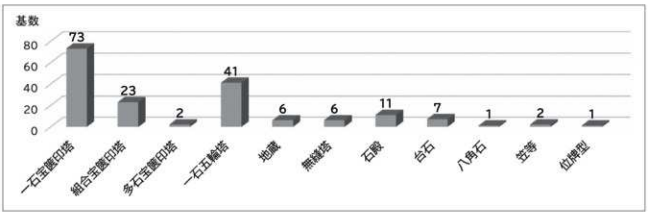
第16図　徳善寺上墓地全体地形図（S=1/600）



第17図　徳善寺上墓地東半分地形図（S=1/300）



第18図　徳善寺上墓地東半分地形図（S=1/300）



第19図　徳善寺上墓地の石造物種別

塔や小型石廟で構成されており、A～D群の造墓者よりも下位の造墓者が想定される。

この山腹斜面は、平均傾斜度40度に及ぶ急傾斜地である。佐毘売山神社周辺でもこのように急傾斜地への造墓は類例が少ない。

定徳寺の付属墓地として造墓が可能であった土地が限定されていたのか、あるいは急傾斜地に造墓することによる街道からの視認効果を期待した可能性が考えられる。

(2) 石造物の種類

徳善寺上墓地で確認された墓石については、墓塔147基（組合せ宝篋印塔23基、一石宝篋印塔（二石を含む）77基、一石五輪塔41基、無縫塔６基）と、墓標としては地蔵６基、位牌型方形墓標１基があった。また、石廟は完存するものはないが、部材の検討から少なくとも11基の存在が確認された。(第19図)

ただし、現地では未だ土中に埋没し、地表に一部だけ露出しているものや下方に転落している石造物が少なからず存在する。完全に土中に埋没している個体も存在する可能性が高いことから実態はこれよりもさらに多い墓塔が造立されていたとみられる。

以下、石造物の種別や型式分類は、島根県教育委員会・大田市教育委員会により、2005年に刊行された『石見銀山遺跡石造物調査報告書５』及び、2024年に刊行された『石見銀山遺跡石造物調査報告書21』による。

一石五輪塔（第20図）

２類１基、3a類１基、3b類３基、4a類10基、4b類15基、5a類４基、5b類２基、３ないし４類５基で構成される。各類型の出現期間を見ると、２類は天正期であり、3b類は文禄期である。4a類は『報告書21』によると天正期から文禄期を経て慶長期中まで安定的に存在するとされるが、当該墓地では慶長期から承応期まで４例認められ戦国期の事例が認められないことが特徴であろうか。4b類は慶長期から寛永期まで安定的に認められる。5a類は1617年の一事例が認められた。

一石宝篋印塔（第21・22図）

２類ないし３類２基、3a類７基、3b類17基、４類20基、３ないし４類29基、型式不明２基で構成される。各類型の出現期間を見ると、3a類は慶長初期に出現し元和期まで見られる。3b類も慶長初期に出現し、元和期まで事例が知られる。４類については宝珠下の溝施工が特徴として知られるが『報告書21』は天正期から継続する型式と指摘する（島根県教委・大田市教委2024)。しかし、当該墓地では1622年～1647年の４事例が認められるものの、慶長期に遡る事例さえ見られなかった。宝珠下の連弁表現を簡略化したものと考えることが妥当であり、本来３類に後出する可能性が高いといえる。

組合せ宝篋印塔（第23～26図）

相輪部21個、笠部22個、塔身６個、基礎16個、台座４個が確認されている。

相輪部についてはBI類12個体、BII1類６個体、型式不明３個体の合計21個体が知られる。BI類では相輪を線刻表現する個体は確認できず、無施文の個体のみであった。

笠部（屋根）については、A類１個体、BI類17個体、C類２個体、型式不明２個体であった。BI類の中では従来確認されていない「二段二重連弁（K8. K12. 26）」、「二段連弁（128. 131）」を施す個体がみられることが当該墓地の顕著な特徴といえる。天正期に遡る縦連子を軒下の表現するA類が１個体（157）存在するがそれと組み合う相輪部や基礎などは確認できなかった。

基礎については、B類１個体、C1類12個体、型式不明２個体に加え、宝篋印塔本来の形状に近い段形をもつ個体（145）が存在する。ただし、この個体は当寺開山の僧侶墓であることが銘文から判明しているため上部に無縫塔を樹立していた可能性もある。

上記のとおり、組合せ宝篋印塔ではパーツごとの状況により１類１基、２類１～２基、３類21基以上の存在が想定できる。このうち大型塔に区分されるA類に復元されるのは、下段の左側岩窟内に並置されたK8、K12と山腹に所在する26-27の３基である。K8は台座込みの総高197㎝、K12は台座込みの総高199㎝に復元されるもので当該墓地では随一の巨塔である。

26-27は基礎上面に２段の段形を持つもので古態であり、基礎の下には連弁付き台座を敷き、さらにその下部に切石台座を設置しており、復元総高は２ｍを超える。

これら３基の大型塔は笠部に二段二重連弁を施し、相輪部の連弁も二重連弁とするものであり、石見銀山遺跡内でも他に類例のない加装飾の個体である。

無縫塔（第27図）

塔身４基、円形台座２基が確認されている。僧侶墓である無縫塔塔身は４基分が確認されているが、原位置を保つものはない。代々住職墓として集約的に隣接して造墓されてはいないようだ。定徳寺は、宝永７（1710）年、六代住持還譽了空の時に大檀那の山根八左衛門種勝により邑智郡吾郷村に移転する。その時、一世から五世住持の墓石は、銀山大谷の定徳寺に残されたとされることから、今回発見された無縫塔はこれに該当するものと考えられる。

残りの１基分は未発見か、もしくは「当寺開山」の銘文を持つ基礎145の上部に別型式の墓塔（古式の宝篋印塔など）が建てられていた可能性は残る。

地蔵（第27図）

６基が確認されている。最大の個体（120）で高さ64㎝である。他の石造物に比べて小型であり、銘文の判読できた３個体は子供の墓であった。紀年銘の判読できた個体では1613年～1639年にかけて造立されたことが確認できた。

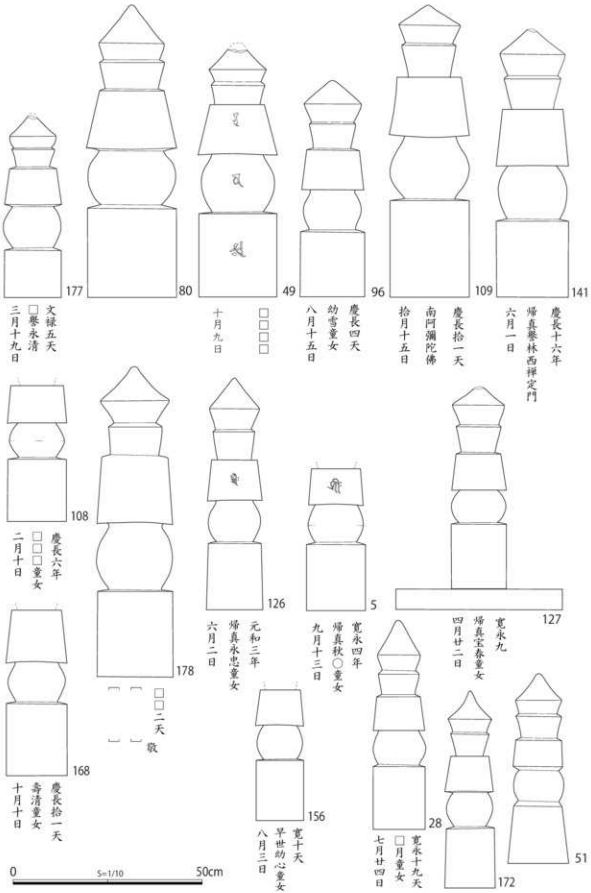
両手を合掌するものが３基（16、17、159）、右手に錫杖を構えるものが３基（102、120、132）存在する。

石廟（第28～31図）

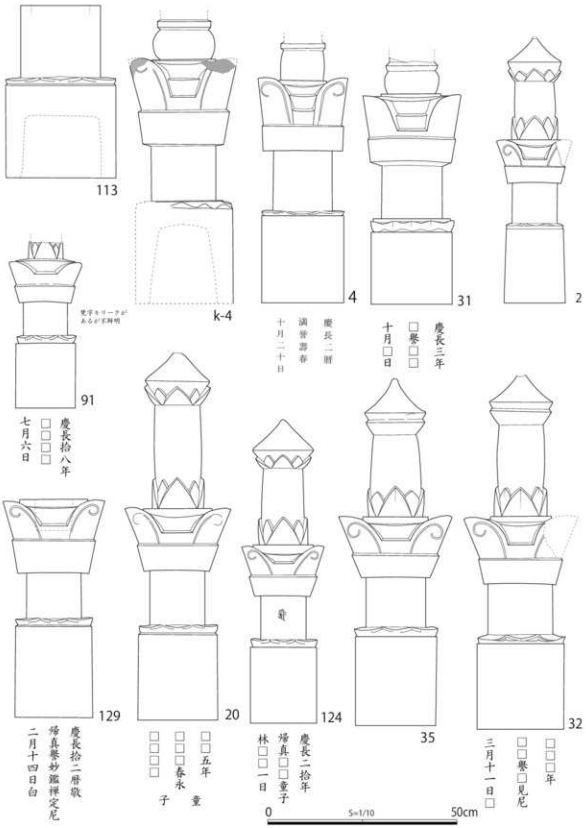
（11基以上）　当該墓地を特徴づける石造物である。溝を施工した基礎石が７基分見つかっているほか、石廟下部が原位置のままで見つかっているものが３基ある。

さらに倒壊し石材がバラバラになっているが（135-138-162-165-166）、柱、梁、桁材を持ち平入切妻屋根構造の石造建築形態を保つ古態の石廟が確認された。これは石見銀山内では、勝源寺境内に所在する第二代石見銀山奉行・竹村丹後守道清の墓所として造営された越前系石廟に型式的・構造的にも極めて類似するものである。

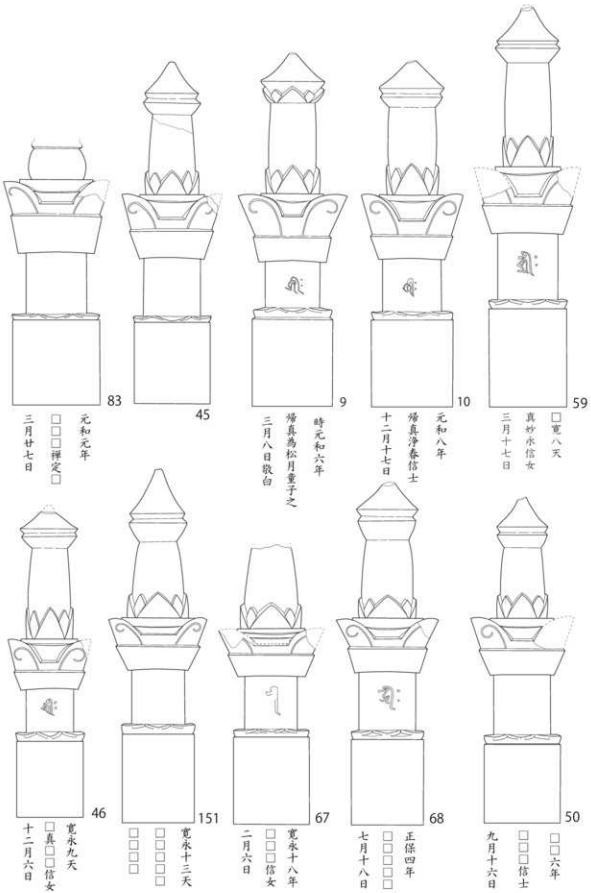
徳善寺上墓地では、石廟は11基以上造営され



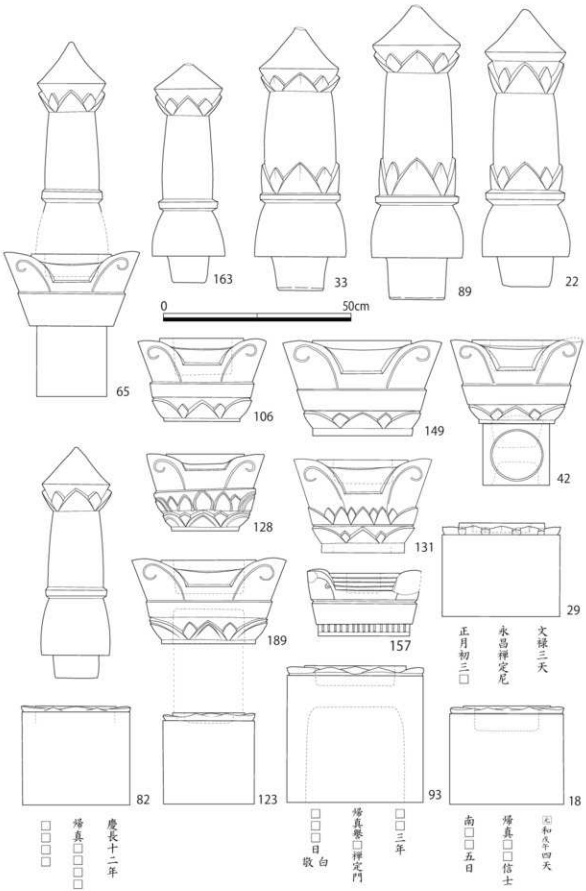
第20図　徳善寺上墓地　石造物実測図(1)　一石五輪塔（S=1/10）



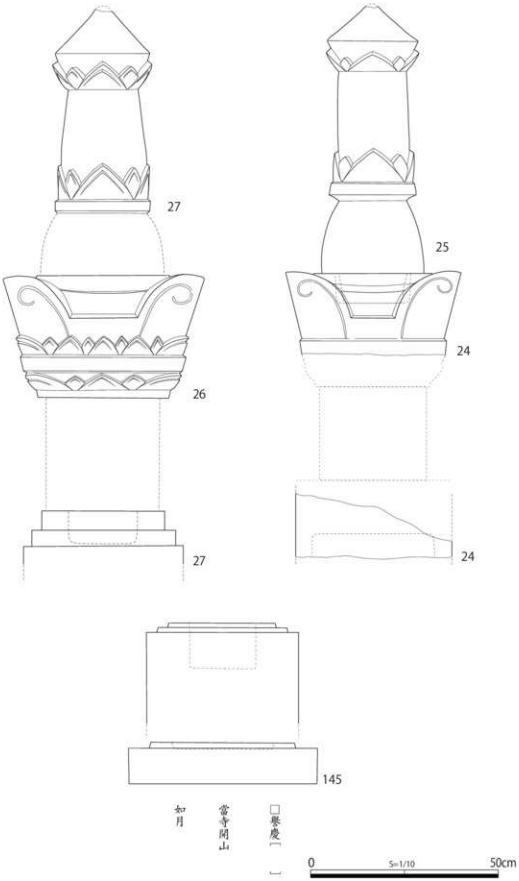
第21図　徳善寺上墓地　石造物実測図(2) 一石宝篋印塔1 (S=1/10)



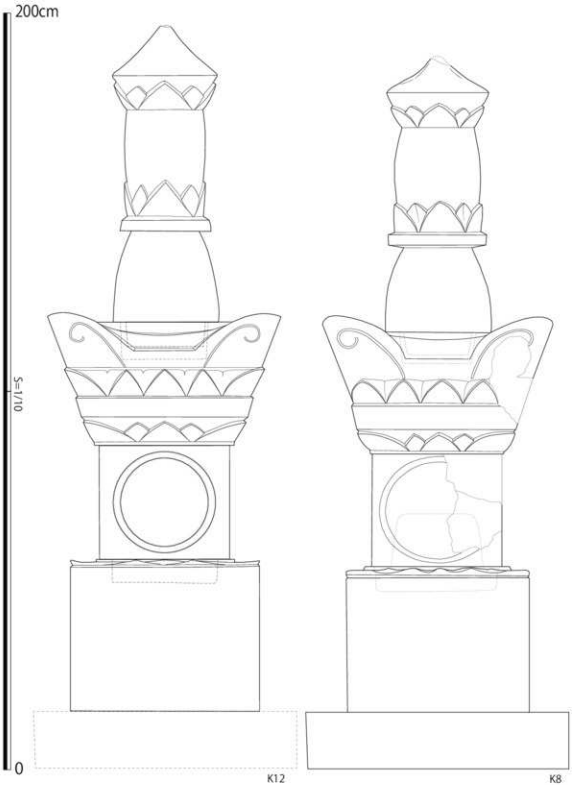
第22図　徳善寺上墓地　石造物実測図(3) 一石宝篋印塔2 (S=1/10)



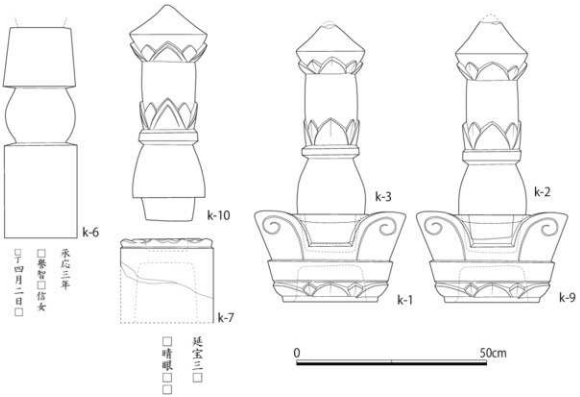
第23図　徳善寺上墓地　石造物実測図(4) 組合せ宝篋印塔1 (S=1/10)



第24図　徳善寺上墓地　石造物実測図(5) 組合せ宝篋印塔2 (S=1/10)

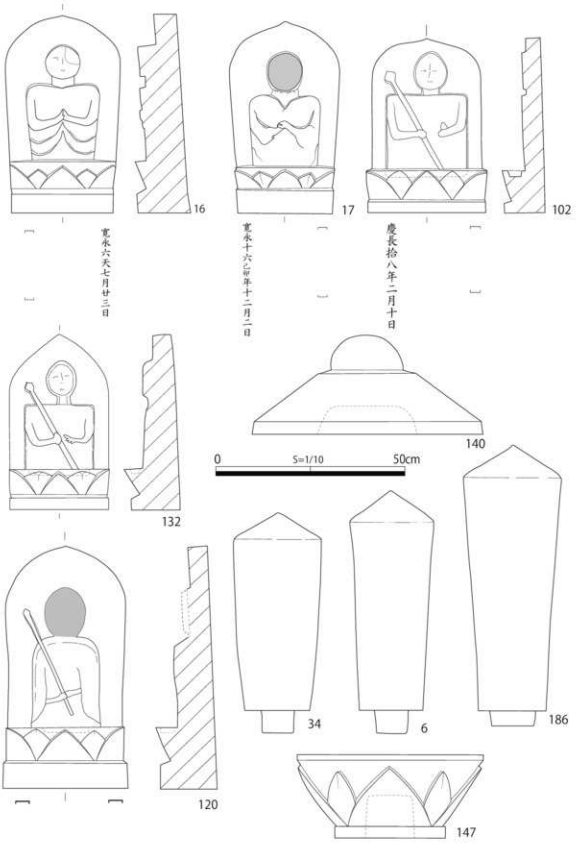


第25図　徳善寺上墓地　石造物実測図(6) 組合せ宝篋印塔3 (S=1/10)

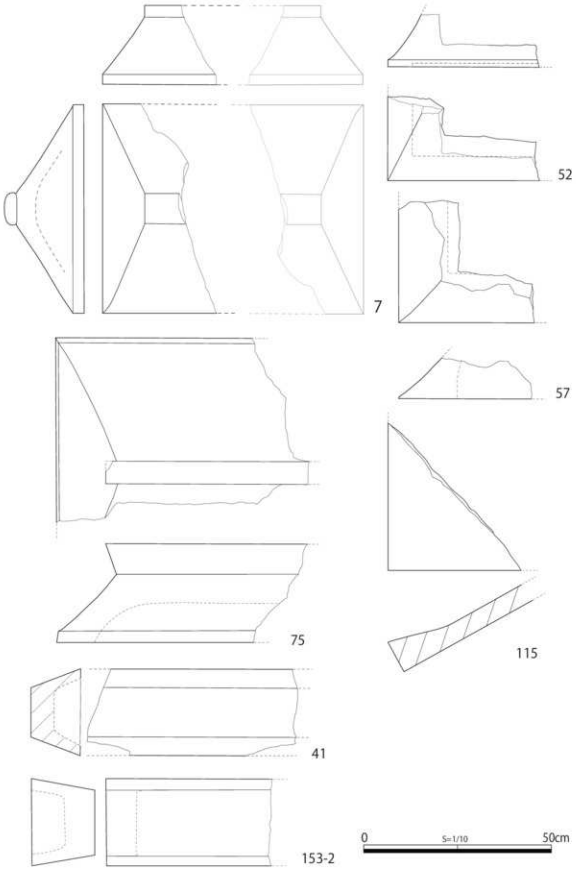


徳善寺上墓地 下段岩窟（右側）の状況

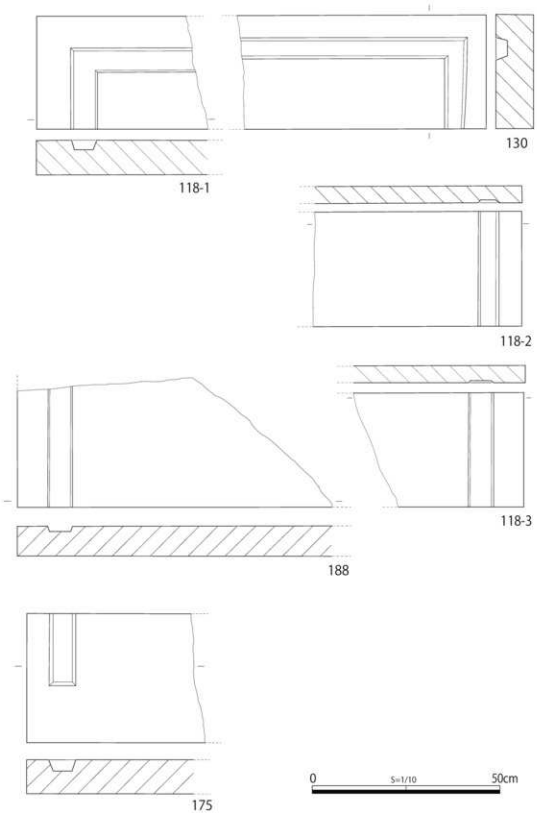
第26図　徳善寺上墓地　石造物実測図(7) 下段小型塔（S=1/10）



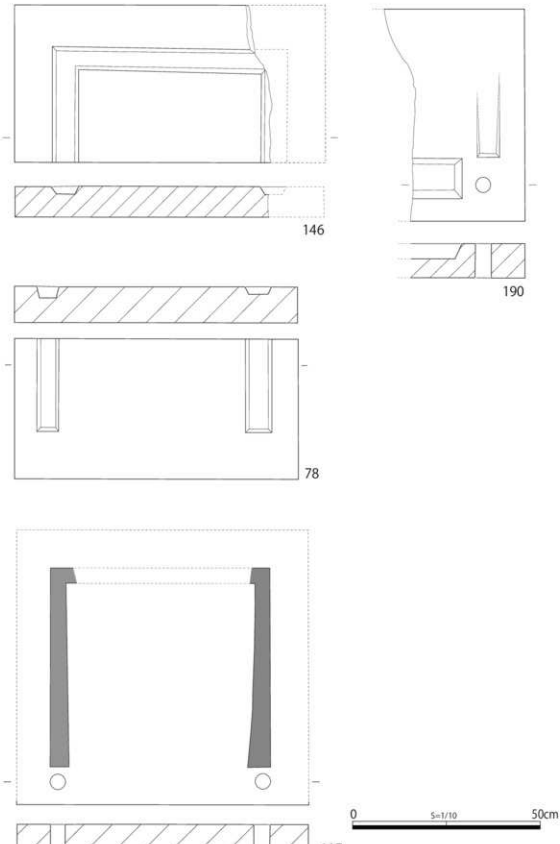
第27図　徳善寺上墓地　石造物実測図(8) 地蔵・無縫塔塔（S=1/10）



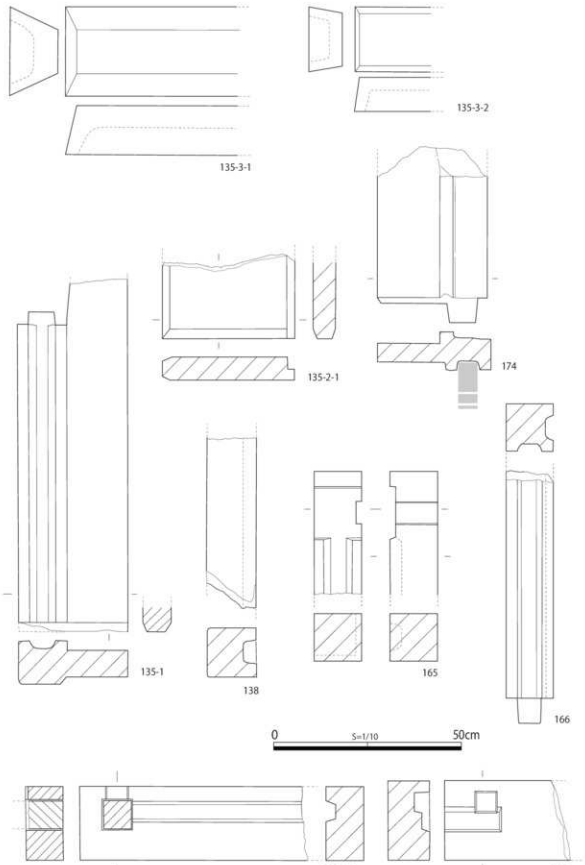
第28図　徳善寺上墓地　石造物実測図(9) 石廟1 (S=1/10)



第29図　徳善寺上墓地　石造物実測図(10) 石廟2 (S=1/10)



第30図　徳善寺上墓地　石造物実測図(11) 石廟3 (S=1/10)



第31図　徳善寺上墓地　石造物実測図(12) 石廟4 (S=1/10)

ているが、これは龍源寺間歩上墓地と同数である。銀山町での石廟展開の在り方を考えるうえで重要であることから別節にて再論する。

第４節　徳善寺上墓地の特質

(1) 銘文からみた造営年代と石塔の建立者

徳善寺墓地の造営期

徳善寺上墓地で確認された墓塔の内、紀年銘が確認されたものは53基であった。その内訳を時系列で示したものが第32図である。

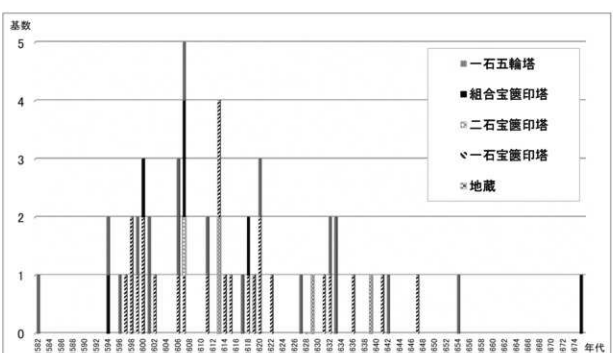
それによると、山中の急傾斜地において、造墓の開始は天正10（1582）年であるが、その後10年余り造墓活動が休止している。そして、再開されるのが文禄３（1594）年からで、慶安４（1648）年ごろまで継続的に造墓がなされる。造墓のピークは慶長13（1608）年であり、その後は漸減している。

山中の急傾斜地での造墓が終了した直後、山麓部分で承応３（1654）年、延宝３（1675）年の紀年銘が確認される。山麓岩窟内の大型組合せ宝篋印塔については紀年銘がないが、福光石石材の使用が開始されていることから、寛永10年頃以降に岩窟内の造墓が開始された可能性がある。

銀山町内のこれまでの石造物悉皆調査地点では16世紀末から17世紀中頃を第１次造墓活動として、18世紀前半頃から第２次造墓活動が再開される傾向が示されている（西尾、新川、尾村2024）。ところが徳善寺上墓地では、17世紀中頃以降造墓活動が再開されることなく、墓域として廃絶している。現象面では妙本寺上墓地Ａ地点などと類似している。

定徳寺の寺伝のとおり、17世紀後半には檀家が離散して寺勢自体が衰退したうえ、宝永７（1710）年には定徳寺自体が邑智郡吾郷村に移転しており、造墓主体の不在が端的に墓域のとしての衰退に直結しているとみられる。また、当該墓群の立地している地勢が際立った急傾斜地であり、18世紀以降の後代の人たちが容易に墓域として活用できる状況になかったことも理由としてあげられるであろう。

なお、徳善寺上墓地は急斜面を部分的に開削して平坦面を造成しており、墓石を設置する床面は岩盤となることが考えられる。銀山柵之内の16世紀末～17世紀初頭の石塔造立箇所では、石塔



第32図　徳善寺墓地における墓石紀年銘の出現頻度

直下の土葬用墓坑や人骨が確認された例はない。徳善寺上墓地においても、石塔下への土葬は未確認であり、また想定も困難である。当該墓地においても人体埋葬は、別の場所を想定せざるを得ないと思われるが今後の課題としておきたい。

浄土宗墓地としての特質

墓石に刻字された戒名で「譽」号が11例、禅定門・禅定尼が18例、信士・信女が10例であった。また、童子６例、童女11例が確認された。このことから浄土宗定徳寺の付属墓地である可能性は高いものといえよう。

また、子どもの墓が全体の１割以上を占めている。比較的富裕な階層に帰属する子供については石塔・地蔵などを造立される対象になっていることが考えられる。

性別年齢による石塔の選択状況をみると、子どもは地蔵（６基）が有意に選択されるほか、女児では一石五輪塔（８基）のみが選択されるのに対して、男児では一石宝篋印塔（３基）、一石五輪塔（２基）が造立されていた。

一方、成人の場合をみると男性では組合せ宝篋印塔（５基）、一石宝篋印塔（７基）、一石五輪塔（３基）である。女性では組合せ宝篋印塔（３基）、一石宝篋印塔（10基）、一石五輪塔（１基）が確認された（第33図）。

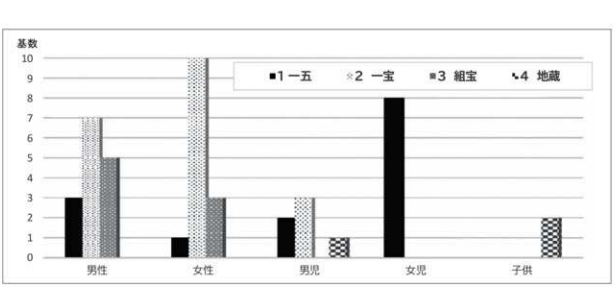
成人性別による石塔選択の比較では、男性では一石宝篋印塔の選択数が最も多いが（47%）、組合せ宝篋印塔もそれに次いでいる（33%）。一方、女性でも、一石宝篋印塔の選択数が最も多く（71%）、組合せ宝篋印塔もそれに次いでいる（21%）。この内容から、男女共に経済力次第で石塔の種類や規格を比較的自由に選択することができたとみられる。これは、当時の鉱山社会特有の事象かもしれないが、一般的な都市社会・農村社会での造墓状況と比較検討するための素材としては有意とみられる。

石造物に刻字される梵字や仏教的記号については以下のとおりである。

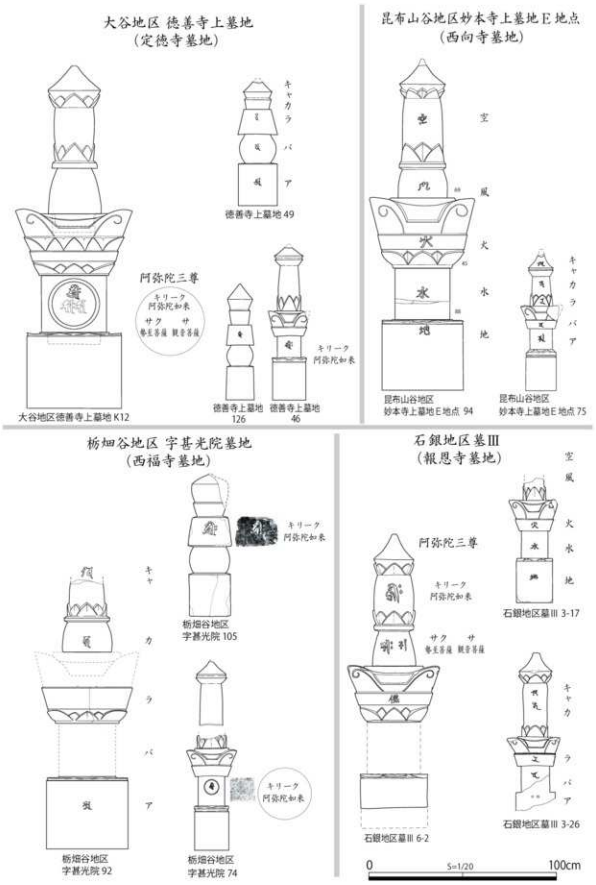
日輪内に梵字キリーク・サ・サク（阿弥陀、観音菩薩、勢至菩薩）の阿弥陀三尊を塔身に施す事例は、組合せ宝篋印塔K8、K12の２個体に認められた。単体の梵字キリークは19個体（一石五輪塔５基、一石宝篋印塔13基、組合せ宝篋印塔１基）に施される。このうち組合せ宝篋印塔（42）は塔身に施された日輪内に梵字キリークを施している。

梵字キャカラバアは、一石五輪塔２基に施されているが、漢字で「空風火水地」と施された事例は当該墓地では事例がなかった。

石見銀山の柵之内（銀山町）ではこれまでの石造物調査で浄土宗寺院に付帯すると考えられる墓



第33図　徳善寺上墓地の性別・年齢による石造物の型式選択状況



第34図　石見銀山遺跡内の浄土宗墓地における梵字種字の用例（S=1/20）

域が字甚光院、妙本寺上墓地、石銀地区墓Ⅲなどで調査されている（第34図）。

石銀地区墓Ⅲでは、3a・3b類の組合せ宝篋印塔の相輪部に梵字キリーク・サ・サク（阿弥陀、観音菩薩、勢至菩薩）の阿弥陀三尊を施す事例が少なくとも４基存在したが、銀山内の他所では知られない。

妙本寺上墓地では、キャカラバアや空風火水地を刻字する事例が顕著であったが、佐毘売山神社を挟んで北側の字甚光院墓地では、キャカラバアと日輪内に梵字キリークを施す事例が卓越していた。

このように、同じ銀山町の浄土宗寺院墓地であっても、墓塔に施される梵字・種字などの仏教的文字については差異が認められる。このことから、墓石の発注仕様について、檀家から寺院（住持）に相談・協議があり、寺院側で発注仕様を整えて石工に発注していたと考えられる。墓塔の仕様については同一宗派の寺院であっても各住持の宗教的見識が反映されているとみられる。

(2) 徳善寺上墓地に特徴的な石造物

石廟－その名称について－

石見銀山遺跡石造物調査報告書では、これまで一貫して、石塔を内蔵する石屋形状の石造構造物について「石殿」と呼称してきた。最も代表的なものとして勝源寺境内に所在する第二代石見銀山奉行・竹村丹後守道清の墓所に使用されているものが知られる。

このたび、以下の理由により本報告書からこれを「石廟」と呼称することにする。

① 17世紀前半に、石見銀山周辺に展開する「石廟」は竹村丹後守道清墓の石廟が祖型であり、その派生形が展開している（関根2011）。さらに竹村丹後守墓の石廟の祖型は、新潟県佐渡市の大安寺にある大久保長安逆修塔（慶長16（1611）年）を納める「越前式石廟」とみられる。佐渡大安寺の石廟は、切妻直線屋根平入構造であり、「越前式石廟」の階層的序列の中では、加賀前田家などの大名墓型式（妻入り切妻直線屋根構造）と重臣墓（平入反屋根構造）の中間の「幕臣・奉行墓」型式を創出している（本問2024）。竹村墓は、石材こそ在地の福光石で製作しているが、佐渡大安寺石廟に始まる「幕臣・奉行墓」型式を石見銀山御料に導入した画期的な存在として評価されることから、「石廟」と呼称することが相応しい。なお、竹村墓の石廟は、福光石製であることから狭義の「越前式石廟」から派生した「越前系石廟」として捉えられる。

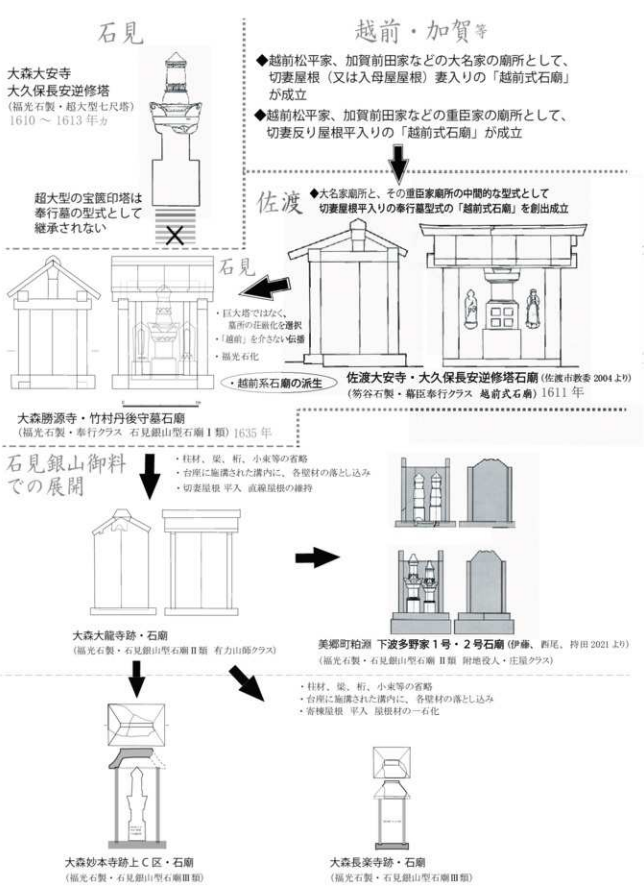
② 石見銀山に導入された竹村墓石廟は、柱、梁、桁、小束などを別材で作り出しており、石造建築と呼ぶことができる。これを石見銀山型石廟Ⅰ類とする。

石廟は、石見銀山御料内で急速に普及するが、Ⅰ類の構造的な複雑さから、急速に簡易型式が登場する。柱、梁、桁などの構造材を省略し、基礎石上面の３方向に施した溝内に壁材を落とし込んで固定し、屋根は切妻直線屋根平入を踏襲するもので、これを石見銀山型石廟Ⅱ類とする。

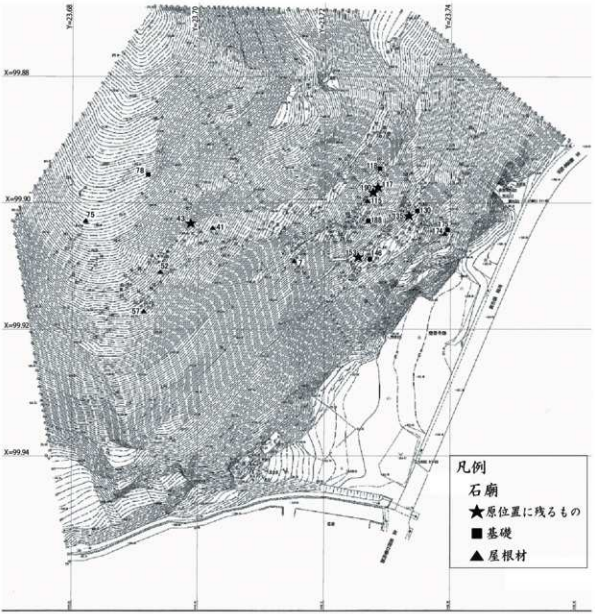
さらに、Ⅱ類から簡略化が進行する。屋根を平入寄棟造として、これを一石で製作する。これを石見銀山型石廟Ⅲ類とする。「越前系石廟」の型式的変化の流れは、屋根を構成する石材数の減少の道筋とみることもできる。石見銀山型石廟Ⅰ類の段階では、屋根材は10個前後（前４枚、後４枚、棟石２枚程度）で構成されていたが、石見銀山型石廟Ⅲ類の段階では屋根を一石で作成し、別材の棟石を載せる程度にまで減少している。（第35図）

このように、石見銀山型石廟は、階層性を内包した「越前式石廟」からの系譜関係が明瞭で、17世紀後半には廃絶し、18世紀以降に登場する別系譜の石屋形状の覆屋と一線を画するグループといえる。

③ 「廟」の字義に、死者・祖霊を祀る宗教施設、神を祀る宗教施設、政治を執り行う場所などの



第35図　石見銀山型石廟の変遷（S=1/50）



146

153

135

第36図　徳善寺上墓地　石廟分布図（S=1/600）

意味があるという。「殿」には貴人の住む立派な建物という意はあるが死者・祖霊を祀る宗教施設という意味が一義的には希薄である。そのため「廟」の字を充てることが至当と判断した。

石廟の分布

石見銀山遺跡内では、竹村墓石廟が唯一造立当初の樹立された状態で現存している。これまでの石造物調査において銀山町の他の地点においても、「石廟」部材は確認されているが、倒壊破損した状態で見つかることが大半であるために十分に注目検討される機会もほとんどなかった。

現在、石見銀山遺跡内で知られている「石見銀山型石廟Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類」は、龍昌寺墓地３例、大龍寺墓地１例、字甚光院１例、妙本寺上墓地３例、長楽寺墓地１例、龍源寺間歩上墓地10例である。それに加えてこの度の徳善寺上墓地において11基以上の石廟が確認された。(第36図)

徳善寺上墓地では、石見銀山内で竹村墓石廟以外に知られなかった「石見銀山型石廟Ⅰ類」が新規に発見された意義は大きく、その造立者や竹村家との関係性まで踏まえて評価を行う必要がある。

龍源寺間歩上墓地と徳善寺上墓地は、大谷地区の両岸の尾根上・山腹にある。石見銀山遺跡の「石廟」を語るうえで大谷地区の重要性が際立ってきたといえよう。

また、石見銀山御料内では、美郷町粕淵の浄土寺北隣に所在する下波多野家墓地内に石廟Ⅰ類１基、Ⅱ類２基が所在することが報告されている(伊藤、西尾、持田2021)。また、川本町の妙船寺墓地には石廟Ⅱ類１基が存在することが報告されている（伊藤、西尾2020)。

2003年に竹村墓石廟の報告が『石造物調査３』に掲載され、2011年には関根達人氏により、日本列島各地に所在する越前式石廟が集成検討された（関根2011)。関根氏の検討により石見銀山遺跡内の石廟も、「越前式石廟」の連枝に位置付けられたが、それに対して石見銀山側の反応は久しくなかった。

しかし、越前式石廟との系譜関係が明らかとなった今、石見銀山内での石廟導入や展開については解明すべき課題が多く残されている。すなわち石廟導入に伴う「福光石」石材の開発や、石廟Ⅰ類造立者と竹村家との関係など、連動する未解明な課題は多い。本報告書では紙幅の関係もあり詳述はできないが、いずれこの問題について詳しく言及したいと考える。

加装飾の組合せ宝篋印塔

徳善寺上墓地では、組合せ宝篋印塔の笠（屋根）B1類に類例の知られていない請花連弁の加飾のある個体が存在する。具体的には「二段多重連弁（K8. K12. 26)」、「二段連弁（128. 131)」を施す個体である。

笠（屋根）B1類では、軒下に請花（主弁＋子弁）を施すことが通例である。「二段二重連弁(K8. K12. 26)」としている３例では軒下部分に請花を施し、無文の軒を挟んで軒上部分にも請花を施す。この請花は花弁端部に線刻をもち、二重に重なった花弁を表現する。

また、二段連弁（128. 131）としている２例では、軒下の請花だけでなく、本来は無文の軒になる部分に請花が施されており、「二段多重連弁」の簡略形態とみることができる。

また、相輪部（K10. 27）では、宝珠下と突帯上の請花が「二重連弁」となっている。

このように、徳善寺上墓地では複数基の組合せ宝篋印塔に加装飾の連弁が施されている。石見銀山遺跡内では龍源寺間歩上墓地で数例確認されており、大谷地区の有力墓地の特徴といえる。

(3) 石塔造立範囲の変遷からみた山吹城の城域認識の変化（第37図・第38図）

徳善寺上墓地は、山吹城から南西に連なる尾根筋の東斜面に立地している。山吹城の南西側の城域を考えるうえで、墓域としての土地利用の変化

は有効な検討材料といえる。徳善寺上墓地や本経寺墓地（H24年度調査）などの石造物調査・発掘調査の成果から山吹城の城域変遷について検討してみたい。

山吹城の具体的な城域についてはこれまで具体的な検討が少ないが、先行研究を概観する。山吹城の縄張図作成については、島根県教育委員会が平成５～９年度にかけて実施した中近世城郭分布調査において、山頂部分の主郭を中心とした縄張図が作成されたことを起点とする（島根県教委1997）。のちにこの調査を担当された寺井毅氏によって、大手の休役所周辺や南西尾根の郭群も追加調査されて、縄張図の精度は向上しつつある（寺井2002）。

2012年には、落石対策事業に伴って本経寺墓地東側平坦地の発掘調査が実施された。平坦面からは17世紀初頭の陶磁器（唐津）、無文銭などのほかに、鉄砲玉や鐔の石突が出土しており、ここが山吹城の南西斜面を防衛する坂虎口として機能した可能性が指摘された（島根県教委2014）。従来、大手側の休役所付近に比べて関心の薄かった搦手側の城域について検討が可能な段階になったといえる（目次2017）。

検討材料として以下の地点情報を提示する。

① 徳善寺上墓地…16世紀第４四半期から17世紀第２四半期まで墓域。西側は深い谷によって遮られる（天然の堅堀の可能性）。

② 本経寺墓地…紀年銘としては、寛永３（1626）年の年号を持つ組合せ宝篋印塔が最古である。それ以降、断続的に造墓されていおり、19世紀前半頃が石造物造立のピークである。墓石戒名から日蓮宗本経寺の付属墓地と考えられる（島根県教委・大田市教委2013）。

③ 西善寺墓地…18世紀中頃の宝暦年間から造墓が始まる墓域である。墓石は円頂方柱形で、戒名は「釈」であることから浄土真宗西善寺に付属する墓地とみられる（島根県教委・大田市教委2013）。

④ 前述した坂虎口と考えられる平坦面。17世紀初頭には山吹城の一角として機能する。その後も墓域やほかの用途に転用されず、空閑地として保全されたとみられる（島根県教委2014）。

さて、上記のような土地利用状況から山吹城の城域変遷を以下のように考えたい。

16世紀後半～17世紀初頭（元和年間）

徳善寺上墓地の西側を区切る竪堀状の谷地形が山吹城の内と外の境界と考えられる。この谷地形を超えて西側には当該期の墓域は展開しない。

高橋家文書の慶長９（1604）年、「山吹城普請千石夫之割」によると、一千石につき三人ずつ割り当て普請を行ったとあり、城郭機能の維持がなされていることがわかる（村上1978）。

17世紀第２四半期（寛永年間以降）

本経寺墓地に石塔の造立が開始される。元和偃武となり、一国一城令の施行や大森陣屋への行政機関移設に伴い山吹城の支配機能は停止されたと考えられる。ただし、江戸時代を通じて山吹城の城域の大半は官有林「御立山（御林）」として大森陣屋で管理され、乱開発は規制されている。

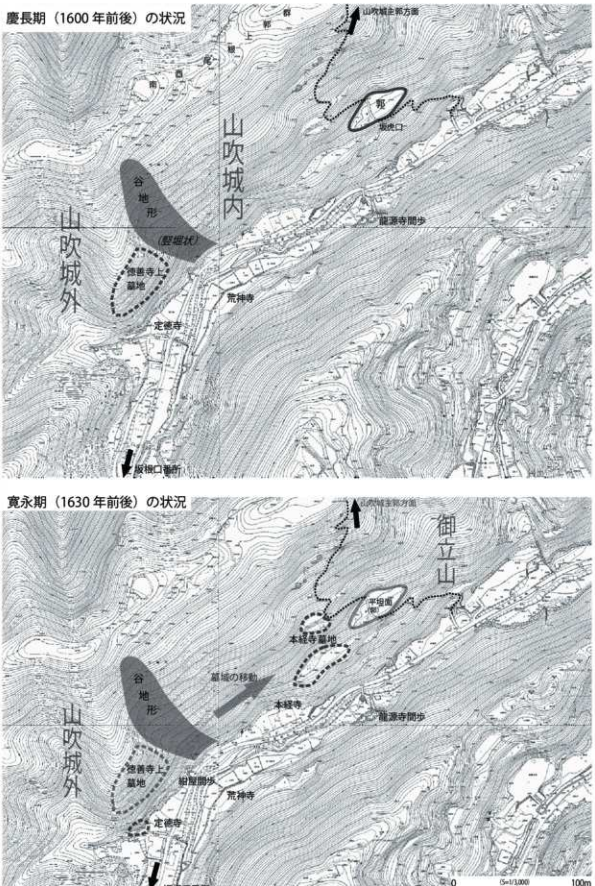
18世紀中頃（宝暦以降）

西善寺墓地の造営が始まる。坂虎口部分の平坦面は西側部分が空閑地として残される。

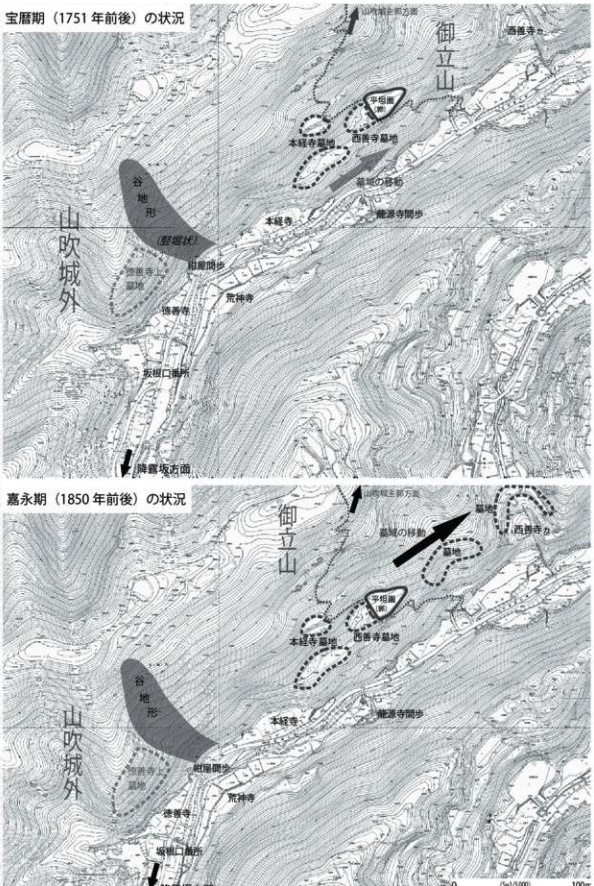
19世紀

坂虎口平坦面は温存されるが、それを超えた西側でも造墓活動が開始される。

このように、山吹城南西部の土地利用変遷を石造物と発掘調査の成果から推定した。城域を「御立山」として管理し、民間開発を抑止してきたのは森林資源の保護管理の目的と併せて、いざという時に城郭として再利用できる状態に保っていた可能性を指摘した。17世紀初頭に郭として機能していた「坂虎口」の広い平坦面（幅55m×奥行き22m）について、墓域を含む他用途に転ず



第37図　山吹城南西麓における土地利用の変遷（その１・２）（S=1/3,000）



第38図　山吹城南西麓における土地利用の変遷（その３・４）（S=1/3,000）

ることなく空閑地として温存している。これほどの広さの平坦面であれば、江戸時代中・後期に別用途に利用されていてもおかしくないが、城郭として再利用する際に有意な土地空間という認識は保持されていたのであろう。

山吹城の広大な城域のうち、大谷地区はその南西端の部分に該当する。山頂の本丸や北東裾の休役所付近など、城跡の要地は江戸時代を通じて「御立山」などとして保全されている。しかし、大谷地区ように城域末端では、江戸時代を通じて少しずつ土地の転用が進む様子もうかがえるのである。

山吹城の城域やその土地利用の変遷について、文獻史料による裏付けは現状では不明である。石造物調査や発掘調査の成果は、状況証拠ではあるが一つの方向性を示しており、今後より多くの事象と照らし合わせることによって検証が進むことを期待したい。

第5節　小結

徳善寺上墓地は、昭和62年の総合整備計画策定時からその存在が知られていた石見銀山遺跡を代表する墓域の一つである。世界遺産登録を目指して総合調査が始まったあと、平成13年には、当該墓地の分布調査が実施され53基の石塔の存在が把握された。その後、石造物調査の主軸が下河原、石銀、栃畑谷、昆布山谷方面に遷移する中で、大谷地区は石造物調査の潮流からやや外れた地域となっていた。

この度、徳善寺上墓地の石造物悉皆調査を実施し、165基以上の石塔、石廟などが林立していたことが確認された。分布調査などの事前情報による想定を超えた石造物の発見により、石見銀山最盛期における大谷地区の重要性や独自性が一部ではあるが俄かに顕在化してきたといえる。

ここは龍源寺、紺屋後、小吹屋後、甘南備、荒神、恵珎山など重要な間歩群を擁する鉱山生産の要地の一つであること加え、坂根口・畑口番所が近隣に所在し、温泉津・仁摩方面から銀山柵之内にアクセスするための交通上のボトルネック的要衝でもある。

大谷地区の再評価は、近年の発掘調査でも少しずつ明らかとなりつつあるが、石造物調査においても調査研究の進展が期待されよう。

[参考文献]

伊藤創、西尾克己、持田直人　2021「邑智郡・美郷町・下波多野家墓地における石塔・墓標の変遷」『石見銀山遺跡の調査研究11』島根県教育委員会・大田市教育委員会

伊藤創、西尾克己　2020「江の川流域の福光石系石塔の様相」『池上悟先生古稀記念論文集　美碧蜂の考古学Ⅱ』池上悟先生古稀記念会編　六一書房

佐渡市教育委員会　2004『佐渡金銀山　相川地区石造物分布調査報告書』

三瓶古文書を読もう会　1995『石見銀山百か寺』

島根県教育委員会・島根県文化財愛護協会　1987「紀年銘のある石塔」『石見銀山遺跡総合整備計画策定報告書』

島根県教育委員会　1997『島根県中近世城館跡分布調査報告書第1集　石見の城館跡』

島根県教育委員会・大田市教育委員会　2005『石見銀山遺跡石造物調査報告書5　分布調査と墓石調査の成果』

島根県教育委員会・大田市教育委員会　2013『石見銀山遺跡石造物調査報告書13 大谷地区本経寺墓地の調査』

島根県教育委員会　2014『石見銀山遺跡大谷地区　本経寺墓地発掘調査報告書』

島根県教育委員会・大田市教育委員会　2024『石見銀山遺跡石造物調査報告書21　分布調査と墓石調査の成果（2005～2022）』

関根達人　2011「石廟の成立と展開」『日本考古学』第32集　日本考古学協会

寺井毅　2002「山吹城と石見銀山」『戦乱の空間』創刊号　戦乱の空間編集会

西尾克己、新川隆、尾村勝　2024「昆布山谷周辺部の寺院跡と墓地・墓石－石見銀山遺跡の石造物調査成果を中心として－」『石見銀山遺跡石造物調査報告書21　分布調査と墓石調査の成果（2005～2022）』

西尾克己・持田直人　2024「美郷町・松林山定徳寺について－石見銀山百か寺の調査－」『石見銀山遺跡の調査研究14』島根県教育委員会・大田市教育委員会

本間岳人　2024「佐渡島石塔調査雑録」『立正考古』第59号　立正大学考古学研究会

村上直ほか　1978『江戸幕府石見銀山史料』雄山閣

目次謙一　2017「山吹城跡」『石見の山城』高屋茂男編　ハーベスト出版

189	188		186							挿図番号
		187		185	184	183	182	181	180	調査番号
組合せ宝篋印塔3類（笠部C Ⅰ）	石殿（基礎）	一石五輪塔5a類	無縫塔	一石五輪塔3類	一石宝篋印塔3a類	一石宝篋印塔3類または4類	一石五輪塔5b類	一石宝篋印塔3b類	一石五輪塔5a類	種別
24.5	8	75	74	(26)	97	(54)	55	99	83	全高
41	(83)	19	26	24	28	27	14	25.5	21.5	最大幅
		（正面）□□□□□□□□二月十日白		（正面）文光三年三月十四日	（正面）□長三年□月十九日	（正面）□長絵八年□月拾四日		（正面）□長一年□月十二月三日		銘文
幅1 2 3 の基礎と一体化する。花の主弁は二重花弁。	福光石製。上面一辺の幅に6／7cm、深さ5cmの溝を施す。造作は丁寧。	白色凝灰岩製	丘陵上の高所に立地する	地輪のみ残存。白色凝灰岩製	宝珠下には反花を施す。上面は無装飾。白色凝灰岩製。基礎は反花を施す。伏鉢	基礎上面に請花。白色凝灰岩製。基礎上面は反花を施す。	白色凝灰岩製	伏鉢と宝珠には請花、上面は反花を施す。白色凝灰岩製	白色凝灰岩製	備考
				1594	1598	1613		1606		西暦

199	198	197	196	195	194	193	192	191	190
一石五輪塔4b類	一石宝篋印塔3a類	組合せ宝篋印塔（笠部B Ⅰ）3類	一石宝篋印塔3類または4類	一石五輪塔4b類	円形台座	一石宝篋印塔3類または4類	一石宝篋印塔3a類	組合せ宝篋印塔（相輪部B）3類	石殿（基礎の一部）
(34)	(48)	30	(34)	(35)	(14)	(54)	18	16	9
13	27	49	24	12.5	(41)	28	25		56
（正面）元和六年三月十三日心貞童女			（正面）慶長四年□□□□□□□□三月十二日天定門			（正面）□□□□□□□□□□□□□□□□年女			
空風輪は欠損。白色凝灰岩製	土中に正立し、塔身より下は埋まる。相輪部は欠損。伏鉢は無装飾。白色凝灰岩製	笠部凝灰岩製。下には請花を施す。	塔身の半分より上は欠損。基礎の白色凝灰岩製。反花を施す。	空風輪は欠損。白色凝灰岩製	下面に請花を設ける。無縫塔の基礎か	相輪部では欠損すで実測できず。	相輪部は欠損し、塔身以下は土中に横倒しで埋まる。	相輪部のみ。宝珠側は土中に埋まる。白色凝灰岩製。	水盤と花立穴を備える。福光石製。
1620			1599						

挿図番号	調査番号	種別	全高	最大幅	銘文	備考	西暦
168							
	167	組合せ宝篋印塔3類（基礎G Ⅰ）	(19)	29	（正面）慶長拾一天 壽清女 十月十日	白色凝灰岩製	
	166	石殿（柱材）	(60)	12.5		空風輪は欠損。白色凝灰岩製	1606
	165	石殿（柱材）					
	164	組合せ宝篋印塔3類（相輪部B Ⅰ）	(42)	19		伏鉢は無装飾。宝珠は突帯状の欠損。福光石製	
	163	組合せ宝篋印塔3類（相輪部B Ⅱ1）	58	19		基礎は凝灰岩製。白色凝灰岩製	
	162	石殿（基礎）	11	(33)		壁体落とし込みの溝と柱穴を持つ。福光石製	
	161	組合せ宝篋印塔3類（相輪の一部）	(33.0)	17		1 3 7 の笠部と同一個体	
	160	一石五輪塔4類	(35.0)	13		小型品で白色凝灰岩製	
	159	地蔵	39	24	判読できず	両手は合掌している。台座部分には請花を施す。白色凝灰岩製	
169	170	一石宝篋印塔3類	(64)	27		基礎上面には反花を部分的に施す。白色凝灰岩製	
170	171	一石宝篋印塔3b類	91	27		基礎下半は土中に埋まる。宝珠と伏鉢には請花を施す。	
171	172	一石五輪塔4b類	52	13		小型品でノミ痕跡を消し切らない。白色凝灰岩製	
172	173	一石宝篋印塔4類	(65)	27		宝珠底面下とは伏鉢には反花を施す。基礎は白色凝灰岩製	
173	174	石殿（左前の袖壁）				1 7 6 と同一個体。白色凝灰岩製	
174	175	石殿（基礎の一部）	9	(47)	30	1 7 5 と同一個体。福光石製	
175	176	石宝篋印塔4類	(35)	18		宝珠は二重算盤玉形で、伏鉢には請花を施す。	
176	177	一石五輪塔3b類	48	15	（正面）文禄五天 □□□ 三月十九日	白色凝灰岩製	1596
177	178	一石五輪塔4a類	82	20	（正面）□□□ □□□二敬 □□□天	白色凝灰岩製	
178	179	一石宝篋印塔3b類	(65)	27		基礎上面には反花を伏鉢には請花を施す。白色凝灰岩製	

挿図番号	調査番号	種別	全高	最大幅	銘文	備考	西暦
138	138	石殿（柱材）	(35)	13		壁材を嵌め込む溝は一辺のみ。福光石製	
	139	一石宝篋印塔3b類	(38)	13.5		相輪部のみ残存。伏鉢には請花ほ施す。白色凝灰岩製	
140	140	特殊塔（笠部）	26.5	61		大型の笠部で上部に宝珠を持つ（単製石幢か）。白色凝灰岩製	
141	141	一石五輪塔4a類	70.5	19	（正面）慶長十六 帰真譽林西禅定門 六月一日	白色凝灰岩製	1611
	142	一石五輪塔3類または4類		21.5		岩窟内に143と並立。白色凝灰岩製	
	143	一石五輪塔3類または4類		21		岩窟内に142と並立。白色凝灰岩製	
	144	一石宝篋印塔3類または4類	(55.5)	29	（正面）慶長拾六年 帰真往譽妙久禅定尼 三月二日 敬白	塔身より上部が遺存。塔身に梵字キリーク。白色凝灰岩製	1611
145	145	組合せ宝篋印塔（基礎・笠部・台座）	(24.0)	40	（正面）□□慶［ ］ 當寺開山［ ］［ ］ 如月［ ］	台座には基礎受けの段がある。基礎上面は二段。	
146	146	石殿（基礎）	8	(82)		基礎の奥側で溝が「状に施される。福光石製	
147	147	円形台座	22	49		側面には請花が施される。無縫塔の基礎か	
	148	無縫塔（円形台座）		49		下部に請花が施される	
149	149	組合せ宝篋印塔3類（笠部BⅠ）	25	42		笠部下に請花が施される白色凝灰岩製	
	150	台石		43		水盤が施される	
151	151	一石宝篋印塔4類	93	26	（正面）寛永十三天 □□□□□ □□□□	宝珠は二重算盤形。伏鉢には請花、基礎上面には反花を施す。白色凝灰岩製	1636
	152	組合せ宝篋印塔3類（笠部BⅠ）		40		白色凝灰岩製	
153	153	組合せ宝篋印塔3類（相輪部BⅠ・笠部BⅠ・基礎CⅠ）		33		石殿を解体再利用した基壇上にある	
	154	組合せ宝篋印塔3類（相輪部BⅠ）	(26)	22		宝珠下には請花を施す。白色凝灰岩製。155と同一個体	
	155	組合せ宝篋印塔3類（基礎CⅠ）	31	32		下に台石もあり、原位置。基礎上面には反花を施すが、隅部だけ二重連弁。154と同一	
156	156	一石五輪塔4b類	(34.5)	13	（正面）寛十天 早世幼心童女 八月三日	白色凝灰岩製	1633
157	157	組合せ宝篋印塔1類（笠部A）	17.5	30		笠部下に縦連子を施す。白色凝灰岩製。16世紀第四半期	
	158	一石五輪塔4a類	(31.0)	15.5	（正面）寛永十天 帰真□□ □□□□□	福光石製で小型品	1633

挿図番号	126		124	123		121	120	119	118	117
調査番号		125			122					
種別	一石五輪塔5ａ類	台石	一石宝篋印塔3ｂ類	組合せ宝篋印塔3類（基礎部CⅠ）	組合せ宝篋印塔（笠部）	延石	地蔵	組合せ宝篋印塔（塔身・基礎CⅠ3）類	石殿（基礎）	石殿（基礎・両壁）
全高	61	8	80	24.5	(17)	6	(37.0)	63.5	(63.5)	20.5
最大幅	15	(41.5)	22	24	45	102	(15.5)	21.5	26.0	32.0
銘文	（火輪）（正面）元和三年キリーク 林□□□□永忠童女 穴□□□□一日 六月二日		（塔身）（正面）梵字キリーク 林□□□□長二拾年 穴□□□□一日 子	（正面）□□□□年敬 □□□□□□□禅尼 □□□□□□□日定 □□□□□□□白			（正面）□□□□□□□ □□□□□□□ □□□□□□□			
備考	白色凝灰岩製	福光石製	宝篋印塔上面は反花を施す。基礎上面は請花。白色凝灰岩製	18体分。基礎凝灰岩製（笠部）と同一個上面は反花。白色	白色凝灰岩製	加工痕跡を残すが丁寧な加工。福光石製	顔の部分は剥離している白色凝灰岩製	基礎上面に反花を施す白色凝灰岩製	基礎は3枚残る。溝の深さは一定していない。福光石製	天井と奥壁は欠損。基礎の前面両端に花立穴。福光石製
西暦	1617		1615							

挿図番号	127	128	129	130	131	132	133	134	135	136	137
調査番号											
種別	一石五輪塔4ｂ類	組合せ宝篋印塔（笠部BⅠ）3類	二石宝篋印塔または4類3	石殿（基礎）	組合せ宝篋印塔（笠部BⅠ）3類	地蔵	組合せ宝篋印塔（笠部BⅠ）3類	一石五輪塔5ａ類	石殿・切妻屋根・壁材・基礎・柱材（ ）	一石宝篋印塔4類3ｂ類	組合せ宝篋印塔（笠部BⅠ）3類
全高	53	21	(57.5)	10	25	46	23.5	77		(46)	19
最大幅	14.5	31	27	(64)	36.5	26	43	19		18	38.5
銘文	（正面）寛永九 □□□□□□□□ 四月廿二日		（塔身）（正面）梵字キリーク 四月十四日 慶長拾年 真妙□□□□ 禅尼 白			（右側）（左側）幼良童子童位 慶長拾八天七六					
備考	岩石の上に立つ。白色凝灰岩製	笠部下に段の凝灰岩製白色凝灰岩製の側面に請花を弁とする。上面	相輪は別材。刻字は上面に字内に朱を施す。基礎上面は反花を施す。白色凝灰岩製	基礎石の隅部で、上面に溝が施される。福光石製	笠部下には二段の請花を施す。白色凝灰岩製	鎌杖を持つ。白色凝灰岩製	下部は請花を施す。白色凝灰岩製	福光石製	竹村丹後守の石廟と同一型式。福光石製	相輪は欠損。伏鉢は請花を施す。小型品で白色凝灰岩製	笠下には請花を施す。白色凝灰岩製
西暦	1632		1607			1613					

挿図番号	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105
調査番号										
種別	一石五輪塔3ｂ類	組合せ宝篋印塔3類（産）	一石五輪塔3類（または4類のみ）（空風輪）	無縫塔	一石宝篋印塔3類（または4類）	台石	地蔵	一石五輪塔5ｂ類	一石五輪塔4ａ類	一石宝篋印塔3類（または4類）
全高	57	8		44	(93)	22	46	57	(55)	(55)
最大幅	16.5	26	14	20	32	24.5	31	14	20	24
銘文	（正面）幼雪女 慶長四天 八月十五日						（正面）□□□□ 慶長拾八年二月十日			（正面）慶長五年 □□妙体 □□禅定尼
備考	白色凝灰岩製	台座の上面に幅平なる連弁を施す。白色凝灰岩製	火輪以下は地中に埋まり正立している。白色凝灰岩製	底部に枘を持つ	基礎上面には反花を施す。白色凝灰岩製	9の基礎。上面に枘穴あり	右手に鎌状を表現。台座には請花を施す。白色凝灰岩製	福光石製	空風輪は欠損。白色凝灰岩製	相輪部欠損。基礎上面には反花。白色凝灰岩製
西暦	1599						1613			1600

挿図番号	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116
調査番号											
種別	組合せ宝篋印塔3類（笠部Ｂ１）	組合せ宝篋印塔3類（笠部Ｂ１）	一石五輪塔4ｂ類	一石五輪塔4ａ類	一石五輪塔4ｂ類	石宝篋印塔4類	組合せ宝篋印塔（塔身）	三石宝篋印塔2類（または3類）	**組合せ宝篋印塔3類（基礎Ｃ１）**	**石殿（切妻屋根）**	一石宝篋印塔3類（または4類）
全高	22.5	19	36	77	52	(65)	18	(69.5)	(21.0)	(26.0)	30.5
最大幅	34	34	16	21	21	28.5	18.5	28.0	(16.0)	(18.0)	46.5
銘文			（正面）慶長六年 □□重女 二月十日	（正面）慶長十 南無阿天 拾月十 陀佛 五日	（正面）□□□□ □□□□女 □□□□ 八日				（正面）慶長拾 □□年 □□□□ 拾月十日 禅定門 五日		（正面）慶長七天 宗元禅門 八月十九日
備考	相輪部欠損。基礎上面には反花を施す。白色凝灰岩製	笠部下には請花。白色凝灰岩製	空風輪は欠損。白色凝灰岩製	白色凝灰岩製	小型品。白色凝灰岩製	宝珠は二重算盤玉形。伏鉢には請花を施す。白色凝灰岩製	白色凝灰岩製	基礎は反花を施す。基礎上面は一体。基礎上面には反花を施す。	基礎上面には反花を施す。白色凝灰岩製	切妻屋根の一部は反り を持つ福光石製。	相輪部欠損。白色凝灰岩製
西暦	1599		1601	1606					1607		1602

挿図番号	調査番号	種別	全高	最大幅	銘文	備考	西暦
75	75	石殿（寄棟屋根）	26	(51.5)		寄棟屋根の半分が存存。復元梁行は72cm前後。福光石製	
	76	一石宝篋印塔3b類	102	24		尾根の最高所に立地。伏鉢と宝珠下には請花を施す。基礎上面には反花を施す	
	77	一石宝篋印塔3b類	114	26		伏鉢と宝珠下には請花を施す。基礎上面には反花を施す。白色凝灰岩製	
78	78	石殿（基礎）	9.5	(75)		基礎の1/3程度残存	
	79	一石五輪塔3類または4類				土中に正立して埋まる。空風輪は欠損し、火輪のみ露出している	
80	80	一石五輪塔3a類	77	24		完形。白色凝灰岩製	
	81	一石宝篋印塔4類	103	31		宝珠は二重算盤玉形、伏鉢には請花、基礎上面には反花を施す。白色凝灰岩製	
82	82	組合せ宝篋印塔3類（相輪部BⅡ1・基礎CⅠ）	(81)	28.5	（正面）慶長十二年 帰真□□□ □□□□	伏鉢は無装飾、宝珠下には請花を施す。白色凝灰岩製	1607
83	83	一石宝篋印塔3a類	(70)	28	（正面）元和四年 □□□禅定□ 三月廿七日	伏鉢は無装飾、基礎上面には反花を施す。白色凝灰岩製	1618
	84	一石宝篋印塔3類または4類	(48)	24	塔身に梵字キリーク	**台石上にあり、原位置を保つ。山側から拝する。基礎上面には反花を施す**	

挿図番号	調査番号	種別	全高	最大幅	銘文	備考	西暦
	85	一石宝篋印塔4類	76	21		**相輪元は伏鉢の造形がない。宝珠は二重算盤玉形。基礎上面には硬直化した五弁反花を施す**	
	86	一石宝篋印塔3類または4類	(53)	25	（正面）慶長拾九年 □□□□ □□□□	**基礎上面には硬直化した五弁反花を施す。白色凝灰岩製**	1614
	87	一石宝篋印塔4類	93	27		宝珠は二重算盤玉形となる。伏鉢には請花、基礎上面には反花を施す	
	88	一石宝篋印塔3類または4類	(66)	27		伏鉢には請花、基礎上面には反花を施す。白色凝灰岩製	
89	89	組合せ宝篋印塔3類（相輪部BⅠ）	67	24		突帯上と宝珠下には請花を施す。白色凝灰岩製	
	90	組合せ宝篋印塔3類（相輪部BⅡ1）	42	18		伏鉢は無装飾、基礎上面には反花を施す。白色凝灰岩製	
91	91	一石宝篋印塔3b類または4類	(44)	19	（正面）慶長拾八年 □□□□ 七月六日	塔身に梵字キリーク。白色凝灰岩製	1613
	92	組合せ宝篋印塔3類または4類（基礎3）	23	23.5	（正面）慶長五天 浄休禅定門 □月廿三日	基礎上面には反花を施す。刻字内に朱で着色する。白色凝灰岩製	1600
93	93	組合せ宝篋印塔3類（基礎CⅠ）	36	36	（正面）□□三年 帰真譽□禅定門 □□□日敬白	基礎上面には反花を施す。白色凝灰岩製	
	94	組合せ宝篋印塔3類（相輪部BⅡ1）	63	19		伏鉢は無装飾、宝珠下には請花を施す。白色凝灰岩製	
	95	一石五輪塔4a類	86	23.5		地輪に梵字キリーク。白色凝灰岩製	

挿図番号	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	64
調査番号	一石宝塔印塔3b類	一石宝塔印塔4類または一石宝塔印塔3b類	一石宝塔印塔4類または一石宝塔印塔3類	一石宝塔印塔4類または一石宝塔印塔3類	一石宝塔印塔4類	一石宝塔印塔4類	石殿（寄棟屋根）	組合せ宝塔印塔3類（笠部B Ⅰ）	台石	一石宝塔印塔4類または一石宝塔印塔3b類	一石五輪塔4a類
種別											
全高	76	(71)	(55)	(38)	106	(44.5)	(11)	19	6.5	(80)	71
最大幅	19	30	26	(21)	28	20	(36)	25	54.5	30	19.5
銘文			（正面）□□□□春聖屋妙香□□□□□□	（正面）□長十二天□□	（正面）□□寛八天真妙伏信女三月十七日						
備考	伏鉢は欠損。白色凝灰岩製	相輪部分は欠損。笠部段を施す。白色凝灰岩製	基礎の1・3は欠損。反・相輪基礎は欠損。笠部段を施す。白色凝灰岩製	基礎の1は欠損。反・相輪基礎は2は欠損。笠部段を施す。白色凝灰岩製	塔身に梵字キリーク。宝珠は二重蓮弁盤に玉形。白色で凝灰岩製	二基礎と塔身は欠損。白色凝灰岩製	屋根の1／3程度残存。光石製	軒下は請花を施す。白色凝灰岩製	27×14cm、深さ2.5cmの水盤付き	宝珠は欠損。白色凝灰岩製	宝塔は欠損。白色凝灰岩製
西暦				1607							

挿図番号	68	67	66	65	64	74	73	72	71	70	69
調査番号	一石宝塔印塔4類	一石宝塔印塔3b類または4類	一石宝塔印塔4類	組合せ宝塔印塔B Ⅱ1・3笠部（C・塔身）	一石五輪塔4a類	一石五輪塔4a類	組合せ宝塔印塔（基礎・型式不明）	一石宝塔印塔3b類または4類	一石宝塔印塔3b類	組合せ宝塔印塔C Ⅰ（基礎）	一石宝塔印塔3b類
種別											
全高	91	(73)	88	(83)	84	71		(63)	(68)		
最大幅	27	28	27.5	36	20	19.5	36	27.5	27	27.5	26
銘文	（基礎正面）梵字キリーク正保四天七月十八日	（基礎正面）梵字キリーク寛永十八天十二月六日信女					（正面）□□□□拾四□□□□□□□□妙休神暦定尼敬白				
備考	伏鉢は施す。白色凝灰岩製。反花は二重蓮弁盤玉形。基礎上面は欠損。反	伏鉢は欠損。基礎凝灰岩製。反花は施す。白色凝灰岩製。反	宝珠は二重蓮弁盤玉形。白色凝灰岩製。反花は欠損。基礎は欠損。反花は施す。白色凝灰岩製。反	伏鉢は施無装飾で白色凝灰岩製。宝珠は請花を施す。白色凝灰岩製	白色凝灰岩製	白色凝灰岩製。銘文の有無は不明	基礎の長さが残存。白色凝灰岩製	相輪は残存。笠部は欠損。基礎は欠損。笠部は下段が欠損。反花は下形に歪み、色凝灰岩製。基礎は流作部は	基礎は土中に埋まっている。白色凝灰岩製	基礎は土中に埋まる。白色凝灰岩製	笠部は土中に埋まる。下半は土中
西暦	1647	1641					1609？				

挿図番号	調査番号	種別	全高	最大幅	銘文	備考	西暦
42	41	40	39	38	37	36	
組合せ宝篋印塔3類（笠部B1・塔身）	石殿（屋根）	一石宝篋印塔3類または4類	一石宝篋印塔3a類	一石五輪塔4b類	一石宝篋印塔4類	一石宝篋印塔3b類または4類	
(38.5)	13		(64)	52	86	(69)	
35	(55)	30	27	15.5	22	26	
ク			（正面）□□□□慶長五年				
（正面）日輪に梵字キリー							
白色凝灰岩製	棟石の一部。福光石製	相輪は欠損。請花を施す。伏鉢は立花を施す。相輪以下は正面の伏鉢を施す。白色凝灰岩製。基礎上部は無装飾。相輪上部欠損。反花伏鉢。基礎上面は白色凝灰岩製	小型品。白色凝灰岩製	相輪形。伏鉢は二重。宝珠は請花を施す。白色凝灰岩製	相輪欠損。伏鉢は基礎上面は請花。反花を施す。白色凝灰岩製		
			1600				

挿図番号	調査番号	種別	全高	最大幅	銘文	備考	西暦
53	52	51	50	49	48	47	46
台石	石殿（客棟屋根）	一石五輪塔4b類	一石宝篋印塔4類	一石五輪塔4a類	一石宝篋印塔3b類または4類	一石宝篋印塔3b類または4類	一石宝篋印塔4類
8	(14)	50	86	67			81
58.5	(40)	16	27	21	25	25	22
			（正面）□□安□□九月十□□六日天士	（正面）□□□□梵字アー十月九日			（正面）寛永九天□□真□□十二月六日信女
24×12cm、深さ4.5の水盤付き	軒先部分のみ残存。壁面に材を嵌める。福光石製	白色凝灰岩製	年号は慶安カ。白色凝灰岩製	水輪に梵字・バ。白色凝灰岩製	相輪は欠損。請花を施す。白色凝灰岩製。基礎上面は反花	宝珠は欠損。基礎は下端が欠損。請花を施す。基礎上面は反花。白色凝灰岩製	塔身に梵字キリーク。白色凝灰岩製
							1632

挿図番号	調査番号	種別	全高	最大幅	銘文	備考	西暦
45	44	43					
一石宝篋印塔4類	一石宝篋印塔3b類または4類	石殿					
90	(63)						
27	25	55					
白色凝灰岩製	相輪欠損。伏鉢は請花、基礎上部は反花を施す。白色凝灰岩製	福光石製					

挿図番号											
調査番号	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	22
種別	一石宝篋印塔3類	一石宝篋印塔3ｂ類	一石宝篋印塔2（または3類）	組合せ宝篋印塔3類（基礎ＣⅠ）	地蔵	地蔵	笠	一石宝篋印塔3ｂ類	一石五輪塔4ｂ類	一石宝篋印塔3（または4類）	組合せ宝篋印塔Ｂ１（相輪部Ｂ１）
全高	(20)	97	(66)	26	51	52	(10)	(64)	(35)	(24)	(73)
最大幅	(17)	28	30	30	29	30	(47)	26	14.5	25	22.5
銘文		（正面）□□□五年□□□春永童子		（正面）元和成午四天□□□佛真□□□南□□五日信士	（正面）□□□□寛永十六己十二月二日卯年	日（正面）□□□□寛永六天七月廿三		（正面）元和六年□□□□焼了禅定門五月廿七日			
備考	土中に正立して埋没し、相輪下部は表に出る。宝珠部分のみ地に埋没し、相輪は突帯より上では折損。上は無装飾。白色凝灰岩製	土中に正立して埋没し、相輪は突帯より上は無装飾。白色凝灰岩製	白色凝灰岩製。基礎上面には弁波型の請花を表現	基礎上面は反花を施す。白色凝灰岩製	合掌印	合掌印	円形の笠状製品	白色凝灰岩製	小型品で白色凝灰岩製	土中に正立して埋没し、相輪は突帯より上は無装飾。白色凝灰岩製	組合せ宝篋印塔Ｂ１（相輪部Ｂ１）は相輪部Ｂ１（宝珠部）と突帯上は無装飾。白色凝灰岩製
西暦				1618	1639	1629		1620			

挿図番号											
調査番号	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22
種別	一石宝篋印塔4類	一石宝篋印塔3ａ類	八角柱	組合せ宝篋印塔2（または3類基礎）	一石五輪塔4ｂ類	組合せ宝篋印塔Ｂ１（定形外・基礎）	組合せ宝篋印塔3類（笠部Ｂ１）	組合せ宝篋印塔3類（相輪部Ｂ１）	組合せ宝篋印塔3類（笠部Ｂ１）	一石宝篋印塔4類	組合せ宝篋印塔3類（相輪部Ｂ１）
全高	93.5	(67)	(45)	24.5	55	(55)	32.5	79	(22)	(52)	(73)
最大幅	30	26	16	31	14	25	53	27	47	27	22.5
銘文	（正面）□□□□年三月十一日尼□	（正面）慶長三年□□□十月□日		（正面）文禄三天永昌惠禅定尼正月初三□	（地輪正面）寛永十九年福月童女廿四日						
備考	白色凝灰岩製	笠部は無装飾。白色凝灰岩製	単制石幢。身部隅に納をもつ。白色凝灰岩製	下部は凝灰岩製。土中に埋まる。白色凝灰岩製	基礎は一辺に五弁。白色凝灰岩製	白色凝灰岩製	下部は二重に施す。座に反花が付く。座の下に二段目が高さ9cm、幅台座の下に台座は高さ1cm。白色凝灰岩製	突帯上は宝珠下製。請花を施す。白色凝灰岩製	白色凝灰岩製	土中に正立して埋没し、上は二分の一出る。宝珠の部分は無装飾。請花を施す。白色凝灰岩製	宝珠下は突帯上は無装飾。請花を施す。白色凝灰岩製
西暦		1598		1594	1642						

第3表　大谷地区徳善寺上墓地の石造物

挿図番号・調査番号	種別	全高	最大幅	銘文	備考	西暦
K1・K3	組合せ宝篋印塔3類（相輪部BⅠ+笠部BⅠ）	(73.5)	40		福光石製。相輪の宝珠下と突帯上に請花。伏鉢は無装飾	
K2・K9	組合せ宝篋印塔3類（相輪部BⅠ+笠部BⅠ）	(73.5)	40		福光石製。相輪の宝珠下と突帯上に請花。伏鉢は無装飾	
K4	一石宝篋印塔3a類	(75)	28		白色凝灰岩製。伏鉢は無装飾	
K5	位牌形墓標	(49)	(29.5)		表面は剥離。下部欠損。福光石製	
K6	一石五輪塔4a類	(55)	19.5	（正面）承応三年 ・・・・元心○○信女 ・・・・四月二日○○	空風輪は欠損。福光石製	1654
K7	組合せ宝篋印塔3類カ（地輪CⅠ）	(22)	(24)	（正面）延宝三□ □晴眼□□ □□□□	地輪の半分は欠損。福光石製	1675
K8	組合せ宝篋印塔3類（相輪BⅠ、笠部BⅠ、基礎CⅠ）	(197.5)	61	（正面）塔身正面に日輪内に梵字で阿弥陀三尊を表す	福光石製。笠下部は二段請花となる。	
K10	組合せ宝篋印塔3類（相輪部BⅠ）	(57)	21		福光石製。宝珠下と突帯上に請花。主弁は二重連弁となる。伏鉢は無装飾。	
K11	一石宝篋印塔4類	(33)	(18)		宝珠は二重算盤玉状。相輪元の伏鉢に請花を施す。福光石製	
K12	組合せ宝篋印塔3類（相輪部BⅠ、笠部BⅠ、基礎CⅠ）	184+台座高	62	（正面）□□□□ □譽楽永信□	笠部下部に2段請花。相輪の宝珠下と突帯上に請花を施す。伏鉢は無装飾。基礎上面は一辺三弁の反花。塔身正面には日輪内に阿弥陀三尊の梵字。福光石製	

挿図番号・調査番号	種別	全高	最大幅	銘文	備考	西暦
1	一石宝篋印塔3または4類	(57)	27		相輪部欠損。基礎上面に反花。白色凝灰岩製	
2	一石宝篋印塔3b類	70	20		宝珠下と伏鉢に請花を施す。白色凝灰岩製	
3	一石宝篋印塔3または4類	(57)	26		相輪は欠損。基礎上面は反花。白色凝灰岩製	
4	一石宝篋印塔3b類	(69)	23.5	（正面）慶長二暦 満誉壽者 十月二十日	伏鉢は請花、基礎上面は反花を施す。白色凝灰岩製	1597
5	一石五輪塔4b類	(36)	15.5	（正面）寛永四年 帰真秋□童女 九月十三日	火輪正面に梵字キリーク。白色凝灰岩製	1627
6	無縫塔	(64)	22		白色凝灰岩製	
7	石殿（屋根）	21	55		福光石製。棟石の断面形は蒲鉾型	
8	組合せ宝篋印塔3類（相輪部BⅡ1）	(58)	17		白色凝灰岩製。突帯は断面三角形。伏鉢は無装飾	
9	一石宝篋印塔3b類	93	29	（正面）時元和六年 帰真□松月童子之 三月八日敬白 塔身正面に梵字キリーク	宝珠下と伏鉢には請花を施す。基礎上面には反花を施す。白色凝灰岩製	1620
10	一石宝篋印塔4類	91	27	（正面）元和八年 帰真浄春信士 十二月十七日	宝珠下と伏鉢には請花を施す。基礎上面には反花を施す。白色凝灰岩製	1622
11	一石宝篋印塔3b類	72	21	（正面）寛永□□年 帰□□□ 九月廿二日 塔身正面に梵字キリーク	宝珠下と伏鉢に請花を施す。基礎上面には反花を施す。白色凝灰岩製	

写真図版

写真図版１

豊栄神社境内（2001 年）

豊栄神社境内（2022 年）

豊栄神社本殿後方から境内を望む（2001 年）

豊栄神社境内北側に集積された石造物（2022 年）

明治時代から大正時代の豊栄神社

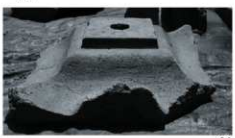
豊栄神社の今昔

65

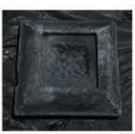
69

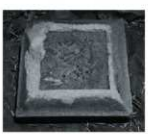
41

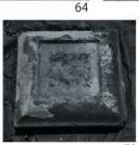
39

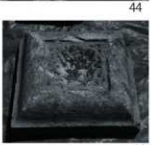

64

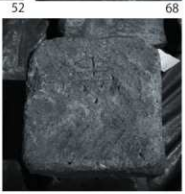
44


50


51


52


68


66

38

豊栄神社燈籠部材（上半部）

写真図版３

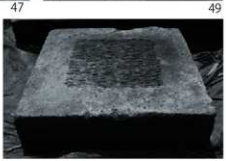
37

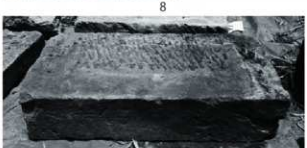
46

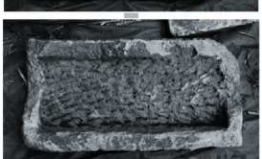
47

49

8

35

4



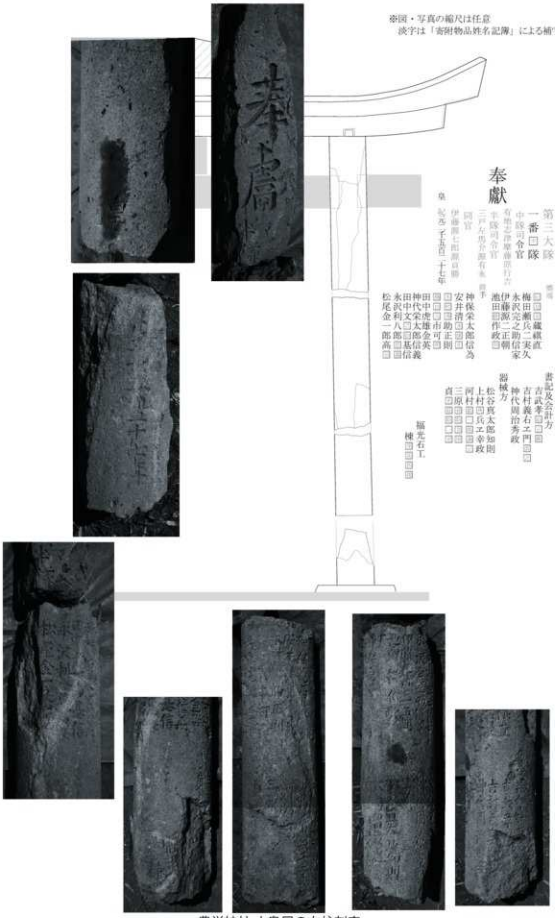
16

9

豊栄神社燈籠部材（下半部）

豊栄神社 大鳥居

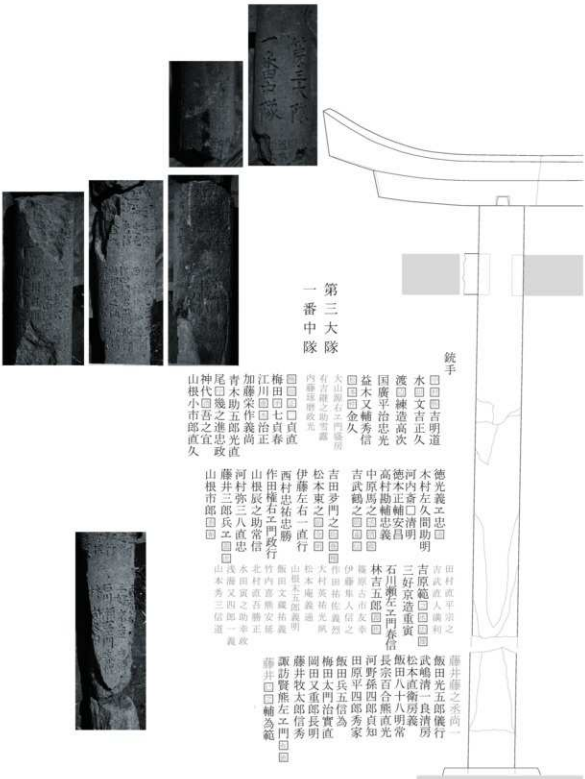
写真図版５

豊栄神社 小鳥居



※図・写真の縮尺は任意
欠字は「書附物品姓名記簿」による補字

豊栄神社 小鳥居の右柱刻字



豊栄神社 小鳥居の左柱刻字

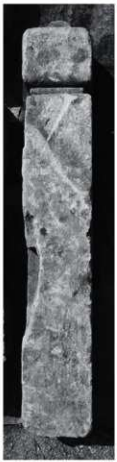
長辺側　冒頭

短辺側

長辺側　文末

豊栄神社 狛犬台座

写真図版９


83

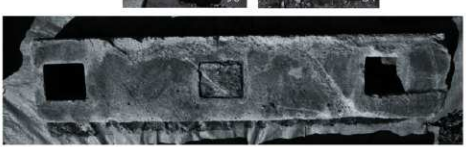
90

84

82

81

2



85

80

53

74

豊栄神社 玉垣部材

石造物の地中保管作業（拝殿南側）

石造物の地中保管作業（拝殿北側）

石造物の地中保管作業完了状況（拝殿南側）

石造物の地中保管作業完了状況（拝殿北側）

1　下段基礎の設置

2　上段基礎の設置

3　地輪の設置

4　竿の設置

5　笠・宝珠の設置

藤山小源太直足 寄進灯籠の復元設置状況

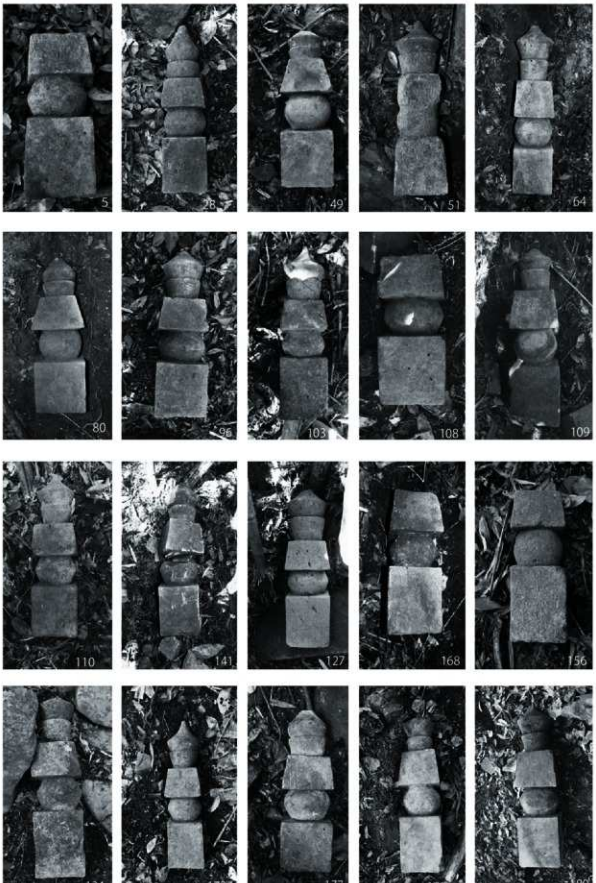
豊栄神社 石造物の地中保存及び燈籠再設置状況

写真図版 11

下段左岩窟内の組合せ宝篋印塔

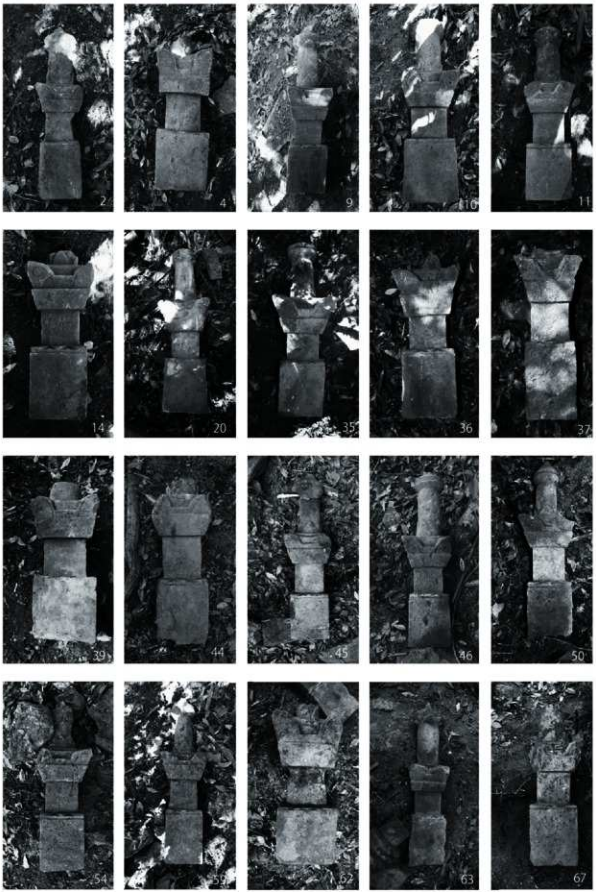
下段左岩窟（下方より）

徳善寺上墓地 下段岩窟

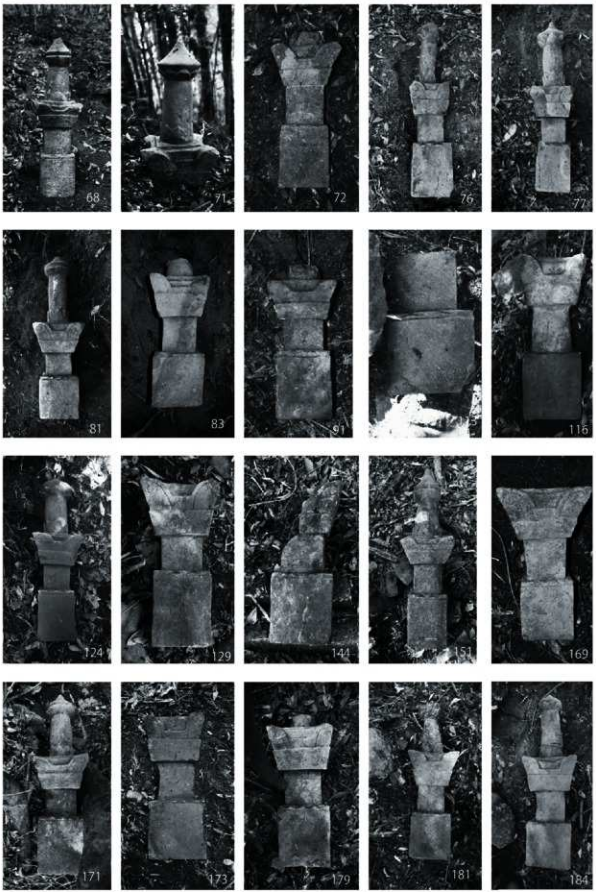


徳善寺上墓地 一石五輪塔

写真図版 13

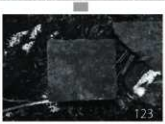


徳善寺上墓地 一石宝篋印塔（その１）



徳善寺上墓地 一石宝篋印塔（その２）

写真図版 15



徳善寺上墓地 組合せ宝篋印塔

徳善寺上墓地 無縫塔・地蔵ほか

徳善寺上墓地 石廟

報告書抄録

ふりがな	いわみぎんざんいせきせきぞうぶつちょうさほうこくしょ
書名	石見銀山遺跡石造物調査報告書
副書名	下河原地区 豊栄神社・大谷地区 徳善寺上墓地
巻次	
シリーズ名	石見銀山遺跡石造物調査報告書
シリーズ番号	22
編執筆者	岩橋孝典
編集機関	島根県教育委員会・大田市教育委員会
所在地	〒690-8502 島根県松江市殿町１番地 TEL 0852-22-5642 〒694-0064 島根県大田市大田町大田ロ1111番地 TEL 0854-82-1600
発行機関	島根県教育委員会
発行年月	2024年8月

名称	所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査年月日
豊栄神社	島根県大田市大森町	33205	35度6分33秒	132度26分17秒	2022年５月 ～ 2022年８月
徳善寺上墓地	島根県大田市大森町	33205	35度5分57秒	132度25分36秒	2023年10月 ～ 2024年１月

調査原因	石見銀山遺跡総合調査

名称	所在地	主な時代	石造物
豊栄神社	大田市大森町	江戸時代	燈籠、鳥居、狛犬、手水鉢、玉垣、建築部材等
徳善寺上墓地	大田市大森町	安土桃山時代 ～江戸時代	組合せ宝篋印塔、一石五輪塔、一石宝篋印塔、無縫塔、石廟、地蔵、形式不明の部材

石見銀山遺跡石造物調査報告書22

－下河原地区 豊栄神社－
－大谷地区 徳善寺上墓地－

令和6（2024）年8月

編　集　島根県教育委員会／大田市教育委員会
松江市殿町１番地／大田市大田町大田ロ1111番地

発　行　島根県教育委員会
松江市殿町１番地

ＵＲＬ　http://www.pref.shimane.lg.jp/sekaiisan/iwami_ginzan/

印　刷　有限会社 松陽印刷所